

宮城県多賀城跡調査研究所年報1976

# 多賀城跡

— 昭和51年度発掘調査概報 —

宮城県教育委員会

宮城県多賀城跡調査研究所

# 序 文

当研究所の本年度の主たる事業は、多賀城跡の西南部、五万崎地区を対象とする第 28・29 次の発掘調査である。この地は、かねてから先学により、政庁にも匹敵する一部であろうと想定されていたところである。

本年度の調査は、第 2 次 5 ヶ年計画の第 3 年次にあたる。この地の調査は、実は第 1 次 5 ヶ年計画にももりこまれていたが、実施にはいたらず、改めて第 2 次 5 ヶ年計画に組入れられたものである。われわれにとって、いわば懸案となっていた箇所であり、調査の結果かずかずの新知見を得ることができた。

当研究所は、昭和 44 年に発足して以来、休むことなく発掘調査を実施してきたが、本年は、4 月から 11 月初旬までを限って調査に充てた。これは、昨年の多賀城跡調査研究指導委員会において諸先生より、野外の発掘調査に片寄りすぎず、遺構・遺物の資料化も十分行う様にとの指導があったためとった措置である。その結果調査終了から本概報作成までに従来より若干の余裕が生じた。そして、本概報には、従来のものに比して、やや詳細な成果をもりこむことができた、ひそかに自負している。

刊行にあたって、日頃種々御指導いただいている指導委員諸先生をはじめ、文化庁・多賀城市の関係各位、および菊地安右工門氏を始めとする地元各位、並びに作業員の方々に対し深謝の意を表したい。

# 目 次

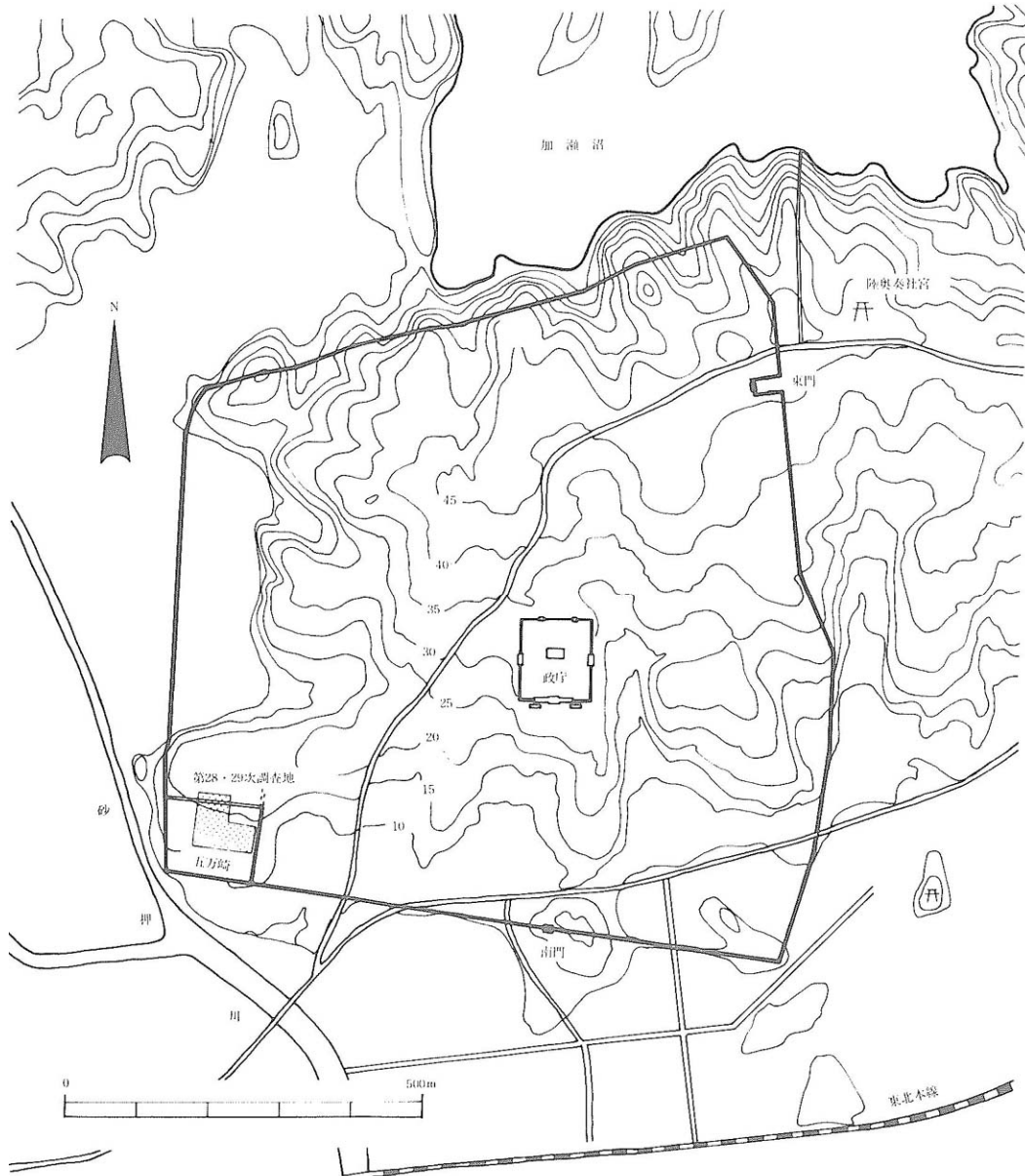
I	調査計画	1
II	調査経過	3
III	調査地区の層序	8
IV	発見遺構	11
V	出土遺物	34
VI	考察	61
VII	多賀城鍛冶工房遺構と出土鉄滓(特別寄稿) 窪田蔵郎	65
VIII	付章	68
	A 調査成果の普及と関連研究活動	
	B 研究成果刊行物	

---

この年報の製作、執筆、編集には、当研究所の氏家和典、桑原滋郎、平川南、進藤秋輝、高野芳宏、鎌田俊昭、古川雅清があたった。第VII章多賀城鍛冶工房遺構と出土鉄滓については、日本鉄鋼連盟資料室の窪田蔵郎氏に御寄稿を頂いた。東北歴史資料館研究員の藤沼邦彦氏には中世陶器や磁器の問題で多大の御教示を賜わった。

# I. 調査計画

昭和51年度の発掘調査は、昭和50年10月1日の第11回多賀城跡調査研究指導委員会で指導をうけて、一部改訂を加えた、第2次5ヵ年計画の第3年次にあたる。さいわい発掘事業費については、国庫補助金の内示(総経費2,200万円のうち、国庫補助金1,100万円)を得たので、次のように実施計画を立案した(表1)。



第1図 昭和51年度発掘調査地区

表1 発掘調査計画表

調査回数	調査地区	調査面積	期間(埋め戻し含む)
第28次	外郭西地域南部(字五万崎)	1,980 m <sup>2</sup> (600坪)	4月～7月半
第29次	〃	1,980 m <sup>2</sup> (600坪)	7月半～10月

この五万崎地区は多賀城外郭の西南隅にあたり、南辺・西辺の外郭築地の他に、東辺・北辺にも築地状の高まりがあり、築地で囲まれた郭を構成する観を呈していた。その規模も政庁とほぼ同じで、この地域に政庁に匹敵する官衙の存在が予想されていた。遺物も極めて多く散布することより、多賀城跡の官衙群を理解するためには不可避な地域であった。そこで、第28次調査では想定郭内の中央部を中心に、区画線の構造、及び郭内の遺構群を把握することに目的を置いた。一方第29次調査では郭内の東辺付近を対象として郭内での遺構の分布と構成を把握する調査を行った。第28次、29次の発掘調査ではこれまで多賀城跡では不明であった11世紀以降の官衙遺構が発見され、更にこの一郭が北方に延びることが判明した。ここでは古代末から近世までの遺構が複雑に重なり調査は至難を極めた。

昭和51年度の発掘調査の実施状況はつぎのとおりである(表2)。

表2 発掘調査実施状況表

調査回数	調査地区	調査面積	期間(埋め戻し含む)
第28次	外郭西地域南部(字五万崎)	1,800 m <sup>2</sup> (550坪)	4月1日～8月15日
第29次	〃	2,000 m <sup>2</sup> (660坪)	8月15日～11月7日

その他、年間を通じて、出土遺物の整理を行なった。

なお、発掘調査事業と並行して、特別史跡多賀城跡の外郭東南隅の環境整備事業(総経費1,000万円、うち国庫補助額500万円)を行った。

## Ⅱ．調 査 経 過

第 28 次、29 次調査は多賀城市市川字五万崎 34 番地のうち、3,800 m<sup>2</sup>(1,200 坪)を対象として実施した。この地域は特別史跡多賀城跡の西南隅にあたる平坦な台地で、外郭南辺・西辺築地が、その南限・西限を画している(第 1 図)。さらに注目すべきことは北辺と東辺にも築地状の高まりが認められ、四至を画した一郭を形成する点である。このように郭を構成するような地区は政庁を除くと他にはなく、その規模も東西約 130m×南北 120m と政庁のそれと酷似する。加えて、付近には須恵器、土師器、瓦等が特に多く散布することから、政庁に匹敵するような重要な遺構群があると予想されていた。

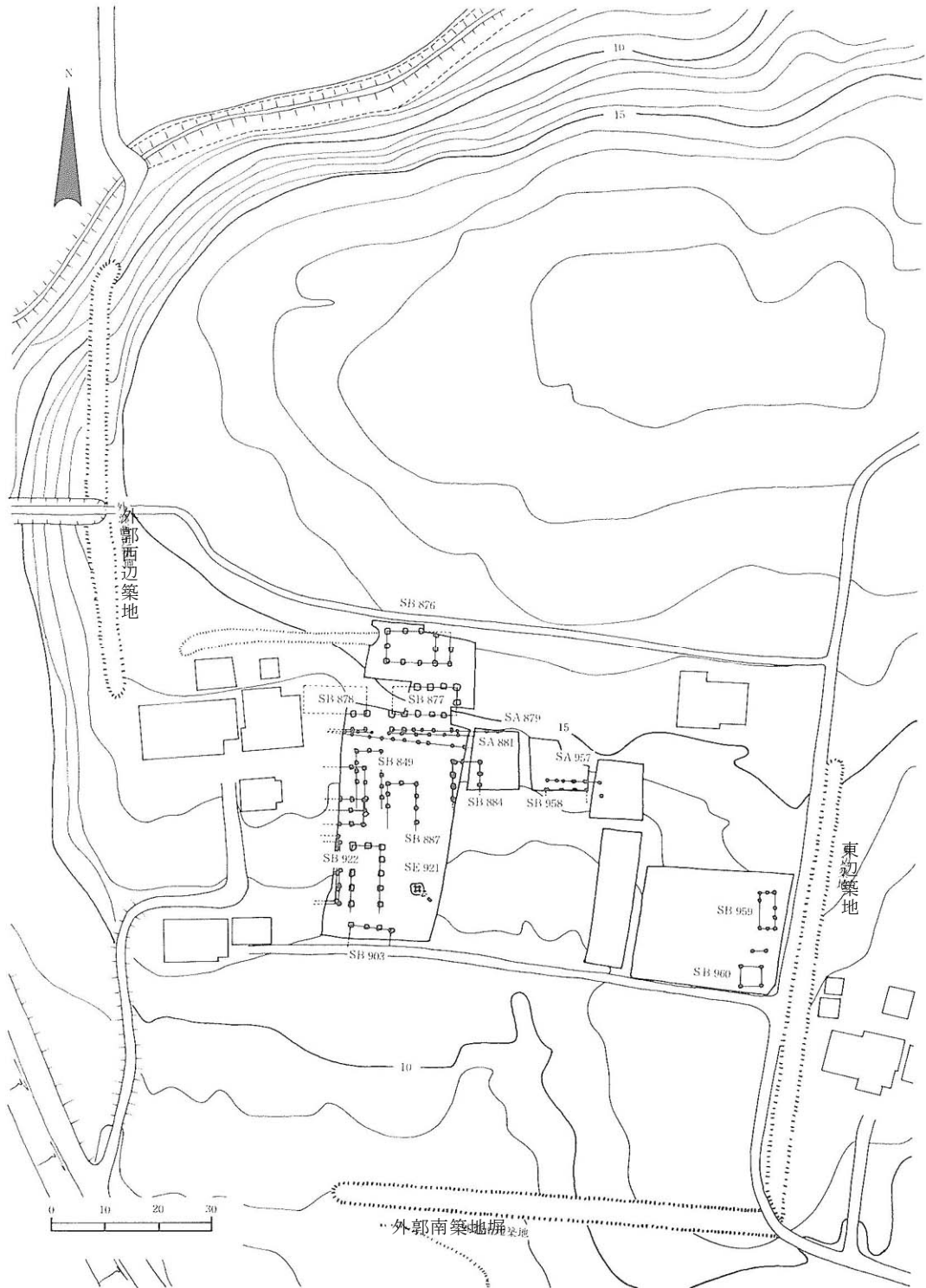
そこで、この地区が果して郭を構成しているかどうかを確認することと、その中での遺構の分布、構成、成立年代を把握することを目的として、北辺の築地状の高まりを含めて、郭内の 4 分の 1 にあたる北東部分の調査を実施した。

発掘調査に先立ち、あらかじめ設定していた基準杭をもとに、東西 30m×南北 60m の発掘区を設定した(4 月 8 日)。次いで発掘区の南から表土除去作業に入った(4 月 9 日～15 日)。表土を除去したところ、調査区の北部と西部はすぐに地山が現われたが、南東方向に行くにつれ、第Ⅱ層の黒褐色砂質土が厚く堆積していた。第Ⅱ層面を精査した結果、SD925 南北溝、SD926 東西溝、多数の円形の柱穴群、土拵を検出した。また、北寄り、西寄りの地山が露出している所では、SA879・880・881、SX911 工房跡等を発見した。ところが、SD925・926 溝の埋まり土中には幕末期に比定される陶器(切込焼)等が含まれており、比較的新しい時期のものと判断されたため、完全に掘り上げた。SD925 溝の側壁で層序を観察したところ、第Ⅱ層は上層の第Ⅱa 層(黒褐色砂質土)と第Ⅱb 層(黒色砂質土)に分かれ、さらに下には第Ⅲ層(地山くずを含む黄褐色土の互層)が続いていた。しかし、Ⅱb 層の分布は極めて局部的なため、Ⅱa、b 層を一括して同一の成因による自然堆積層と解釈した(4 月 16 日～20 日)(第 4 図)。

遺構検出と並行して、実測用の遺方を設定し、平面図・断面図を作成し、その終了をまって写真撮影をした(4 月 24 日～5 月 10 日)。

その後、柱穴群の埋土と第Ⅱ層の土質・色調がきわめて酷似していたため、個々の柱穴を断ち割り、柱穴になるか否かの検討をした。なお、第Ⅱ層中から洪武通宝が出土し、第Ⅱa 層は 1368 年(洪武通宝初鑄年代)以降の自然堆積層であることが判明した(5 月 12～6 月 20 日)。

第Ⅱ層面での補足調査の完了を待って、第Ⅱ層を除去し、第Ⅲ層面での遺構検出に入っ



第2図 五万崎地区全体図

た。第Ⅲ層は黄褐色砂質土と粘土を互層に積んだ盛土整地層で、その分布は第Ⅱ層の場合と同様南東に行くにつれ厚く残っていた(第4図)。また第Ⅲ層の直上に局部的にはあるが、灰白色粘土の整地層が認められた。この第Ⅲ層上からはSB889・891・893・887・899建物跡やSK913土拵など各種の遺構が複雑に重複して発見された(5月14日～7月8日)。とくに、SB887建物跡の東では第Ⅲ層を切る掘込地業を発見した。その規模は東西7m以上、南北6m以上と思われ、粗い版築をしていた。この掘込地業上面にはSX912工房跡が営まれており、6ヶ所に焼面を残していることから遺構面がこの付近では残存しているものと判断できた。この工房跡の上層には黒褐色土が乗っており、その分布もこの付近(東西3m×南北5m)に限られていた。この黒褐色土層からはヘラミガキを施した須恵器を含め、多量の供膳容器を中心とした土器が、完形品に近い形で出土し心土層の分布が限定されていることや、遺物の出土状況から、この土層は土器とともに、SX912工房跡が廃絶した後に一括投棄されたため、形成されたものと判断された。分布する発掘小区の名称をとり、IS082層とした。本来の第Ⅱ層はこれを覆っていた(5月27日)。

また、SK885土拵付近には灰白褐色土の整地層があり、第Ⅲ層の下位にあっていた。SK885土砦がこの整地層を、SA886柱穴列が土砦埋土を切っており、加えて、第Ⅲ層中には国分寺下層式、栗圀式土師器が比較的多く含まれていることから、第Ⅲ層下にはSK885土拵と同時期の一段古い遺構の存在が考えられた(5月26、27日)。

次に発掘区の東南で、SK917土拵を検出した。発掘区の東壁で層序を観察したところ、この土拵は、第Ⅱa層には覆われているが、第Ⅱb層を切っていた。土砦は3重層より成る自然堆積層で埋まっていた。この堆積層の2層より「政和通宝」(1111～1118)や天目茶碗、中世陶器(甕)が出土し、さきの第Ⅱ層が中世以降の堆積層であるとした見解を、裏付けた。SK917土拵を媒介として、第Ⅱa、Ⅱb層は時期を異にする堆積層と判断された(6月30日～7月3日)。(註1)

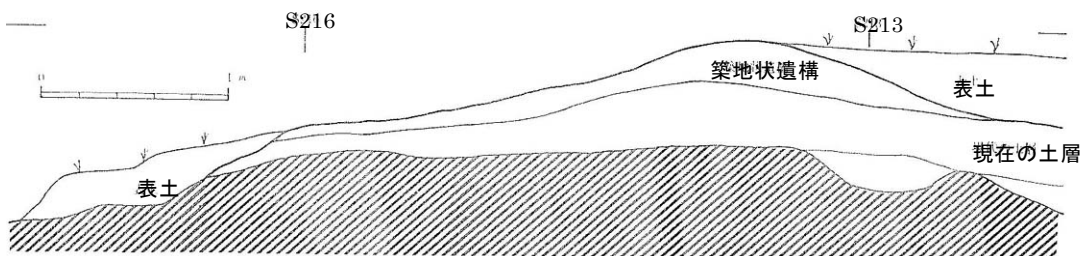
しかも、この付近は地形的に南に流れる谷頭付近にあると判断されたため、更に下層の層序を把握する必要からSK917土拵の一部を掘り下げたところ、SK956池状遺構と思われる遺構を検出した。SK956遺構は第Ⅲ層下の地山面から掘られており、第Ⅲ層より古いものであった。ところが、池の自然堆積層には内黒処理した回転糸切りの土師器杯や須恵系土器杯片と思われる破片が含まれていた。従って、その上層の第Ⅲ層(整地層)には11世紀以降の年代が与えられた(7月3・4日)。また、この遺構の南で、やはり同時期のSE921井戸跡があり、これを完掘した(6月30日～8月13日)。

第Ⅲ層面の遺構検出後、平面図、断面図の作成、写真撮影を行った。その後、柱穴の断ち割り等の補足調査をした。最初に設定したトレンチの北から10mほどのところに落差



1m 程の段があり、これをもって段の南の地区の調査を終えた(7月9日～8月13日)。

第Ⅲ層面での遺構実測と並行して、段の北側の北辺築地状の高まりを究明する調査をした。その結果、この高まりは表土上に積まれた後世の地境いであった(第3図)。精査したところ、この地区でSB876建物跡、S1906・908住居跡等を検出し、この地区の官衙遺構群が更に北に延びることが確実になった。遺構検出後、遺方を設定し、平面図、断面図を作成し、写真撮影をした。補足調査として柱穴の断割りをした(7月4日～13日)。



第3図 北辺築地状遺構断面図

次にSK885土壌付近に存在した第Ⅲ層下の遺構の存否を確認する調査をした。第Ⅲ層を除去したところ、下層には全く遺構がなく、さきの灰白褐色土は第Ⅲ層(整地層)と同一のものであった。第Ⅲ層中には奈良時代の土器とともに、須恵系土器も含まれていた。第Ⅲ層下に遺構が存在しないことを確認して第28次調査を終え、図面をもとに遺構の検討を行なった(8月7日)。

第28次調査で、この地区には須恵系土器に代表される時期、すなわち11世紀前後の官衙遺構が、かなり密集した形で存在し、しかもより北に拡大することを確認した。

第29次調査では、第28次調査の結果を踏まえて、この官衙遺構が東辺築地と目される東端の地域で、どのような分布や構成を示すかという点に大きな目的を設定して調査を実施した。

発掘調査にさきだち、基準点をもとに、第2図のように東辺築地想定付近に力点をおいて調査地区を鍵手状に設定した(8月18日)。調査地区は大きく3小地区になるが、記述の煩雑をさけるため、東地区・西地区・北地区として記述する(第7図)。

東地区から表土を除去し(8月18日～9月2日)、並行して遺構検出をした。調査地区の東壁より16mの範囲では表土下が直接地山面であった。その西には暗褐色土の自然推積による第Ⅱ層があって、西南で厚く堆積する状況であった。東の地山面からSB959・960建物跡をはじめ多数の溝を、第Ⅱ層面からは直径20cm前後の円形の柱穴群を発見した(8月27日～9月7日)。ついで、この地区に遺方を設定し、平面図、断面図を作成し、写真撮影をした(9月7日～9月22日)。

東地区の実測と並行して、西地区の表土除去を行なった。西地区の北半は表土下が地山であり、さきの第Ⅱ層は発掘区の西南隅を中心に径 20m 前後の範囲に限って存在することが確かめられた。第Ⅱ層面から、やはり直径 20 cm 前後の円形の柱穴や土拵、溝を多数検出したが、建物としてまとまるものはなかった(9月7日～9月17日)。第Ⅱ層面での遺構検出の終了をまって、遣方を設定し、平面図を作成した(9月24日～9月29日)。つぎに、第Ⅱ層を除去し、第Ⅲ層面の遺構検出をした。第Ⅱ層には熙寧元宝(1068年初鑄)、天聖元宝(1029年初鑄)や中世陶器が含まれていた。第Ⅲ層面からは3条の溝が発見されただけで遺構の分布はきわめて薄かった(9月30日～10月7日)。

そこで、断面観察をしながら、第Ⅲ層を除去し、第Ⅳ層面の遺構検出をした。その結果第Ⅲ層は数層の互層より成る盛土整地層であった。第Ⅲ層中には須恵系土器の杯や第Ⅳ期の平瓦が含まれていた。第Ⅳ層面で、数条の溝と柱穴群を発見したが、建物にまとまるものはなかった(10月8日～10月15日)。実測した後、この第Ⅳ層を除去したところ、第Ⅳ層は粘質の強い黒褐色土の自然堆積層であった。さらに下層には縄文前期の土器だけを含む第Ⅴ層があった。第Ⅳ層面の下には古代の遺構が存在しないと判断された(10月16日～10月18日)(第5図)。

次いで、第28次調査で発見した SA879・880・881 柱穴列や建物跡との関係を把握するため北地区の調査を行なった。この地区では表土下が直接地山であった。地山面より、SA879 柱穴列の続きを2間分、SB884 建物跡の東側柱穴列の他、新たに SA959 柱穴列、SB960 建物跡の北側柱穴列を発見した(9月22日～10月12日)。平面図を作成し、写真撮影をした後、補足調査として柱穴の断ち割りを行ない。全調査を終了した(10月19日)。

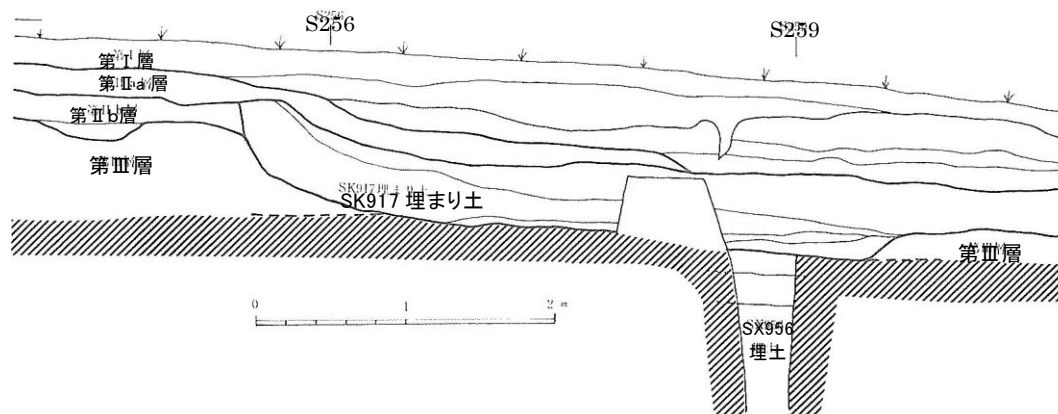
なお、7月24日には現地説明会を行った。

(註1)発掘調査後に、遺物整理をした結果第Ⅱb層中にも、中世陶器が含まれることが判明した。よって第Ⅱa層と第Ⅱb層は中世以降の堆積層ではあるが、第Ⅱa層、第Ⅱb層上面はおのおの遺構期を表わすものであった。

### Ⅲ．調査地区の層序

#### A. 第 28 次調査地区の層序

調査地区の層序が良好に現われているトレンチ東壁の層位断面図を基に、下層よりその主要な点を記述すれば以下のようなになる(第 4 図)。



第 4 図 第 28 次調査地区層序図

(1)地山面は黄褐色の岩盤で、北から南に傾斜する。そのため、調査地区の東南隅は小さな谷頭を形成する。地山面から検出される遺構は SK956 池状遺構だけである。上層の第Ⅲ層との間には旧表土がないことから地山面は第Ⅲ層を築成する前に削平を受けていると考えられる。

(2)池状遺構の埋まり土は自然堆積層である。堆積土中には、第Ⅲ期の平瓦や回転糸切りで底部を切り離し、調整を加えない内黒の土師器杯とともに須恵系土器の杯と思われる破片がある(第 40 図)。

(3)第Ⅲ層は地山上、または SK956 池状遺構の埋まり土上に灰褐色砂質土や粘土を互層に積んだ盛土整地層である。整地層は厚さ 0.5m 程で、SK885 土砧跡の南に分布する。その範囲は東西約 21m 以上、南北 34m 以上と推定される。土質、色調は南に行くにつれ、炭・焼土の混入が多くなり灰黒色土に近くなる。方形の柱穴を有する建物跡のほとんどが、この整地層上面で検出される。整地層中からは、奈良時代の土器に混じって、緑粕陶器や須恵系土器が出土する。従って、須恵系土器の所属年代より、この整地層は 11 世紀前後以降と考えられる。

(4)SX912 工房跡の付近に掘込地業がある。規模は南北 5.5m 以上×東西 7m 以上と推定

される。第Ⅲ層面から掘り込んでおり、地業埋め土の厚さは0.5m～0.6mを計る。埋め土には焼土混りの暗褐色土・明褐色土を用い、粗く版築している。掘込地業上面にSX912工房跡が営まれており、さらに上層をIS082層が覆う。

(5)第Ⅲ層上には灰白色粘土の整地層がある。調査地区内で局部的にみられる。ただし、掘込地業土との重複関係はなく、その前後関係についてはわからない。

(6)IS082層はSX912工房跡を覆う。東西3m、南北5mの範囲に分布し、中に完形品に近い多量の土器を含むことから、一括投棄された土層と考えられる。黒褐色を呈する。層中にヘラミガキのある須恵器や須恵系土器の杯が包含されている。第Ⅱb層がこの層を覆う。

(7)第Ⅱb層は黒色に近い褐色土の自然堆積層であり、調査地区内では局部的に分布する。層中に中世陶器を含むことから、中世以降に形成された堆積層である。SK917土壇はこの層より掘り込まれており、その上面は1つの遺構面になる。

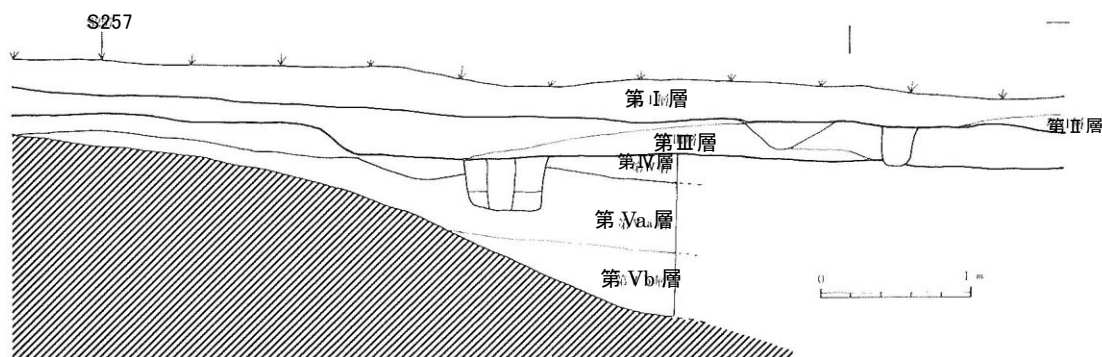
(8)SK917土壇埋まり土は3重層から成る自然堆積層である。上層は灰褐色粘土、中層は褐色砂質土、下層は暗灰色粘土である。中層より中世陶器(天目茶椀・大囊)や青磁、白磁が出土する。第Ⅱa層が土壇埋まり土を覆う。

(9)第Ⅱa層は暗褐色の砂質土の自然堆積層である。多数の円形を呈する柱穴群がこの第Ⅱa層上面から検出される。層中に中世陶器が含まれている。より低い南側では4つの重層に分れる。第Ⅰ層の表土がこれを覆う。

第28次調査地区の層序の所属年代は伴出遺物より、第Ⅲ層は古代末、第Ⅱa、b層は中世以降、近世以前と考えられる。

## B.第29次調査地区の層序

第29次調査地区の層序が最もよく表われている西地区東壁の断面図をもとに、下層より要点を略述すれば、以下のようなになる(第5図)。



第5図 第29次調査地区層序図

(1)第Ⅴ層は地山上に乗る厚さ 0.9m の自然堆積層である。第Ⅴa・Ⅴb の 2 亜層に分れ、Ⅴa 層は灰茶褐色粘質土、Ⅴb 層は灰茶褐色砂質土である。第Ⅴa 層には大木 2a・b 式、8b 式等の縄文前期・中期の土器が含まれるが古代の遺物はない。

(2)第Ⅳ層は黒褐色を呈する粘質の自然堆積層で、その上面より柱穴や溝が発見される。

(3)第Ⅲ層は第Ⅳ層上に人為的に盛土した整地層で、灰褐色土・灰黄褐色土を用いた数層の互層である。数条の溝が、その上面より発見される。第Ⅱ層がこれを覆う。

(4)第Ⅱ層は暗褐色の自然堆積層である。上面より、径 20～30 cm の柱穴群や溝、土拵が検出される。層中に中世陶器を含むことから、中世以降の堆積であることは間違いない。第Ⅰ層の表土がこれを覆う。

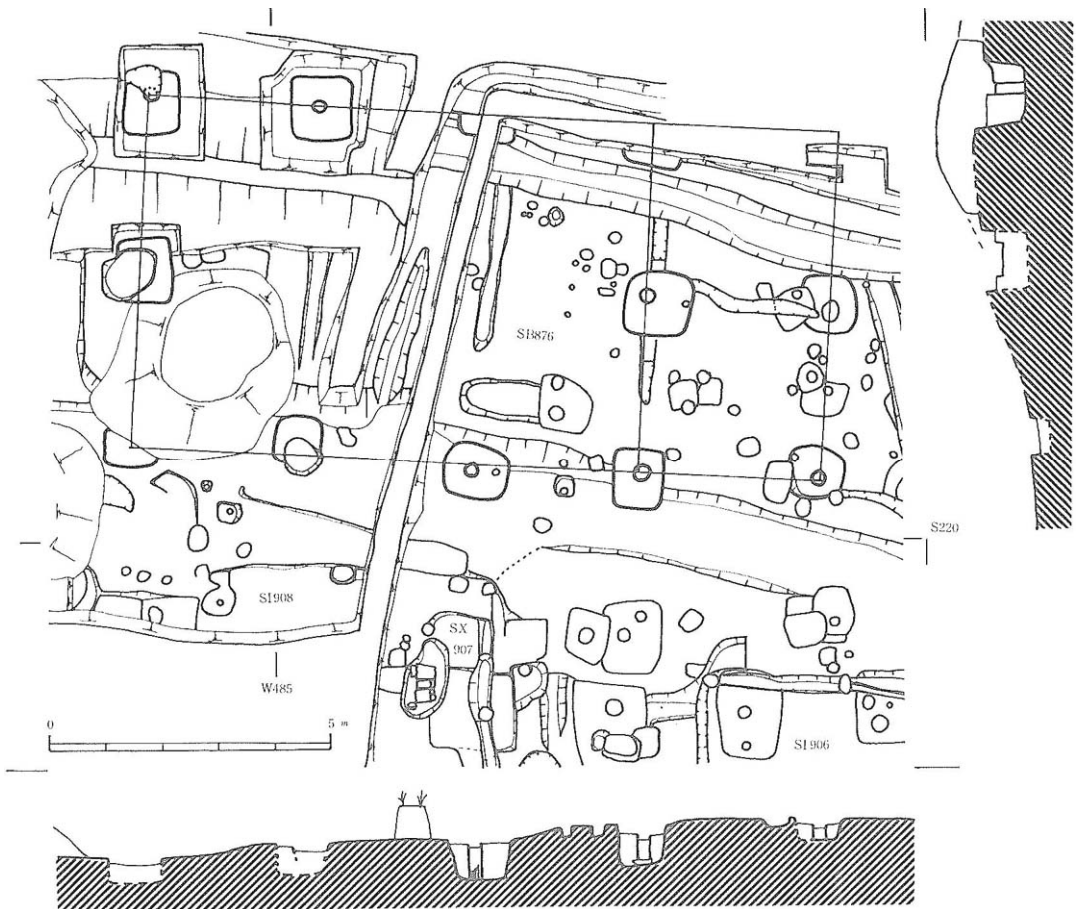
第 28 次調査地区の層序と第 29 次調査地区の層序を対照すると、第 29 次調査地区の第Ⅱ層は、第 28 次調査地区の第Ⅱa・b 層に比定できる。両者の第Ⅲ層については、第 29 次調査地の場合、遺構が極めて少なく、土質も異なることから、一概には比定できない。

## IV. 発見遺構

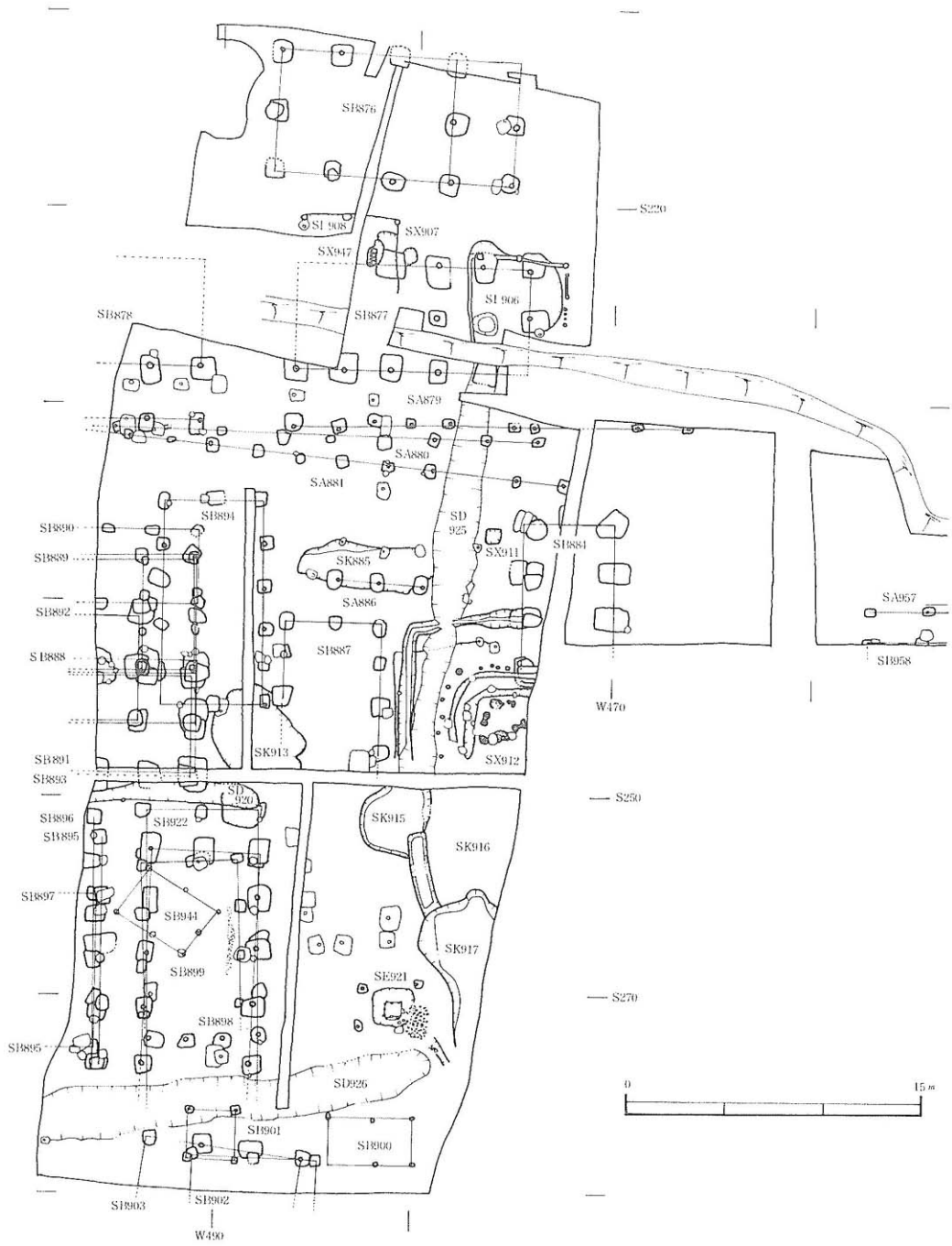
第28・29次調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡26棟、柱列跡6条、工房跡4基、井戸跡5基、竪穴住居跡2棟、土拵跡、溝多数がある(第7図)。以下、順に主要な点を記述する。

### (1)SB876 建物跡(図版2上、第6図)

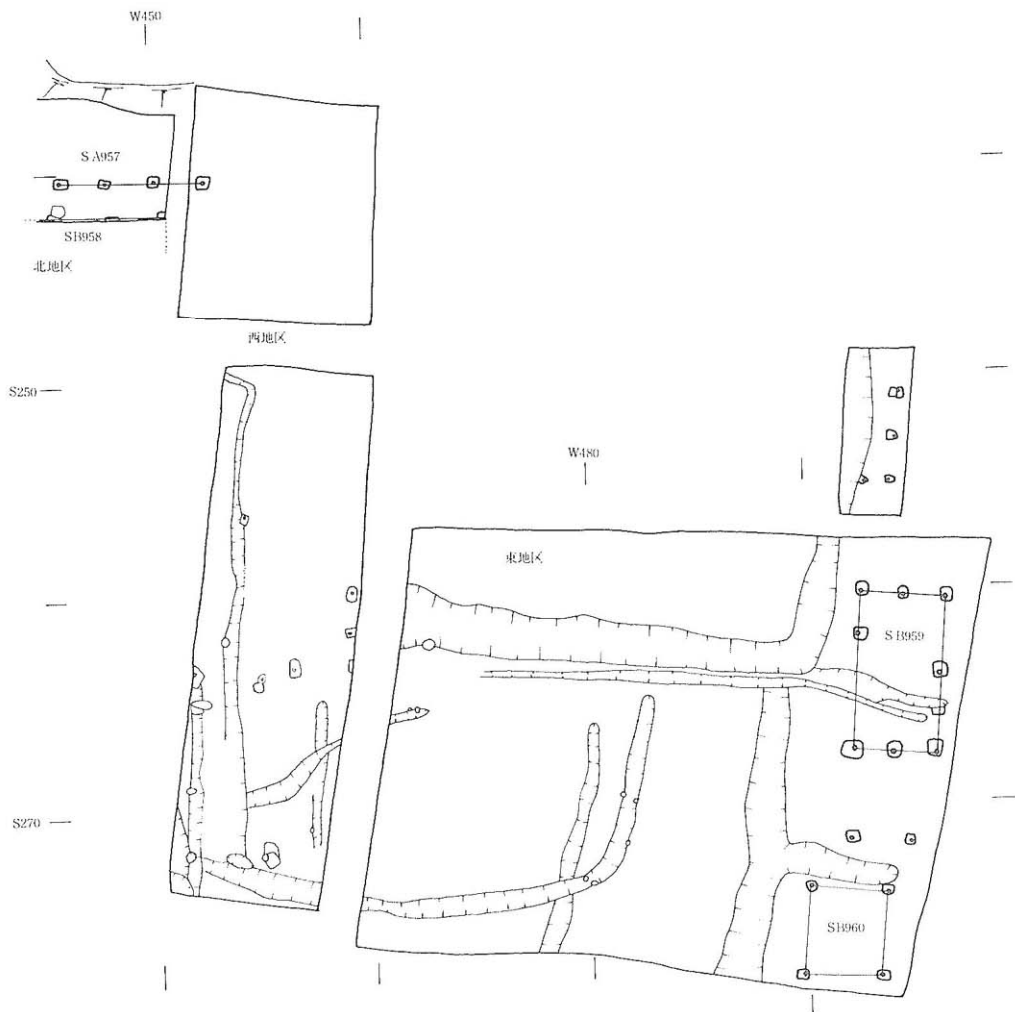
発掘区の最北端で発見したもので南北2間×東西3間の身舎の東妻に廟をつけた掘立柱建物跡である。建物跡の北側柱列の一部は調査区外になる。この地区にだけ残る地山上の地層面で検出される。この整地層には第Ⅱ期の平瓦を含む。柱間寸法は南北両側柱列でそれぞれの欠けている部分を補うと、桁行方向西より、 $2.94+3.00+3.00+3.12=10.06\text{m}$ となり、10尺等間、梁間は2.90mの9.5尺等間と考えられる。建物の方向は南側柱列で測定



第6図 SB876 建物跡



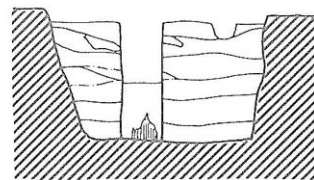
第 7 図 第 28 次調査発見遺構図



第7図 第29次調査発見遺構図

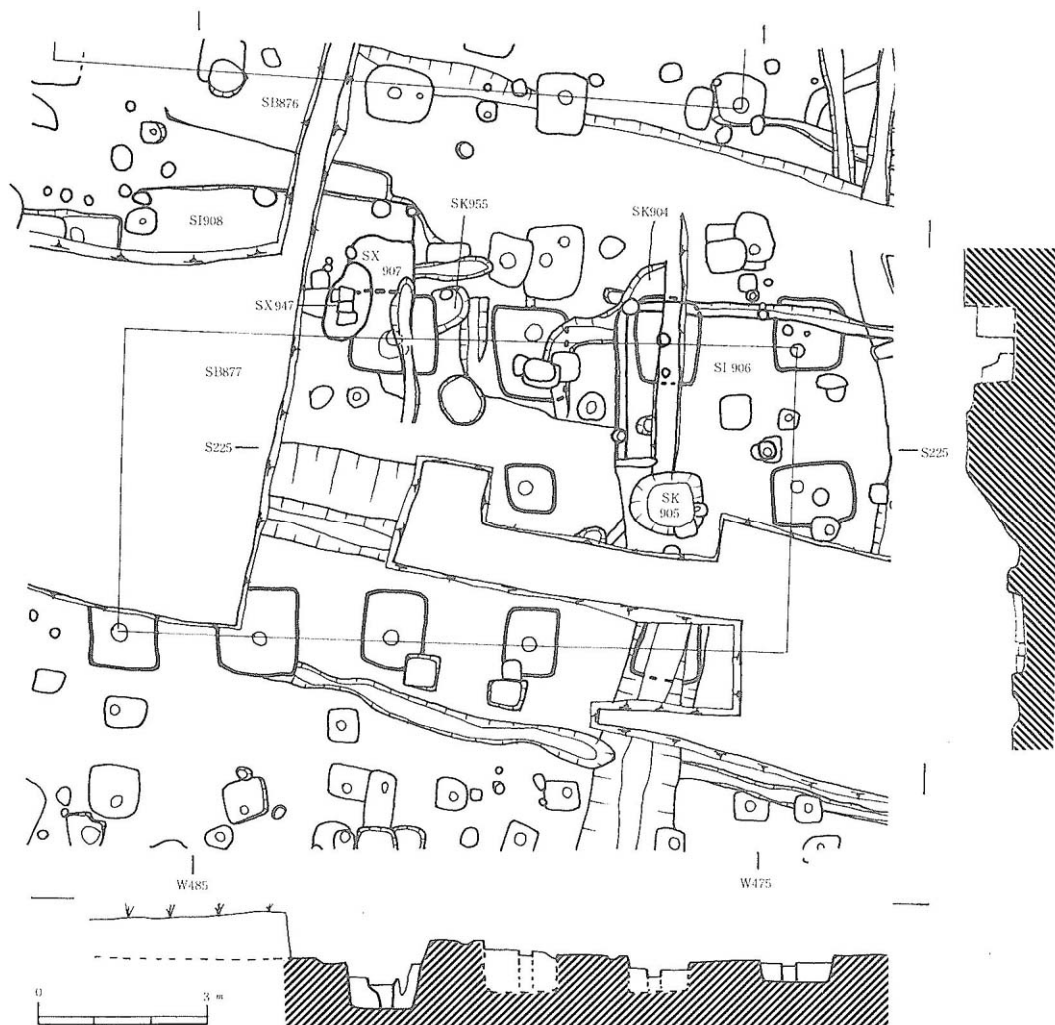


すると、発掘基準線に対し、東で  $1^{\circ} 52'$  南に偏している。柱穴は平均  $1.1\text{m} \times 1\text{m}$  の方形で、ほぼ、垂直に掘られている。柱穴の埋め方は灰色粘質土・褐色土を使用して、おのおの、 $10\text{cm}$  程度の厚さで、丁寧な互層に埋めている(第 8 図)。柱穴の深さは身舎の柱で  $0.8 \sim 1.1\text{m}$  と深い、東廟の柱列では  $0.5\text{m}$  と浅い。柱痕跡は径  $25\text{cm}$  の円形で中には柱根を残すものもある。柱抜き穴が付いている柱穴もあるが、柱穴の途中でとまっており、その下部では柱痕跡が残っている。雨落ち溝はない。柱穴埋め土中より表杉ノ入式の土師器杯や内黒処理し、ヘラミガキを施す土師質の風字硯や第 II 期の平瓦が出土している。



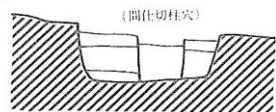
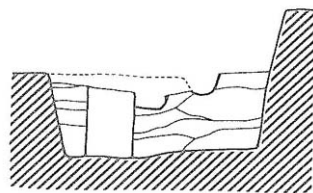
第 8 図 SB876 柱穴

(2)SB877 建物跡、S1906(図版 2 下)、908 住居跡、SX907 工房跡、SX947 瓦施設、SK904 土磁跡(第 9 図)



第 9 図 SB877 建物跡

**SB877 建物跡**は SB876 建物跡の南にある掘立柱建物跡である。梁間 2 間 X 桁行 5 間の東西棟で、東妻より 2 間目に間仕切りの柱穴がある。この建物跡は整地層下の地山面で検出される。次に述べる S1906、908 住居跡によって切られている。柱間寸法は各柱間で不揃いで、南北両側柱列で、それぞれの欠いている柱間寸法を補うと、桁行方向では、西より  $2.50+2.32+2.49+2.30+2.38=11.98\text{m}$ 、梁間では間仕切柱穴を基にして、 $2.77+2.62=5.39\text{m}$  であるので、桁行 8 尺、梁間 9 尺等間と推定される。建物跡の方向は南

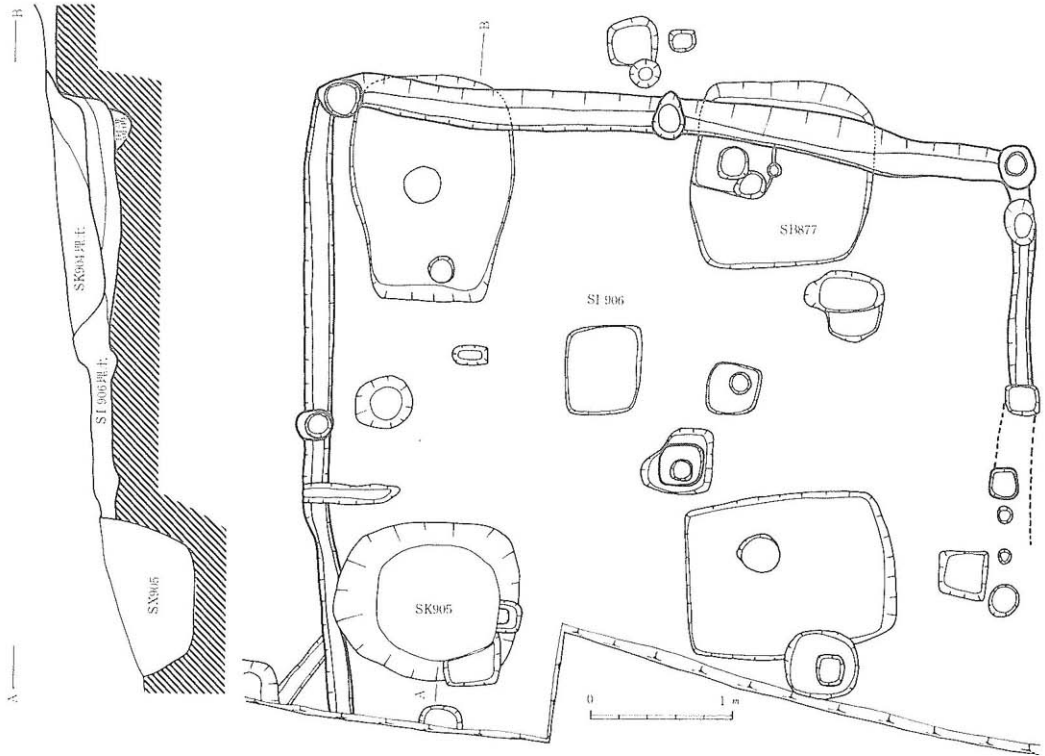


第 10 図 SB877 建物跡

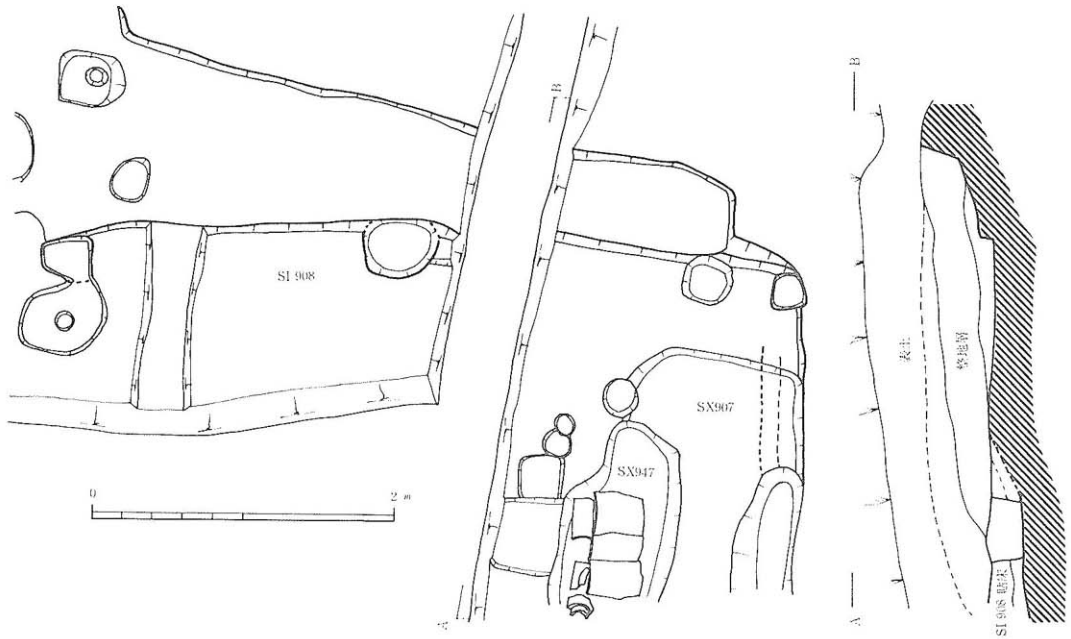
側柱列の柱痕跡を基にすると、東で南に  $1^\circ$  偏している。柱穴は方形で、ほぼ垂直に掘られている。深さは削平を受けている南側柱列で  $0.2\text{m}$  と浅いが、他の柱穴は  $1.3\text{m}$  を計る。間仕切りの柱穴は側柱列に比して  $0.5\text{m}$  と浅い(第 10 図)。埋め方は黒褐色粘土、黄色砂質土、褐色砂質土で  $2\sim 3\text{ cm}$  巾の丁寧な瓦層に埋めている。柱痕跡は径  $20\sim 25\text{ cm}$  の円形で、柱抜き穴が伴うものもある。雨落ち溝はない。柱穴埋土中から糸切り底の内黒土師器杯、須恵系土器の台付鉢片が出土している。

**S1906 住居跡**は SB877 建物跡を切る竪穴住居跡で、地山面より検出される(第 11 図)。その規模は東西  $5.1\text{m}$ 、南北長は南半部が削平されているが、 $4.8\text{m}$  を計る。周溝は巾  $20\sim 30\text{ cm}$ 、深さ  $10\text{ cm}$  程度の U 字溝で、中に、北壁で 2 間、東と西の周溝では北から 1 間分の柱穴がある。この柱穴は径  $20\sim 30\text{ cm}$  である。さらに、住居跡の床面中央付近に 1 個の柱穴がある。その径は約  $40\text{ cm}$  を計る。周壁にある柱穴の間隔が  $2.5\text{m}$  等間であることから、この住居跡の規模は 1 辺  $5\text{m}$  前後の方形と思われる。周壁の高さは良好に残る北壁で約  $40\text{ cm}$  になる。周溝の埋め土は地山屑の入る灰褐色土で、壁材等の痕跡はない。床面はほぼ水平で貼床はない。カマドや屋外施設もない。埋め土は上層の炭混りの暗褐色土、中層の黄色土混りの褐色土、最下層の暗灰褐色土の 3 重層に分れるが、これらは人為的に一手に埋めたものである。住居跡の周溝埋め土中には糸切り底で調整を加えない内黒土師器の杯や須恵系土器の杯と思われる破片がある。

**S1908 住居跡**は S1906 住居跡の西  $9\text{m}$  にある住居跡である(第 12 図)。地山面から検出される。住居跡の貼床土が SB877 建物跡の柱穴を覆っている。規模は東西約  $5\text{m}$  であるが、南は完全に削平され、北辺より  $1.5\text{m}$  を残す。しかし、北辺の周溝に 3 個の柱穴があり、その間隔が、 $2.5\text{m}$  等間と S1906 住居跡と等しいことから、規模、構造とも S1906 住居跡に酷似するものと思われる。柱穴の径は約  $20\text{ cm}$  である。床面は北半部では地山面を利用しているが、南では 4 層にわたる粘土を貼っており、ほぼ、水平である。周溝は巾  $25\text{ cm}$ 、



第 11 图 SI906 平面图·断面图

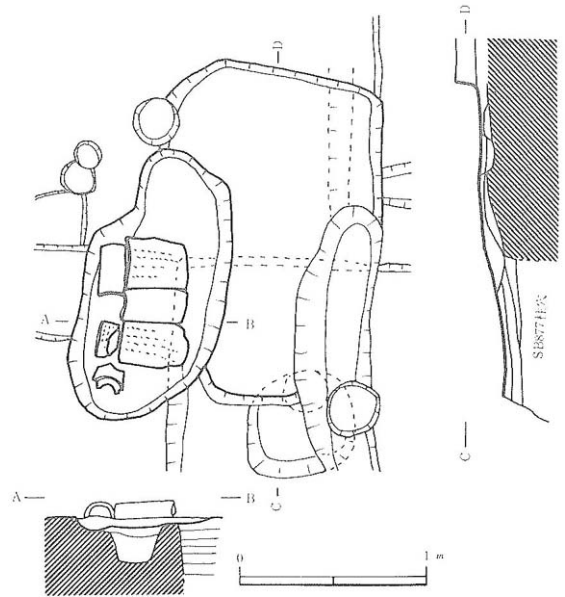


第 12 图 SI908、平面图·断面图

床面よりの深さ 15 cm の U 字溝で、貼床土下の地山面で確認される。また、住居跡の北壁の外側にわずかながら、地山を掘り込んだ形痕がある。住居跡を建設する際に、位置の上で、計画変更があったかもしれない。

**SX907 工房跡**は S1908 住居跡の廃絶後すぐに、竪穴住居跡の床面を掘り下げて設けたものである(第 13 図)。住居跡廃絶後の間層をなす堆積層は認められない。その規模は南北 2.5m × 東西 1.5m で、浅い凹みの全面が焼けている。凹みの深さは 8 cm を計る。

**SX947 瓦施設**は S1908 住居跡の貼床、および、SX907 工房跡を切って設けている(第 13 図)。長径 0.7m × 短径 0.4m の階円形の浅い凹みで、平瓦、丸瓦を敷き並べている。施設の中には炭や焼土はなく瓦も焼けていない。使用する平瓦はすべて軒平瓦 640 に伴う、第 II 期の刻印瓦である。



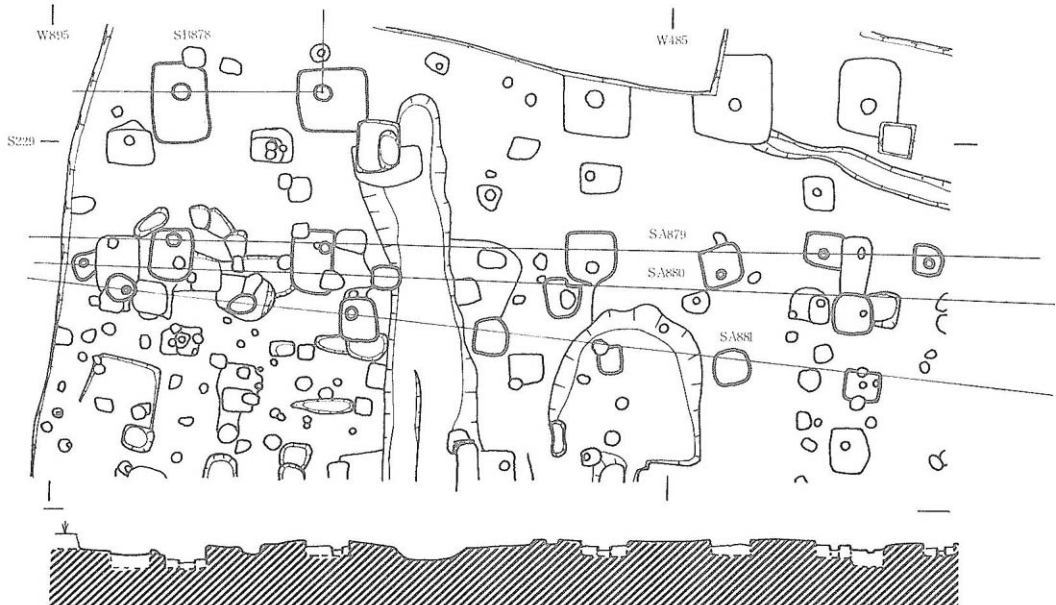
第 13 図 SX947 瓦施設・SX907 工房跡

**SK955 土壇**は S1908 住居跡や SX947 瓦施設を覆う盛土整地層を切る 1 辺 0.8m の隅丸方形の土壇である(第 9 図)。埋め土は炭混りの黒灰色土である。SK905 土壇は S1906 住居跡廃絶後の埋まり土を切る。土砦は南北径 1.1m × 東西径 1.3m の楕円形を呈し、すり鉢状に掘っている。黒褐色土の埋まり土中に第 IV 期の平瓦を含む。SK904 土壇は S1906 住居跡の埋まり土を切る。形態は径 2.5m × 3.5m、深さ約 0.3m で不整形円形をなす。土壇の埋まり土は上層の炭混り黒褐色土と下層の褐色土の 2 層に分れる。埋まり土中に中世陶器のカメやすり鉢を含むので、中世以降の土砦である(第 9 図)。

(3)SB878 建物跡、SA879・880・881 柵跡(第 14 図)

SB878 建物跡は SB877 建物跡の西にあって、SB877 建物跡の南側柱列と柱筋が揃う。東西棟の建物跡で、南側柱列の東から 2 本分だけが地山面から検出されている。柱穴は 1 辺 1.1m の方形で、埋め土は丁寧な薄い互層をなす。柱痕跡は径 30~35 cm の円形である。1 間分ではあるが、柱間寸法は 2.52m で、SB877 建物跡のそれに近い。この柱穴から割り出した建物の方向は基準線にほぼ一致する。柱穴の大きさ、埋め方、柱間寸法の類似、および柱筋が揃うことより、SB877 建物跡と組みになる建物跡と考えられる。

**SA879 柵跡**は SB877・878 両建物跡の南にある東西方向 11 間の柱穴列であり、SA880

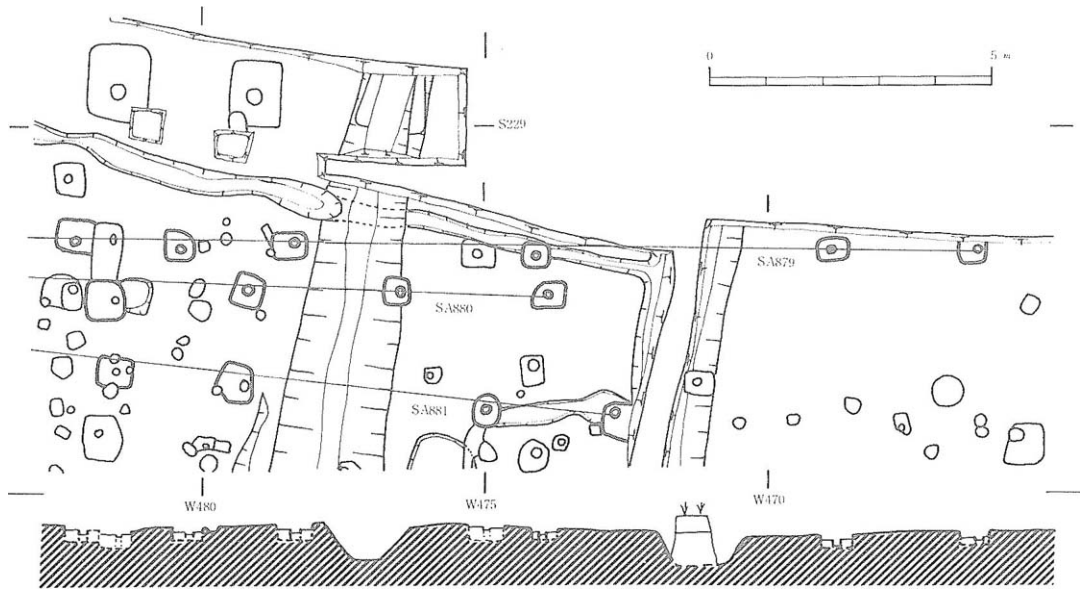


第14図 SB878・SA879・880・881

柵跡の柱穴を切る。柱間寸法は後の削平により破壊されているものもあるが、東より、 $2.50+2.5+2.5+2.5+2.5+1.98+1.87+1.83+2.30+4.70+2.66=15.34\text{m}$ と推定される。柱間寸法は不揃いであるが、SB877 建物跡と SB878 建物跡の間に相当する部分には柱穴がなく4.70mと広いことから、SB877・878 両建物跡の南を遮閉する施設と考えられる。柱穴は平均0.6~0.8mの方形で、柱穴埋土は地山屑を混じえた黄褐色土である。柱痕跡は径20cmの円形である。柵跡の方向は基準線とほぼ一致する。

**SA880 柵跡**はSA879 柵跡の南、約2mにある東西方向8間の柱穴列であり、地山面から検出される(第14図)。西方には延びるが、東へは延びない。柱間寸法を東から求めると、 $2.56+2.72+2.50+2.80+2.37+3.11+2.7+2.8=19.19\text{m}$ である。柱間寸法は不揃いではあるが、SB877とSB878 両建物間に相当する柱間が3.11mと広い。SA879 柵跡を切るが、SA879 柵跡と同様の性格と思われる。このことは柵跡の東端がSB877 建物跡の東妻とほぼ一致することからも肯首される。柱穴は平均0.5m×0.6mの方形で、深さは削平を受けて7cmと浅い。柱穴埋め土には暗褐色土を用いる。柱痕跡は径20cmの円形である。柵列の方向は基準線に対し、東で0°、18°南に振れる。

**SA 881 柵跡**はSA880 柵跡の南にある東西方向10間の柱穴列である。西端の柱穴がSA879880 柵跡の柱穴を切る。柱間寸法は東より $2.30+2.3+2.3+2.29+2.35+2.18+2.11+2.49+1.96+2.07=21.24\text{m}$ で、おのおのの寸法は不揃いである。SA879・880 柵跡と異なる点はSB877・878 両建物間の部分にも柱穴があることで、切り合い関係より、組むものと

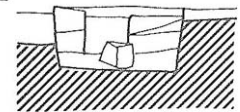


第14図 SA879・880・881 柵跡

は考えられない。柱穴は0.6m×0.7mの方形で、埋土には茶褐色土を用いている。柱痕跡は径20cmの円形であり、それを基にした柵跡の方向は東で6°20'と南に大きく振れる。

(4)SB894・893・892・891・890・889・888 建物跡、SX961 工房跡(第17図)

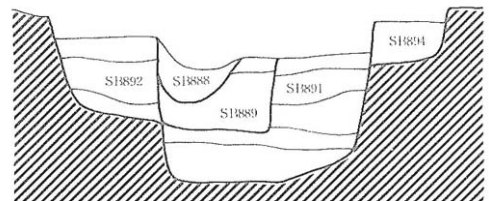
**SB894 建物跡**は調査地区の西寄り、SA881柵跡の南約7mに位置する南北棟2間×5間の掘立柱建物跡である(第17図)。第三層の盛土整地層で検出され、柱穴の重複状況よりこの一群の建物跡では最も古い。柱痕跡の残る東側柱での柱間寸法は、北より2160+2.37+2.08+1.90+2.01=10.66mである。梁間の寸法は北妻で2.5



第15図 SB894 柱穴

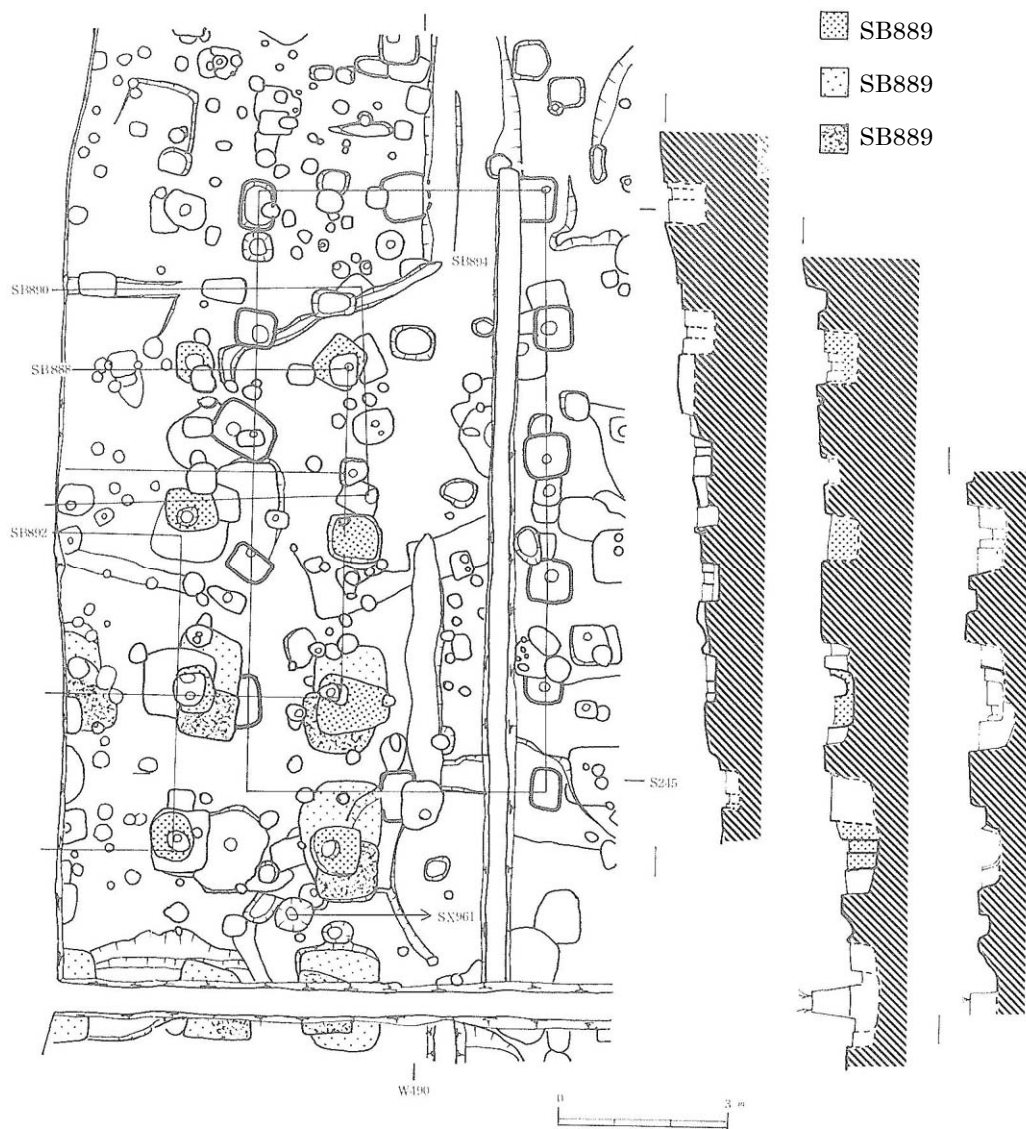
+2.5=5.0mと推定される。東側柱列で測定した建物跡の方向は北で1.4'西に振れる。柱穴は1辺0.7mの方形で、側壁は垂直に立つ(第15図)。埋め土には茶褐色土、黄褐色土、黒褐色粘土を用い、これを比較的丁寧な互層に埋めている。柱痕跡は径20cmの円形で、抜取穴はない。柱穴埋土中に須恵系土器の杯や第四期の平瓦が含まれる。

**SB893 建物跡**はSB894建物跡の東南隅にあって、これを切る(第17図)。調査地区内には一部の柱穴しかないが、恐らく、梁間2間の東西棟の掘立柱建物跡と推定される。この建物跡はSB891・889建物跡の柱穴によって破壊されている。そのため、確かな柱間寸法はわからない



第16図 SB891 柱穴

が、柱穴の中心で、それを求めると、桁行 2.5m、梁間 2.7m 等間と考えられる。建物の方向もほぼ基準線にあうと思われる。柱穴は 1.2m×1.5m の方形で側壁は傾斜をもっている(第 16 図)。その埋土は黄色土と黒褐色土を用いて、非常に薄い丁寧な互層をなす。柱穴埋土に須恵系土器の杯や第Ⅳ期の平瓦が含まれている。



第 17 図 SB889～894 建物跡

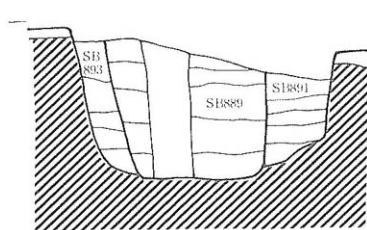
**SB891 建物跡**は SB893 建物跡を切って、ほぼ同位置にある。梁間 2 間×桁行 3 間以上の東西棟建物跡で、調査地区の西に延びる。柱穴は 1 辺 1m の方形で側壁は傾斜をもつ。埋土には褐色粘土、灰褐色粘土を用いて、これを 4～5 層の互層に埋める。埋土中に焼土

を含む。柱穴の中心で測定した柱間寸法は梁間方向で  $2.5+2.5=5.0\text{m}$ 、桁行方向で  $2.4\text{m}$  である。また東妻柱穴の中心で求めた建物跡の方向は  $1^\circ 50'$ 北で東に振れる。柱穴埋土中に緑釉陶器片が含まれる。

**SB892 建物跡**は SB893 建物跡を切るもので、東妻柱列と思われる柱穴列である(第 17 図)。柱穴は 1 辺  $1.2\text{m}$  の方形で、深さは  $0.5\sim 0.6\text{m}$  を計る。埋土は黄色砂質土と焼土を含む灰褐色土で粗い互層に埋めている。東妻柱穴の中心で測定した柱間寸法は  $2.8+2.7=5.5\text{m}$  である。また、その方向は北で東に  $0^\circ 30'$ 振れる。柱穴の埋土中に須恵系土器の杯や第三期の平瓦が含まれる。

**SB890 建物跡**は SB891 建物跡の北、約  $7\text{m}$  にある梁間 1 間×桁行 2 間以上の掘立柱建物跡である(第 17 図)。この建物跡は SB891 建物跡の柱穴を切る。柱穴は  $0.4\text{m}\times 0.7\text{m}$  の方形である。柱穴埋土には地山屑混りの暗褐色土が用いられている。柱痕跡は直径  $20\text{cm}$  の円形である。柱間寸法は正確には算出できないが、梁間  $3.6\text{m}$ 、桁行  $2.4\text{m}$  等間とみると、ほぼ柱穴の中心におさまる。建物の北側柱穴の中心を結ぶ線で求めると基準線にほぼあう。

**SB889 建物跡**は SB890 建物跡を切っており第 III 層面から柱穴が検出される。南北棟東廟付建物跡なのか、東西棟南廟付建物かはわからない(第 17 図)。柱痕跡を基にした柱間寸法は南北方向で、 $2.94+3.101+2.47=8.52\text{m}$ 、東西方向で  $2.6\text{m}$  を計るので、どちらかというとも東西棟になる可能性が強い。建物跡の方向は南北方向で基準線に対し、 $2^\circ 20'$ 北で東に振れる。柱穴は平均  $0.8\text{m}\times$



第 18 図 SB889・891・893 柱穴

$0.9\text{m}$  の方形で、深さは  $0.5\sim 0.8\text{m}$  ある。埋土は焼土を多く含む黒褐色粘土や灰褐色粘土で 2~5 層の互層になっている(第 18 図)。柱穴埋土中より緑釉椀(カラー図版上、第 43 図 7)が出土している。

**SB888 建物跡**は SB889 建物跡と重複し、これを切る東廟付建物跡で、第 III 層面から検出される(第 17 図)。柱間寸法は南北方向で  $2.0\text{m}$  等間、東西方向で  $2.5\text{m}$  と推定される。東辺の柱穴列は  $1^\circ 45'$ 北で西に振れる。柱穴は径  $50\text{cm}$  の円形で、深さは  $0.4\text{m}$  を計る。その断面形は U 字形に近く、底がせまい。埋土は黒褐色土を一手に埋めたものである(第 16 図)。柱痕跡は径  $15\text{cm}$  の円形である。柱穴埋土中に須恵系土器と焼壁材が含まれる。

**SX961 工房跡**は SB893 建物跡の東棟柱の南にある(第 17 図)。径  $30\sim 40\text{cm}$  の楕円形の浅い凹みで、表面が焼けている。付近より青銅板や銅津の付着した「るつぼ」が出土することから製銅関係の工房跡と考えられる。

(5)SK885 土壙跡、SA886 柵跡、SB887 建物跡、SK913 土壙跡(第 19 図)



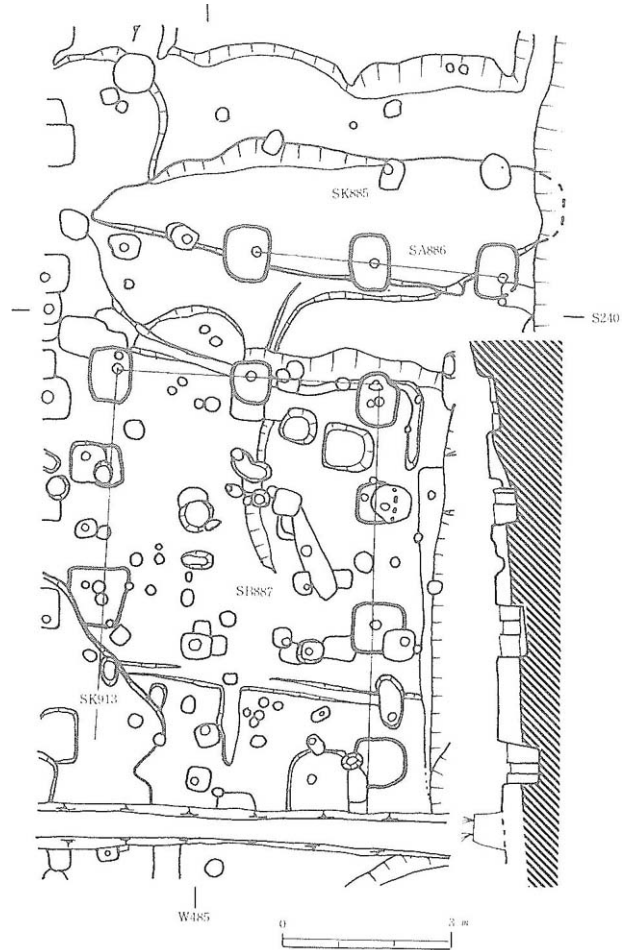
**SK885 土壇跡**は SB894 建物跡の東約 8m にある東西約 8m、南北約 2.5m の砲弾形の土壇跡である(第 19 図)。側壁はほぼ垂直に立ち深さは 0.8m である。この土壇は黒褐色土で一手に人為的に埋められている。埋め土中に緑釉片や第IV期の平瓦が含まれている。

**SA886 柵跡**は SK885 土壇埋め土を切る東西方向 2 間の柱穴列である。柱穴は 0.7m×0.9m の方形で、深さは 0.4m～0.5m ある。側壁はほぼ垂直に立つ。柱穴の埋め土状況は比較的薄い丁寧な互層で、炭混り褐色土、灰褐色土を埋土に用いる。柱痕跡は直径 20～25cm の円形である。柱間寸法は東より 2.25+2.10=4.35m で、その方向は 5° 47' と東で南に大きく振れる。

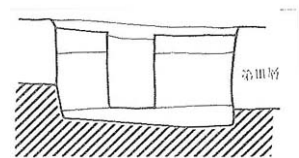
**SB887 建物跡**は SA886 柵跡の南にある南北棟 2 間×3 間以上の掘立柱建物跡で、第III層面より発見される(第 19 図)。建物跡の南半は SK913、915 土壇によ

って破壊されている。柱間寸法は北妻で東より、 $2.29+2.35=4.65\text{m}$ 、桁行方向のそれは東側柱列で北より  $1.64+2.28+2.48=6.40\text{m}$  と各柱間でばらつきがある。建物跡の方向は東側柱列の柱痕跡を基にすると北で西に 1° 36' 振れる。柱穴は 1m×0.8m の方形で、深さは保存のよいもので 0.8m を計る(第 20 図)。側壁はやや斜めに傾斜をつけて掘られ、逆台形をなす。柱穴の埋め土は暗黒色砂質土を用いて一手に埋めたものである。柱痕跡は直径 18～25cm の円形である。柱穴埋土中に須恵系土器の杯や第IV期の平瓦が含まれる。

**SK913 土壇跡**は SB887 建物跡の西側柱穴を切る土壇跡で、第III層面で検出される。東



第 19 図 SB887・SA886・SK885

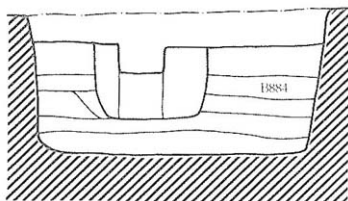


第 20 図 SB887 柱穴

西約 5m、南北 4.5m 以上、深さ 20 cm の不整円形の土壌跡である。側壁は垂直気味に立つ。埋土は粗い互層をなし、その中に須恵系土器の杯がある。

(6)SB884 建物跡、SA883・882 柱穴列、SX911 工房跡、SX912 工房跡、SD927 溝(図版 4、第 21、23 図)

**SB884 建物跡**は SB887 建物跡の北東約 10m にある、南北棟 2 間×3 間の掘立柱建物跡である。地山面より検出される。SA882・883 柱穴列によって切られており、柱間寸法は不明であるが、柱穴の中心で求めると、梁間、桁行とも 2.5m 等間と推定される。建物の方向も、ほぼ基準線に合致するようである。柱穴は平均 1m × 1.3m の方形である。柱穴埋土中に表杉ノ入式の内黒土師器杯片を含む。



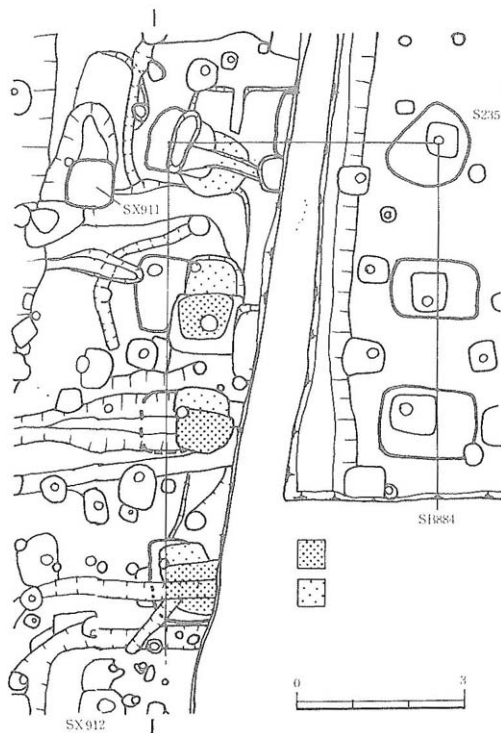
第 22 図 SB884 柱穴

**SA883 柱穴列**は SB884 建物跡の西側柱と重複し、これを切る南北方向 3 間分の柱穴列である。柱間寸法は不明ながら、柱穴の中心より、2.4m 前後の等間と考えられる。柱穴列の方向

も SB884 建物跡と大差ないと考えられる。柱穴は 1 辺 1m 前後の方形で、柱穴埋土中に表杉ノ入式の内黒土師器杯が含まれる。

**SA882 柱穴列**は SA883 柱穴列と重複し、これを切る南北方向 2 間分の柱穴列である。柱間寸法は SA881 柱穴列と同様に 2.4m 前後の等間、その方向もほぼ一致すると考えられる。柱穴は 1 辺 0.9m の方形である。

**SX911 工房跡**(第 21 図)は SB884 建物跡の西 4m にあり、地山面で検出される。工房跡の規模と形態は 80cm × 80 cm の隅丸方形で、深さは 70 cm の柱穴状を呈する。周壁の地山は 3~5cm の厚さで、強く焼けている。遺構内の土層は大きく 3 層に分れる。上層の 1 層は厚さ 20~25cm の黒褐色砂質土層で、第 II a 層(自然堆積層)に近い。中層の 2 層は厚さ 20cm の純粋な木炭層で、下層の 3 層は地山屑の入る黄色粘土である。周壁は 1 層の堆積している部分のみ焼けており、下層の 2・3 層のそれは焼けていない。したがって、2・



第 21 図 SA882・883、SB884、SX911

3層はこの工場の製作にかかわるもので、1層は廃絶後の自然堆積層とみることができ乱なお、この1層中に鉄滓や鉄釘があるので、鍛冶遺構と思われる。



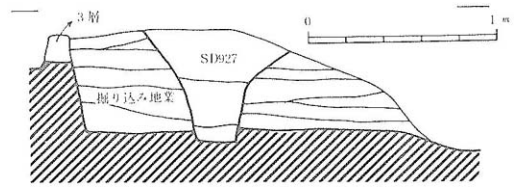
第23図 SX912 鍛冶遺構

**SX912 工房跡**はSX911 工房跡の南約10mにあり、第Ⅲ層を切る掘込み地業面で検出される(第23図)。遺構の南半は削平され、東半は調査地区外になるため、現存する規模は東西約5cm、南北4.5mである。遺構内の6個所に径15cm、深さ20cm程度のロート状のピットがあり、その周囲に約30cm前後の楕円形を呈する焼面がある。各焼面の1ヶ所には巾5cm程の焼けていない部分があり、それはピットより「八の字」状に開く。ピットの壁は焼けていない。SD931 溝はこの遺構に伴い、これを囲むと思われる巾35cmの浅いU

字溝で、焼土がぎっしり詰っている。SD953 溝はさらにその外側にある巾 30cm、深さ 10cm の U 字溝で、埋まり土中に焼土や木炭が混入している。溝のまわりには 0.7~0.8m の間隔で、径 15 cm 程の小柱穴がある。工房の壁の支柱あるいは樺木穴とも考えられる。遺構面から鉄滓が出土しているため、鍛冶遺構である可能性が高い。なお、SD931 溝と SD953 溝の間には工房の拡張が考えられるかもしれない。

**SD927 溝**は SX912 工房跡の外を廻る素掘り

の L 字溝である(第 23 図)。巾は 0.8m、深さ 70 cm で、北辺で 7m、西辺は 7.5m 現存する。断面形はロート状を呈し、灰褐色粘土、暗褐色粘土で人為的に埋めている。第Ⅲ層を切る掘込地業面より検出され、その埋め土中には緑釉陶器や須恵系土器片が含まれている(註 1)。



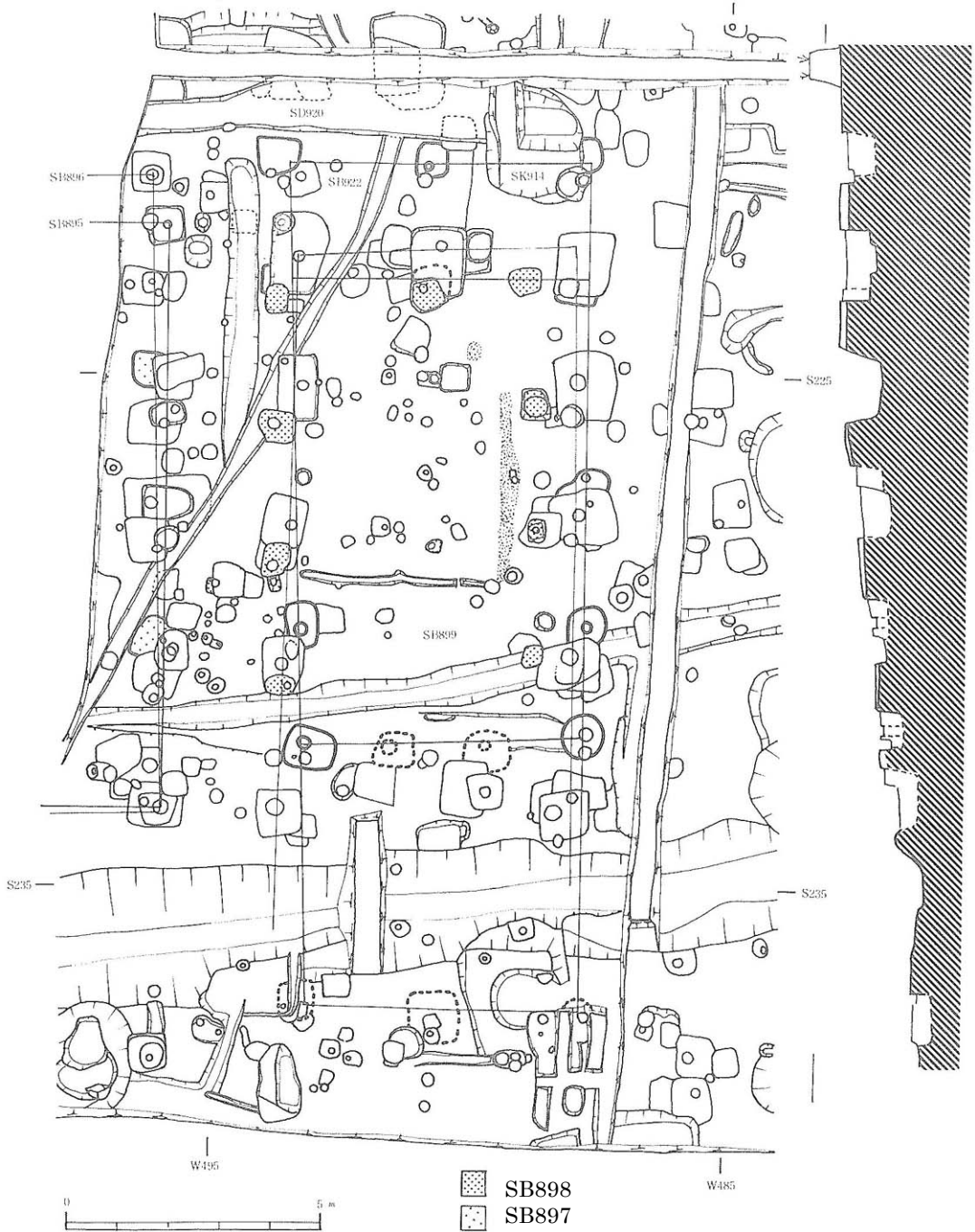
第 24 図 掘込地業・SD927 溝断面図

(7)SD920 溝、SK914 土砧跡、SB922・899・898・897・896・895 建物跡(第 25 図)

**SD920 溝**は SB893 建物跡の南にある東西溝である。溝は長さ 9m、巾 0.9m、深さ 20cm で断面形はゆるい U 字形をなす。埋まり土中に灰白色粘土が含まれている。

**SK914 土砧跡**は SB922 建物跡の北妻哺柱穴を切り、SD920 溝によって切られる。第Ⅲ層面で検出され、その規模は東西約 2m×南北 1・5m 以上である。土砧跡は円形で壁はゆるい傾斜をもっている。埋め土は人為的なもので、灰褐色土・灰色粘土・焼土入りの黒褐色土を用いており、中に須恵系土器の杯、緑釉耳皿、灰釉碗を含む。

**SB922 建物跡**は SD920 溝の南約 9m にある南北棟の掘立柱建物跡で第Ⅲ層面で検出される。SB898・899 建物跡によって切られる(第 25 図)。建物跡の桁行方向の柱間は、この建物跡の南端を切る SD926 溝によって破壊されており、よくわからない。SD926 溝を越えた南にも組みそうな柱穴がある。したがってその規模については二通りの場合が考えられる。その 1 は梁行 2 間×桁行 5 間の身舎に北廟が付き、南より 1 間目には間仕切の柱穴があるとする見方で、その際、南妻は丁度、溝中であつたと考えられる。その 2 は梁行 2 間×桁行 6 間の身舎に北廟がつくとする場合である。その際、間仕切り柱穴は南より 2 間目につく。第 2 の案で、柱穴の中心で柱間寸法を求めると、梁行では東より、 $2.88+2.96=5.84\text{m}$  で、桁行方向は東側柱穴列で 5 間目までは 2.2m 等間ととれるが、間仕切り柱穴の南は  $5.4\text{m}=2$  間分と寸法が大きくなる。側柱列で測定した建物の方向は北で西に  $1^{\circ}46'$  振れる。柱穴は 1 辺 0.8m の隅丸方形で、深さは 0.8m を測る。側壁がやや斜めに落ち、断面形は逆台形を呈する。柱穴の埋土には茶褐色土、黄色粘土を用い、薄い互層に埋めている。焼土は含まれていない(第 27 図)。柱痕跡は径 20~30 cm の円形である。柱

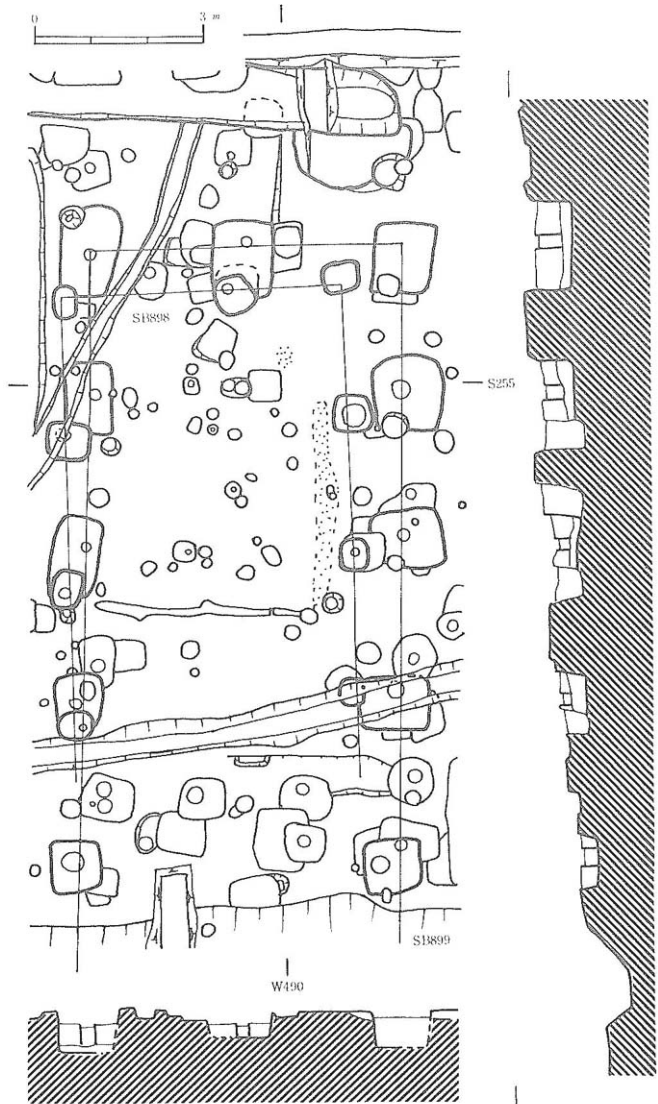


第 25 図 SD920・SK914・SB922,895～899

穴埋土に須恵系土器の杯が含まれる。

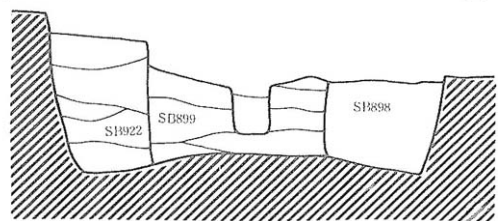
**SB899 建物跡**は SB922 建物跡とほぼ同位置にあって、それを切る南北棟掘立柱建物跡で、梁行 2 間×桁行 5 間以上と考えられる(第 25 図)。南妻の柱穴は SD926 溝によって破

壊されている。柱間寸法は北妻で東より  $2.60+2.56=5.16\text{m}$ 、東側柱列で北より  $2.74+2.57+2.80+2.68=10.79\text{m}$  である。各柱間の寸法にばらつきがある。東側柱穴の柱痕跡を基にした建物跡の方向は北で東に  $1^{\circ}58'$  振れる。柱穴は南北に長い  $1.3\text{m}\times 1.1.1\text{m}$  の長方形で、深さは  $0.8\text{m}$  ある。側壁はほぼ垂直に立ち、柱穴の底は平らである。柱穴埋土は焼土を多量に含む褐色粘土で、厚さ  $10\text{cm}$  程度で  $5\sim 8$  層の互層を呈する(第 27 図)。柱痕跡は直径  $30\text{cm}$  の円形で、柱穴の底には達しておらず、一部柱穴を埋めてから柱を建てたと思われる。柱穴埋土中に、緑釉耳皿、須恵系土器の杯、第IV期の平瓦、銅津、焼壁材が含まれる。



第 26 図 SB898・899 建物跡

**SB898 建物跡**はSB899建物跡とほぼ同位置にあり、これを切っている(第 26 図)。南北棟 2 間×3 間以上の掘立柱建物跡で南妻の柱穴はわからない。柱間寸法は北妻の柱穴の中心を基にすると、東より  $2.2\text{m}$  等間で、桁行のそれは西側柱穴を基にして北より、 $2.5+2.8+2.3=7.64\text{m}$  となる。この建物跡も、やはり、柱間寸法が不揃いである。西側柱列で測定した建物の方向は、北で  $0^{\circ}37'$  西に振れる。柱穴は 1 辺  $0.6\text{m}$  の隅丸方形で、深さは  $0.5\sim 0.9\text{m}$  である。側壁はほぼ垂直に落ちる。柱穴埋土は炭混じりの黒褐色土、または青黒色土で

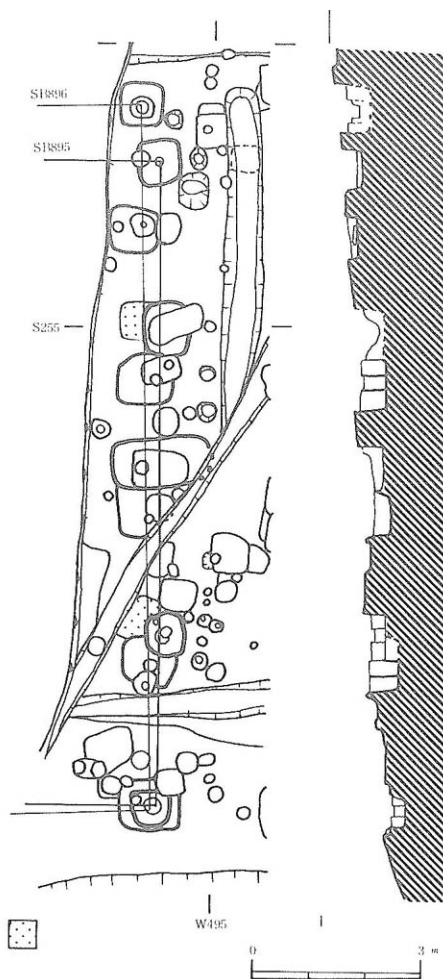


第 27 図 SB898・899・922 柱穴

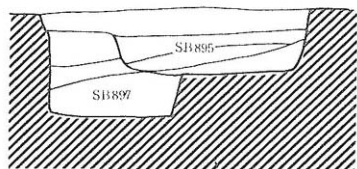
一手に埋めている(第 27 図)。柱痕跡は直径 20~25cm の円形である。柱穴埋土中に須恵系土器の杯や第IV期の平瓦が含まれている。

**SB897 建物跡**は SB898 建物跡の 5m 西にある 2 間分の南北に並ぶと思われる柱穴列であり、恐らく、東西棟と考られるものである(第 28 図)。東妻の棟柱穴は SB895・896 建物跡の柱穴によって破壊されて残っていない。柱穴のほぼ中心をとって測定すると、梁間全長は約 5.1m をはかる。また、その方向は北で西に  $0^{\circ} 36'$  振れ、基準線にほぼ一致する。柱穴は 1 辺 0.8m の方形で、深さは 0.5m 程残存する。柱穴の側壁はほぼ垂直に立つ。埋土は地山ブロックを混じえる灰色土や灰褐色土を用いた互層を呈する。中に焼土を含む柱穴もある(第 29 図)。柱痕跡は不明である。柱穴埋土中に須恵系土器の杯や第IV期の平瓦が含まれている。

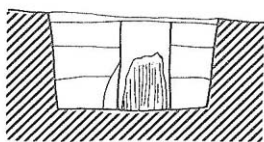
**SB896 建物跡**は SB897 建物跡と重複し、これを切る南北方向に 5 間分の柱穴列で、建物の東側柱の柱穴と推定される(第 28 図)。柱間寸法は北より  $2.50+2.54+2.46+2.58+2.50=12.58\text{m}$  であり、ほぼ 2.5m 等間と考えられる。その方向は  $0^{\circ} 55'$  北で西に振れている。柱穴は 1 辺 0.9m の方形で、深さは 0.5m を残す。側壁はほぼ垂直に立つ。柱穴埋土は炭や焼土をわずかに含む黄褐色土、灰褐色砂質土を用いた、やや粗い互層である(第 30 図)。柱痕跡は径



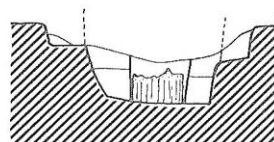
第 28 図 SB895・896・897



第 29 図 SB895・897 柱穴



第 30 図 SB896 柱穴



第 31 図 SB895 柱穴

20 cmの円形で、北より3番目の柱穴には柱抜穴がある。柱穴埋土には須恵系土器の杯、鉢、灰釉陶器の瓶や第IV期の平瓦が含まれている。

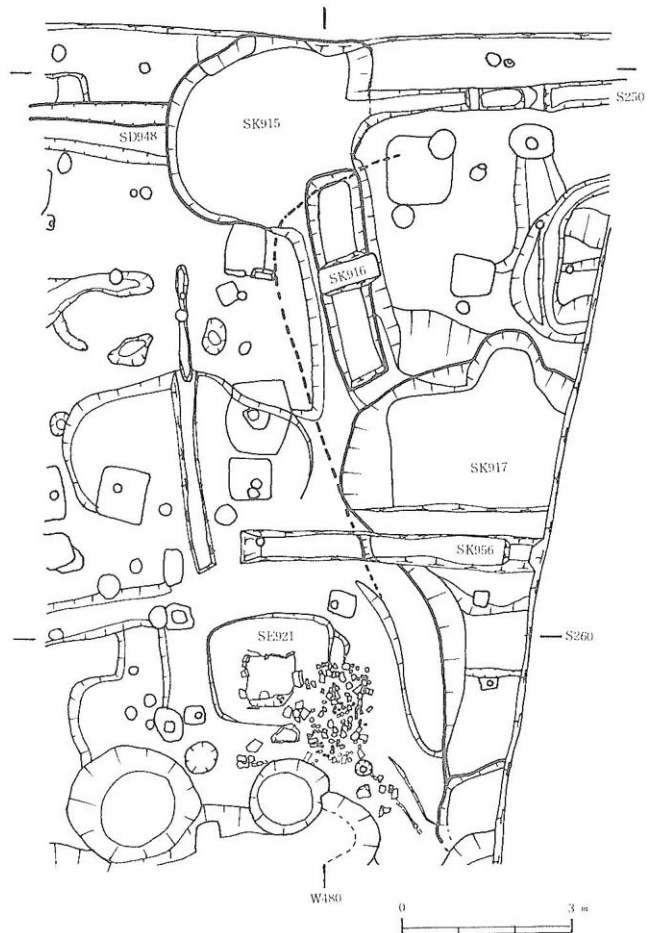
**SB895 建物跡**はSB896 建物跡を切る南北方向に4間分の柱穴であり、南北棟建物跡の東側柱の柱穴と考えられる(第28図)。柱痕跡を基にした柱間寸法は全長11.6mであり、2.9m等間と考えられる。その方向は北で西に $0^{\circ}29'$ の振れを示し、基準線とほぼ一致する。柱穴には1辺0.8mの方形のものと、 $1.2\text{m}\times 0.8\text{m}$ の長方形を呈するものがある。深さは0.3m~0.6mで、北で保存が良い。柱抜穴がつくものもある。柱穴埋土に多量の焼土を含む点が各柱穴に共通した特徴であり、埋土は2~4層の互層をなすものが多い(第31図)。柱痕跡は径30cmの円形で、南端の柱穴中には柱根が残っている。柱穴埋土中に緑釉の段皿、須恵系土器の杯、第IV期の平瓦、焼壁材等が含まれている。

(8)SD948 溝・SK915・916・917 土壙跡、956 池状遺構(第32図)。

**SD948 溝**はSK914 土拵跡の東にある東西方向の素掘りの溝である(第32図)。巾は0.4m、深さは0.2~0.3mを計る。第III層面より検出されるが、埋まり土中に中世陶器のカメがあり、中世に廃絶した溝である。

**SK915 土壙跡**はSD948 溝を切る土壙である。直径3mの円形を呈し、埋土中に多量の須恵器、土師器、須恵系土器や施釉陶器を含むが、切合い関係より、中世の土壙と断定できる。

**SK917 土壙跡**はSK915 土壙跡の東南8mにあって、東西4m以上、南北8m以上の不整楕円形を呈する(第32図)。深さは0.7mである。土壙は第IIb層面から掘り込まれており、第IIa層に覆われる。掘り方は緩く斜めに大きく肩をもって落ち込む。埋まり土は下層より、暗灰色粘



第32図 SK915・916・917・956・SD948



土、褐色砂質土、灰褐色砂質土の3層の自然堆積層より成る。2層中に中世陶器のカメや天目茶碗(第46図)が含まれている。土砦が切る第Ⅱb層中からも中世陶器が出土しているので、中世の遺構であることは間違いない。

**SK916 土塋跡**はSK917土砦跡の北にあってそれに切られる東西1.2m×南北4mの長方形の土塋で、第Ⅲ層面で検出される。

**SK956 池状遺構**はSK916・917土塋跡の下層にあり、第Ⅲ層下の地山面で検出される(第32図)。その規模は東西3m以上、南北8m以上と推定される。形状はおそらく長方形を呈すると思われる。側壁がかなり深くかなり垂直に落ち込むことから、素掘りの池状遺構と推定される。遺構内の埋まり土は3重層の粘質土の中に数層の砂層が流れ込んだ状況を呈する自然堆積層である。埋まり土中に糸切りで調整のない内黒土師器の杯や須恵系土器の杯と思われる破片や第Ⅳ期の平瓦を含む。層位的に第Ⅲ層及びその上に建設された建物跡の年代を決める鍵になる遺構である。

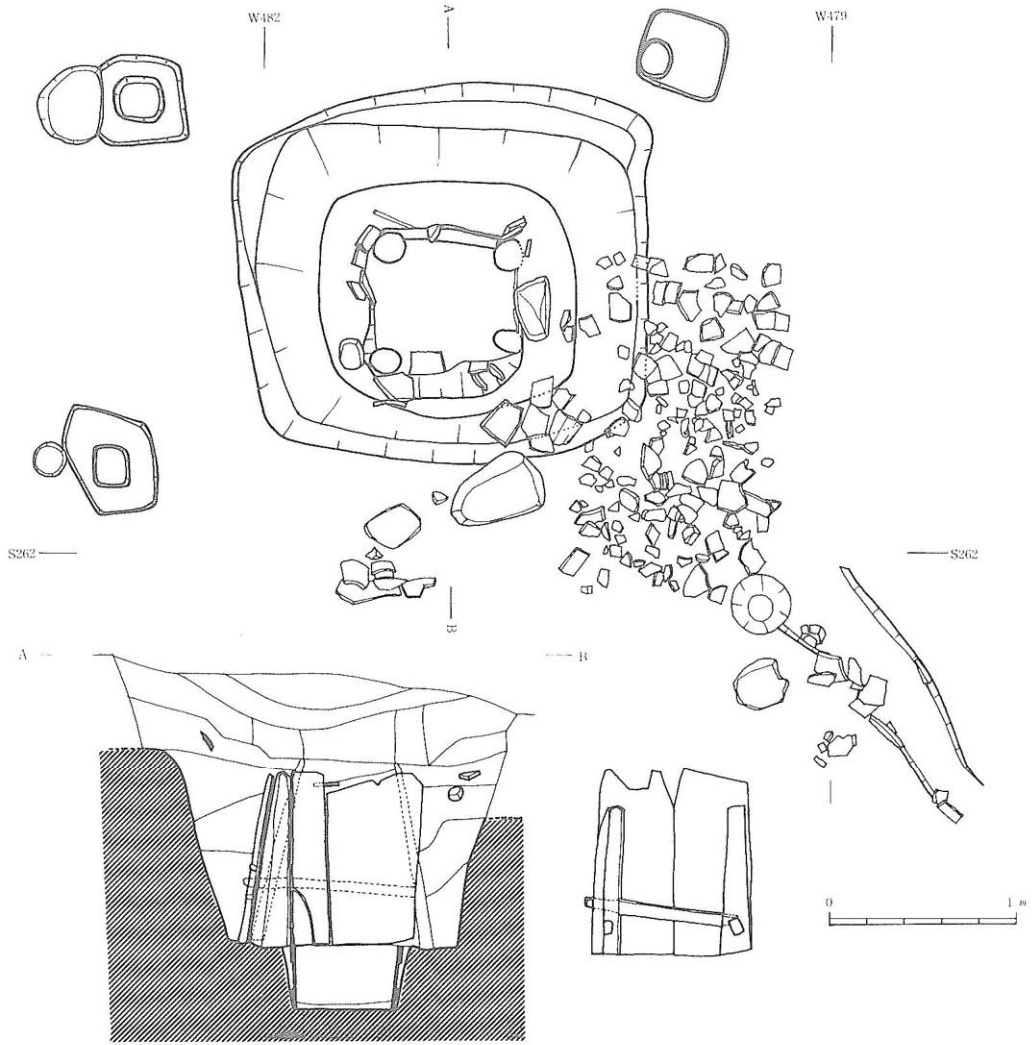
(9)SE921 井戸跡(図版5、第33図)

**SK917 土塋跡**の西南約5mにある。方形縦板組みの井戸枠を有しており、第Ⅲ層面より検出される。井戸枠の据え方の平面形は一辺2.3mの隅丸方形である。深さは1.45mで、底の曲物を入れる部分では、さらに深さ35cm程円形に掘り込まれている。井戸枠の造り方としては、まず、最下位にある円形の据え方内に、内径65cm、深さ35cmの曲物を据えて、埋め込む。その曲物を中心にして、据え方の四隅に10cm角の柱をたて、柱の底から25cmの位置にほぞを掘り、7cm角の横木をわたして固定する。さらに横木の外側には各辺2枚の縦板を立てかけている。上位の井戸枠の内法は75cmである。下位の曲物の上端と下端には巾5cmの側板が巻かれている。井戸枠の南東隅には巾0.9m、長さ2.5mの瓦敷き排水施設がある。また、井戸枠の外には4本の覆屋の支柱がある。その柱間寸法は東西2.8m、南北2.1mである。据え方埋め土中に須恵系土器の杯や、緑釉陶器、第Ⅳ期の平瓦が含まれることから前述した諸建物群と同年代のものと見られる。

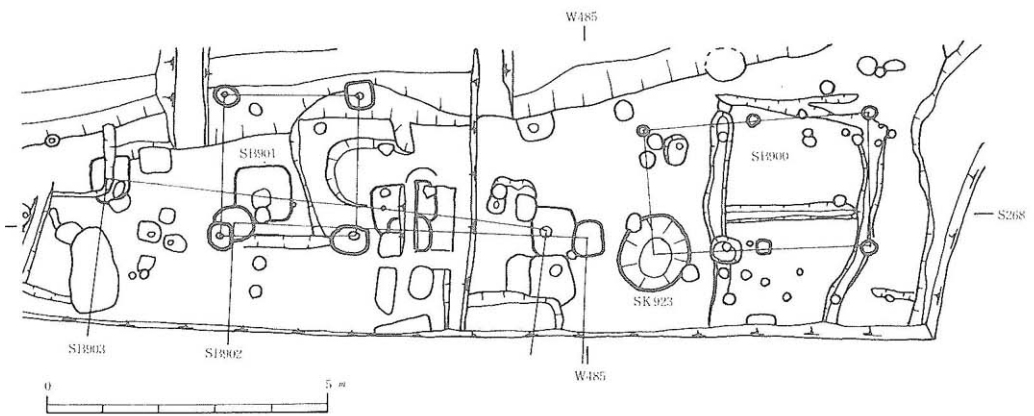
(10)SB900・901・902・903 建物跡、SK923 土塋跡(第34図)

**SB900 建物跡**はSE921井戸跡の南約7mにある東西棟1間×2間の建物跡である。第Ⅲ層面で検出する。灰黒色土とその上層の灰白色粘土層が建物跡を覆う。柱間寸法は梁間が2.36m、桁行で、東より2.08+2.17=4.25mである。また、その方向は東で北に3°46'と大きく振れる。柱穴は30cm前後の方形または円形で、深さは15cm程度である。埋土は灰白色粘土混りの黒褐色土で一手に埋めており、中に須恵系土器の杯を含む。

**SB901 建物跡**はSB900建物跡の西8mにある。地山面で検出される1間×1間の建物



第 33 図 SE921 井戸跡



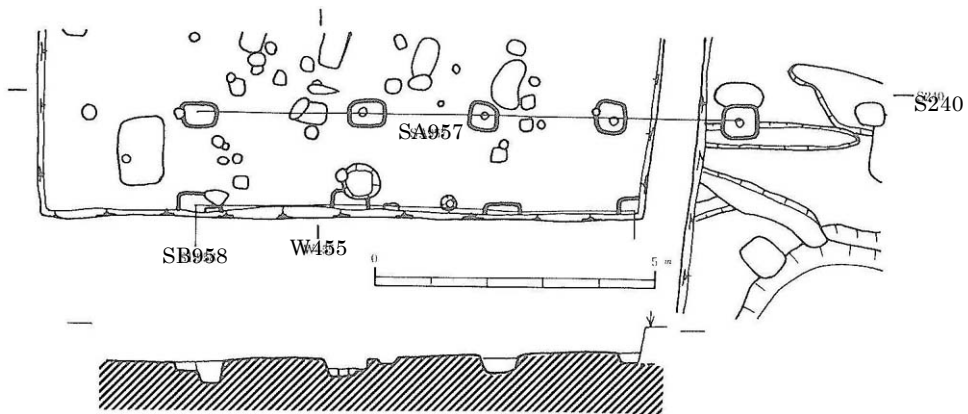
第 34 図 SB900~903 建物跡

跡で、重複する SB902、SB903 建物跡の柱穴を切る。柱穴埋土中に近世陶器を含む。

**SB902 建物跡**は SB901 建物跡と一部重複して南にある 2 間分の柱穴列で、南北棟建物跡の北妻柱穴と思われる。柱間寸法は東より、3.1m 等間で、その方向は東で南に 3° 41' と大きく振れる。

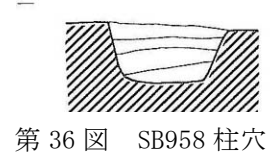
**B903 建物跡**は SB902 建物跡の柱穴に切られる東西方向に 3 間分の柱穴列で、東西棟建物跡の北側柱列と思われる。柱間寸法は 2.6m 等間になると考えられる。その方向は東西基準線に対し、南で 7° 47' と大きく振れる。なお、この柱穴列の西より 1・2 番目の柱穴は SB922 の第 2 案で使用したもので、この SB903 建物跡については SB922 建物跡の第 1 案が成立した場合に限って成立する。

(11)SB958 建物跡、SA957 柵跡(図版 6、第 35 図)

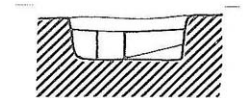


第 35 図 SB958・SA957

**SB958 建物跡**は SB884 建物跡の東 20m にある 3 間分の柱穴列で、東西棟建物跡の北側柱列と考えられる。地山面で検出される。柱間寸法は不明であるが、2.7m 等間と推定される。また、建物跡の方向は調査トレンチに沿うことから、基準線にほぼ一致すると考えられる。柱穴は 1 辺 0.8m の方形で、深さは 0.3m を残す。柱穴埋土は茶褐色砂質土を用い、一手に埋めている(第 36 図)。柱痕跡は直径 20 cm の円形である。



第 36 図 SB958 柱穴



第 37 図 SA957 柱穴

**SA957 柵跡**は SB958 建物跡の北 2m にある東西方向に 4 間分の柱穴列である。SB958 建物跡に沿っていることから、建物の北を遮閉する施設と考えられる。柱痕跡を基にした柱間寸法は、東より  $2.21+2.36+2.18+2.80=9.55\text{m}$  と各柱間でばらつきがある。その方向は 1° 11' 東で南に振れる。柱穴は 1 辺 0.6m の方形で、側壁は垂直に立つ。深さは 0.3m を計る。柱穴は地山ブロックを含む黄褐色土で一手に埋められ

ている。柱痕跡は直径 20cm の円形を呈す(第 37 図)(12)SB959 建物跡(図版 6、第 38 図)

調査地区の東北隅に位置する南北棟 2 間×4 間の掘立柱建物跡である。柱穴は削平が著しく、底部を残すにすぎないが、妻柱穴は深く掘っているようで、比較的良好に残っている。柱間寸法は梁行で  $2.00+1.93=3.93\text{m}$ 、桁行では削平されている柱穴もあり、正確には算出できないが、 $1.8\sim 1.9\text{m}$  等間と考えられる。西側柱列を基にした建物跡の方向は  $2^{\circ} 58'$  北で東に振れる。柱穴埋土は  $0.5\text{m}\times 0.6\text{m}$  の方形で、地山ブロックを含む灰褐色土を用いた互層をなす。柱痕跡は 20cm の円形である。

#### (13)SB960 建物跡(第 39 図)

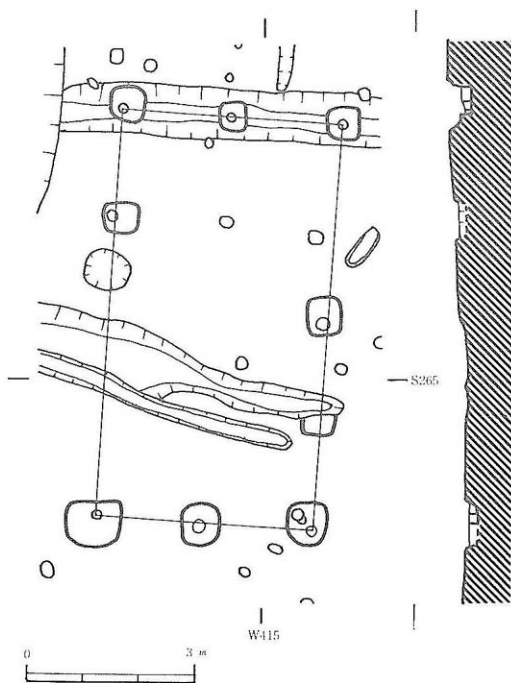
SB960 建物跡は SB959 建物跡の南約 12m にある 1 間×1 間の建物跡である。柱間寸法は東西約 3.5m、南北 3.8m である。その方向は北の柱筋で  $4^{\circ} 50'$  東で南に振れる。柱穴は 1 辺 0.5m の方形で、柱痕跡は直径 16 cm の円形である。

#### (14)その他の遺構

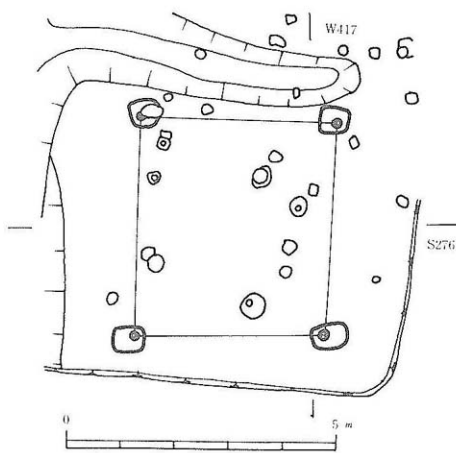
第 II a 層上面では多数の柱穴がある。すべて、径 20~30cm の円形の柱穴で中世以降に属す。建物跡としてまとまるものはほとんどなく、その点については今後検討したい。ただ SB899 建物跡と重複する SB944 建物跡は柱穴の形状より、これに属す建物跡と思われる(第 7 図)。

梁行、桁行とも 2 間と考えられ、その方向も基準線に対し、 $45^{\circ}$  近く振れている。この他、土砧跡や溝が多数あるが、すべて中世、近世に属するものである。ここでは、これらの遺構の記述は割愛する。

註 1.掘り込み地業については層序の項を参照されたい。



第 39 図 SB960 建物跡



第 38 図 SB959 建物跡

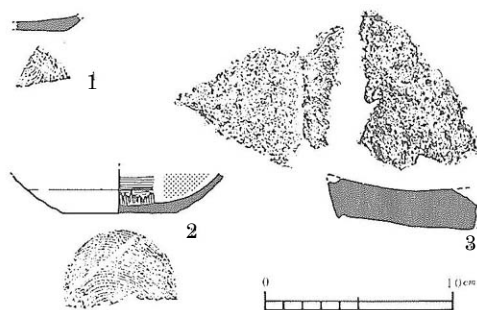
## V. 出土遺物

第 28・29 次発掘調査地域から出土した遺物には土師器・須恵器・須恵系土器・緑釉陶器・灰釉陶器・硯のほか中世陶器・縄文式土器・弥生式土器などがある。以下(A)で遺構、層ごとに記述し、(B)で土器と瓦について、全体的な様相をまとめておきたい。なお、(A)ではSK956 池状遺構と第Ⅲ層(整地層)出土の遺物が建物群の年代決定に重要な意味をもつので、最初に記すことにする。

### A. 各遺構・層出土の遺物

#### (1)SK956 池状遺構の出土遺物(第 40 図)

第Ⅲ層下地山面で検出された SK956 を部分的に掘り下げたところ、若干の遺物が出土した。須恵系土器杯の小片 1 点(第 40 図 1)のほか、回転糸切りでケズリ調整のない内黒土師器杯(2)、土師器餐・須恵器蓋・平瓦の破片がある。平瓦には第Ⅲ期のもの(3)が含まれる。

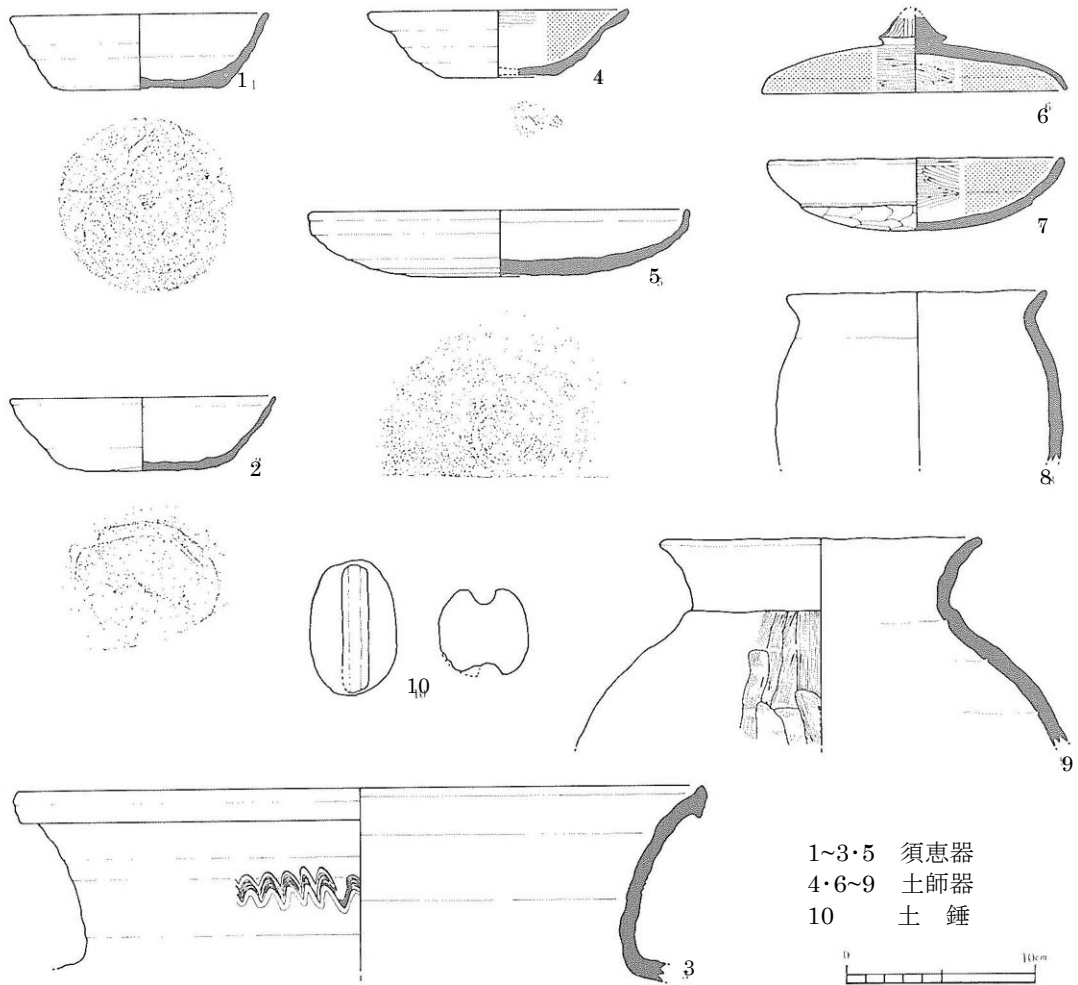


第 40 図 SK956 池状遺構出土遺物

#### (2)第 28 次第Ⅲ層の出土遺物(第 41 図)

第Ⅲ層(整地層)からは、須恵系土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・土錘・瓦が出土している。

須恵系土器は杯底部 2 点が認められる。土師器ではロクロ調整のものとロクロを使用していないものがある。第 41 図 4 は内面ヘラミガキ、黒色処理を加えたもので、底部には糸切痕を残す。ロクロを用いないものでは、蓋(6)、杯(7)、壺(8・9)がある。6 は全面をヘラミガキ、黒色処理を施した蓋である(図版 9)。宝珠形のつまみと天井部がいびつになっており、ロクロを使用したとは考えられない。内面のミガキは、中央部で一方向に磨き、次に周囲をレンズの絞りに、さらに口縁部を同心円状という手順で行なわれている。外面もつまみ以外では同様のミガキとなっている。7 は丸底の内黒杯で、体部中ほどに稜を持つ。稜の下から底部にかけて手持ヘラケズリ調整がみられ、口縁部はヨコナデにより調整されている。内面底部のミガキは判然としない。8 は小型の甕である。小片からの復元であり、しかも器面が荒れているため詳細は不明である。9 は口径 17 cm で胴部の最大径が口径よりもかなり大きい壺である。外面体部にはこまかい刷毛目調整がタテ方向に加えられ、



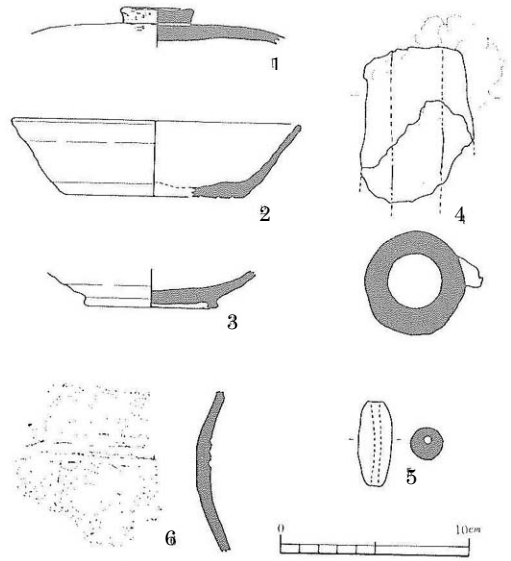
第41図 第28次調査第Ⅲ層の出土遺物

口縁部と内面にすべてヨコナデの調整が施されている。須恵器には坏(第41図1・2)、盤(5)、甕(3)、瓶などがある。1はヘラ切りで調整のない杯、2は底部全体を手持ヘラケズリしているものである。5は口径20.2cm、器高3.5cmの盤で、底部には右回転のヘラケズリ痕がみられる。緑釉陶器は碗と思われる破片が1点出土している。口縁部はくの字に外反し、両面にていねいなヘラミガキが施されている。全体にごく淡い緑色の釉がみられるが、部分的に黄白色を呈する箇所もある。あるいは火熱を受け変色したものかも知れない。断面は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。灰釉陶器では皿と瓶の小片がみられる。皿は内面だけに灰釉をかけたものである。外面は灰白色を呈し、堅く焼きしまっている。瓦では第Ⅱ期の平瓦が多く含まれていた。

### (3)東半部(29次)の第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の出土遺物(第42図)

東半部の第Ⅲ層は28次の第Ⅲ層と同一と認定できるまでに至らなかったため、区別して述べる。第Ⅲ層からは、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・須恵系土器(?)、瓦のほか土錘、轆の羽口が出土している。須恵器ではへら切りで調整のない杯(2)、糸切りで調整のない杯、へらミガキが全面に及ぶ蓋(1)のほか甕・高台杯などがある。土師器は内黒の杯・甕があるが小片である。灰釉陶器はⅢの破片1点が出土している(3)。内面にごく薄い灰釉がかかり、外面は灰色を呈する。緑釉は器種不明の小破片である。

須恵系土器かと思われるものに杯の底部2点があるが、磨滅していて断定できない。瓦には第Ⅱ期から第Ⅳ期までの平瓦が含まれている。このほか、土錘(5)と轆の羽口(4)が各1点出土している(図版10)。



(1~5 第Ⅲ層、6 第Ⅳ層出土)

第42図 第29次第Ⅲ・Ⅳ層出土の遺物

第Ⅳ層・第Ⅴ層からは縄文式土器が数点出土しているだけである。第Ⅳ層には(第42図6)の大木8b式と網目状捺糸文の大木2b式が、第Ⅴ層では大木2bの小片がみられる。

### (4)建物跡関係の出土遺物(第43図)

発見遺構の章で述べたように、建物跡群は直接第Ⅲ層を切るものと、地山面から検出するものの二群がある。第Ⅲ層中には須恵系土器が含まれている。しかも柱穴埋土からの出土土器を見ても、これより新しいものがないことから、柱穴中の遺物で年代をより限定することはできない。建物跡の柱穴埋土から出土する土器の器種を表示すれば次のようになる(表3)。ここでは地山面より検出される建物跡の出土遺物について、若干の補足説明をし、図示できたものについて紹介するに留める。

地山面より検出する建物跡にはSB876・877・895~897 建物跡がある。SB876 建物跡の柱穴埋土からの遺物には土師器の杯、内黒処理した甕、内黒処理しない甕、須恵器のへらキリ非調整の杯・高台杯、第Ⅱ期の平瓦、鉄滓がある。SB877 建物跡の柱穴埋土では土師器の杯・須恵器の杯・鉢・須恵系土器の鉢がある。土師器の杯には糸切り非調整のもの、へらキリ非調整のもの他に国分寺下層のものがある。SB895 建物跡の柱穴からは、須恵器の鉢、須恵系土器の杯が出土している。SB896 建物跡の柱穴埋土からの遺物には土師器の糸切底非調整の杯、内外両面を黒色処理した杯、高台杯、カメ、須恵器のへら切り非調

表3 建物跡柱穴埋土の出土遺物

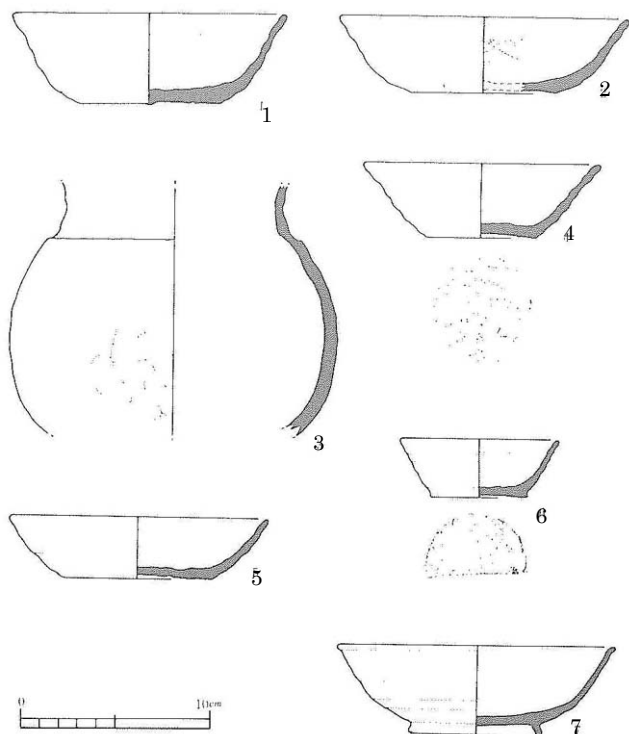
	土師器					須恵器					須恵器		施釉陶器		その他	
	坏	碗	蓋	高台坏	甕	坏	高台坏	鉢	蓋	瓶	甕	坏	鉢	緑釉		灰釉
SB 876	○				○	○	○									Ⅱ期平瓦、鉄滓
877	○					○		○					○			
878					○											
884					○	○			○		○					Ⅱ期平瓦
887	○				○	○							○			Ⅲ期平瓦
888	○				○	○				○	○	○				スサ入り壁材
889														○	○	
891														○		
892	○	○			○					○		○				Ⅱ・Ⅲ期平瓦
893	○	○			○											Ⅲ・Ⅳ期平瓦
894	○			○	○					○	○	○	○			〃
895											○	○				焼壁材
896	○			○	○	○					○	○				Ⅱ・Ⅲ期平瓦
897	○										○	○				Ⅰ期平瓦
898	○					○			○	○	○	○				Ⅳ期平瓦
899	○					○			○	○	○	○			○	焼壁材・耳皿
900	○					○						○				Ⅱ・Ⅲ期平瓦
903	○									○	○	○				
922	○			○		○						○	○			丸瓦

整の杯・盤・蓋・瓶・甕・須恵系土器の杯、第Ⅱ期・第Ⅲ期の平瓦、焼壁材がある。須恵器の蓋にはヘラミガキしたのがある。SB897 建物跡の柱穴の遺物には土師器の糸切り底非調整の杯、須恵器の奮、須恵系土器の杯、第Ⅰ期の平瓦がある。次に図示した資料について述べる。

第43図1はSB884 建物跡の柱穴埋土より出土した須恵器の杯である。ヘラキリで再調整はない。口径14.5cm、底径7.6cm、器高4.8cmを測る。灰色を呈し、胎土に石英粒を比較的多く含む。第43図4はSB899 建物跡の柱痕跡中より出土した須恵器の杯である。糸切りで再調整はない。杯部は底部より、斜上方に直線的に延び、先端は丸くおさまる。口径12.5cm、底径5.7cm、器高4cmである。重ね焼きをしたらしく、口縁部から約0.3cmの中黒灰色を呈す。第43図5はSB922 建物跡の柱痕跡より出土した須恵器の杯である。ヘラキリで再調整はない。口径13.7cm、底径7.8cm、器高は33cmと第43図1に比して浅い。口縁部より0.8cmの範囲が青灰色を呈し、重ね焼きされたものである。第43図6はSB899 建物跡の柱痕跡より出土した小型の須恵器杯である。糸切りで再調整はない。底部



よりやや立ち気味に斜上方に延びる。  
 口径 84 cm、底径 51 cm 器高 31 cm である。第 43 図 2 は SB893 建物跡の柱穴埋土中より出土した土師器の杯である。底部の切り離し法は不明であるが、体部下端部は外周に沿って手もちヘラ削り調整を施す。体部内面を不定方向に口縁に沿ってヘラミガキし、黒色処理する。第 43 図 3 は SB896 建物跡の柱抜き穴中より出土した土師器の広口壺である。ロクロは使用しておらず、体部内面はヨコナデをし、外面はタテ方向にヘラケズリする。口頸部にはケズリが及ばず、横方向のナデ痕が残る。第 43 図 7 は SB889 建物跡の柱穴埋土中より出土した縁釉碗である(色図



第 43 図 柱穴出土の遺物

版 1)。口径 14.3cm、底径 7.0 cm、器

高 4.5cm で、付け高台を有する。付け高台をする際、体部下半部を回転ヘラケズリする。器壁の内外両面をヘラミガキし、淡い緑釉をかける。胎土は白っぽく、緻密で、成形は粘土紐巻上げによるらしく、その痕跡が杯部外面で観察される。

#### (5)SE921 井戸の出土遺物(第 44 図)

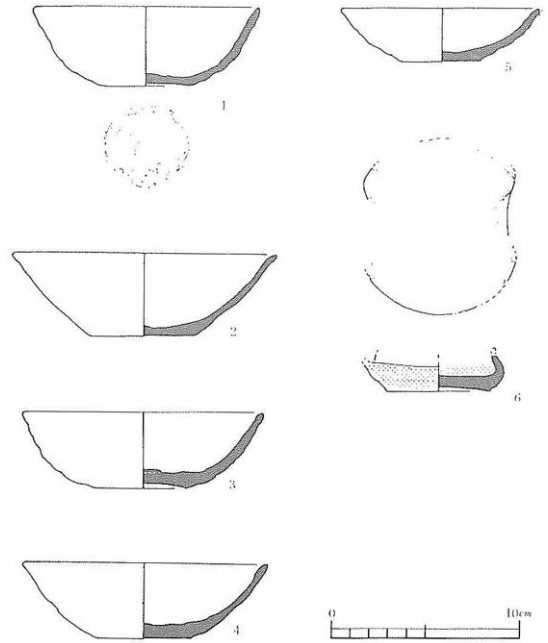
SE921 井戸の遺物は裏込め土から出土したものと、埋め土出土のものに大別される。

裏込め土には須恵系土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・耳皿・砥石と多量の瓦が突き込まれていた。須恵系土器は杯と台付の鉢と思われる破片が出土している。杯は底部数で 49 点あり、いずれも底径 5cm、口径 13~14cm 程のものと思われる(第 44 図 1・2)。土師器では杯・高台杯・甕・耳皿が出土している。杯は底部で 23 点あるが、そのほとんどは糸切りで調整がない内黒杯である。耳皿は 1 点みられ底部に糸切痕を残す(6、図版 9)。全面黒色処理されたものであるが、ヘラミガキは全くみられない。須恵器は杯底部 6 点のほか甕・瓶の小片がある。杯は糸切り、ヘラ切りのものが、ともに含まれている。緑釉陶器では碗ないし皿の体部小片 4 点と花文の碗 1 片が出土している。後者は淡緑色の地に鮮やかな濃緑色で花文を描いたものである。なお、この花文緑釉は第 II 層出土の花文緑釉碗(第 56 図 16)とは色調、胎土が異なり別個体のものである。瓦は平箱にして約 10 箱分の平瓦・

丸瓦が出土した。平瓦には第Ⅳ期の記号刻印瓦・ヘラ書き瓦が含まれている(第 62 図 3、第 63 図 5 など)。以上のように、井戸の裏込め土出土の土器では須恵系土器が主体を占めている。井戸の埋土からは、須恵系土器(第 44 図 3~5)・土師器・須恵器・瓦のほか焼け壁が出土しているが、裏込めの様相と大きな違いはない。

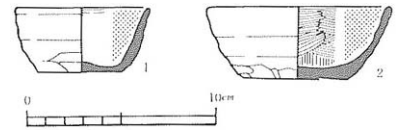
(6)住居跡関係の出土遺物(第 45 図)

S1906 住居跡の出土遺物には建設時を示めす竪穴周溝埋め土中に含まれるものと、住居跡廃絶後の埋まり土中の遺物に分れる。埋まり土は 2 亜層に分れるが一括して述べる。周溝の埋め土中からの出土遺物には須恵系土器



第 44 図 SE921 井戸の出土土器

杯・土師器の糸切り底の杯・カメ・須恵器の杯、第Ⅱ期の平瓦がある。住居跡埋まり土中からの出土遺物には須恵器の杯・蓋・瓶・甕・土師器の杯、小型の杯、蓋・甕や第Ⅱ期の平瓦がある。須恵器の杯はすべてヘラ切りで再調整のないものである。土師器の杯は糸切り非調整で内面を黒色処理している。小型の杯には糸切り非調整の底部を有するものと、回転ヘラケズリ調整をするものがある。第 45 図 1 は埋まり土中より出土した土師器の小型杯である。口径 7.1 cm、底径 4.4 cm、器高 3.5cm で、体部はかなり垂直気味に立つ。体部下半と底部を手持ちヘラケズリ調整する。



第 45 図 住居跡・工房跡の土師器

S1908 住居跡埋まり土の出土遺物には須恵器の蓋、ミガキの蓋、杯・瓶・甕・土師器の杯、甕や第Ⅱ期、第Ⅲ期の平瓦がある。そのすべては破片である。

(7)工房跡の出土遺物

SX907 工房跡に伴う遺物と思われるものに鉄製の鉗はしがある。長さは約 14 cm で片側しかない。

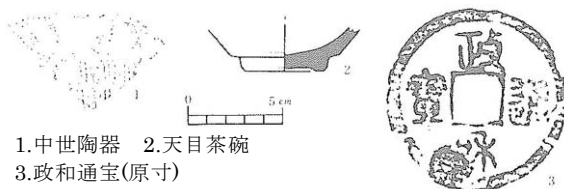
SX911 工房跡の埋まり土中よりは須恵系土器の杯、須恵器の杯、高台杯、蓋、甕、土師器の杯、甕や鉄滓が出土している。須恵器の杯はヘラ切り非調整のものである。土師器の杯は糸切り非調整のものが多い。

SX912 工房関係の遺物はその外周の SD953 溝中より主に出土している。主な遺物とし

ては土師器の杯、甕、須恵器の杯、高台杯、稜碗、蓋、ミガキの蓋、須恵系土器の杯、灰釉の碗、第Ⅱ期の平瓦がある。第45図2はこのSD953溝中より出土した土師器の小型杯である。口径9.9cm、底径5.6cm、器高3.9cmで底部内面を一定方向に、また体部内面を口縁に沿ってヘラミガキし、黒色処理している。底部の全面と体部下端部を手もちヘラケズリ調整している。

(8)SK917 土砦の出土遺物(第46図)

SK917 土砦埋土からは、中世陶器と北宋銭のほか、須恵系土器・土師器・須恵器などが出土している。中世陶器では甕と天目茶碗がある。甕は第46図1に示した押印のあるものをはじめ、体部片12点、底部



第46図 SK917 土砦の出土遺物

片2点がある。天目茶碗はケズリ出し高台のものである(2)。内面はにぶい赤褐色を基調とし、これに黒色の同心円文様が描かれている。外面は軽いヘラケズリが行なわれている。断面は灰白色で、硬質のものである。銭貨としては「聖和通宝」(初鑄1111年)が1枚出土している(第46図)。

(9)"IS08-2層"出土の遺物(第47~49図)

IS08の2層から多量の須恵器・土師器のほか、須恵系土器・灰釉陶器・硯などが出土している。全体の出土点数を示しておくこと次表のようになる。表中の数については、杯・甕の類の場合底部数で、蓋はつまみの数で現わし、他の破片から存在が確認できるものについては○印で表現している。

表4 “IS08-2層” 出土の遺物点数

	蓋	杯	高台杯	高台皿	稜碗	碗?	高杯	甕	瓶
ミガキの須恵器	4				7	3	2		
須恵器	17	223	4		16				○
土師器 (ロクロ)	6(内黒5・ 両黒1)	291 (内黒)		3 (両黒)	1 (両黒)			21	
土師器 (非ロクロ)		2						11	
須恵系土器		13	1					3	
灰釉陶器				○					○
その他	硯4、土錘1、鉄釘1、瓦								

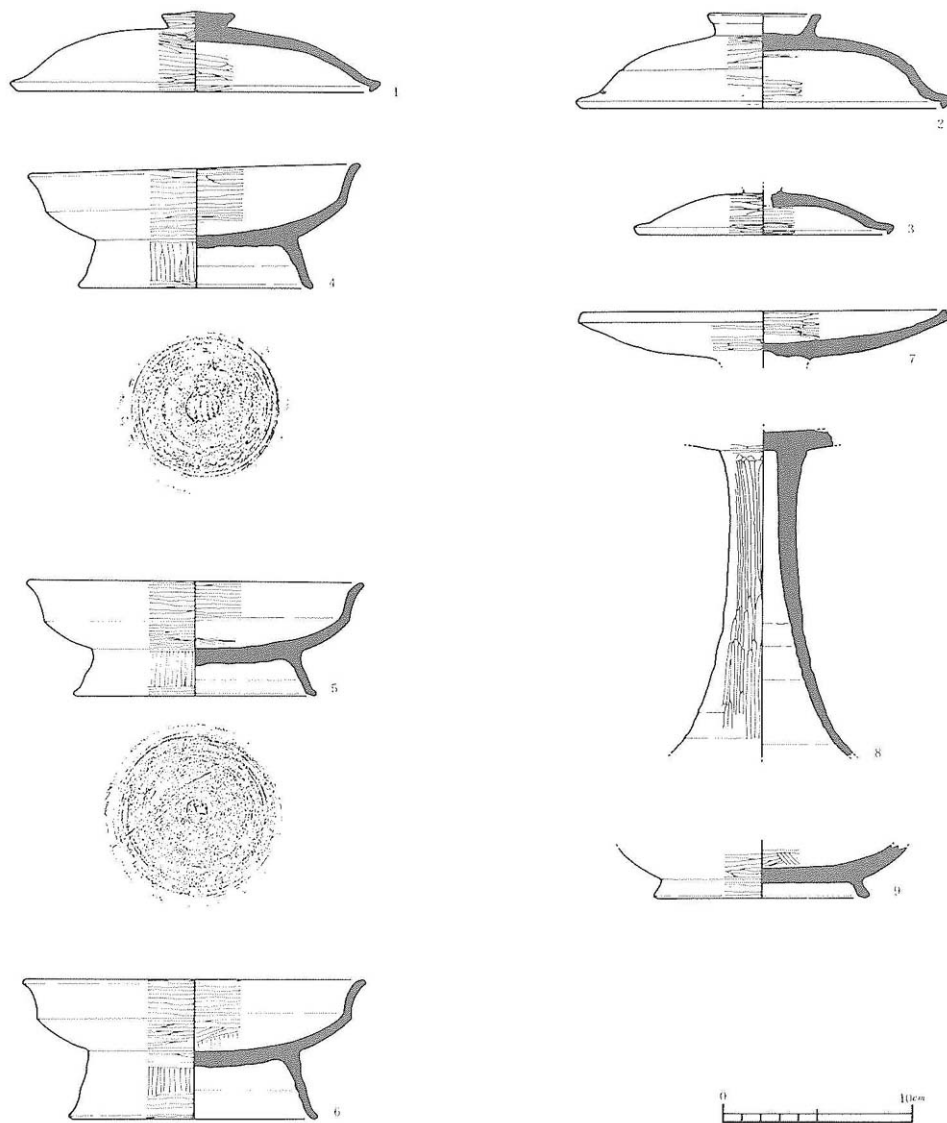
この中に、須恵器としては極めて特異なヘラミガキ調整か施された一群の土器がある。

多賀城跡においては初めて発見されたものであり、また、各器種がまとまって出土しているので、ミガキの須恵器の項で若干詳しく説明しておきたい。

ミガキの須恵器では蓋・稜椀・高杯などが出土している。

蓋はつまみの形と口径から A～C の 3 種に分けられる。

蓋 A(第 47 図 1・図版 7)は扁平な宝珠形のつまみがつき、天井部と口縁部の境界はゆるやかな段をなしている。端部は急角度で内側に屈曲する。口径は 19.6 cm、器高は 4.2 cm を計る。ヘラミガキは器面全体にていねいに施されている。外面のミガキはロクロ目に沿って、即ち同心円状に行なわれ、内面のそれは中央部で一方向→周縁で同心円状に行なわれ



第 47 図 IS08-2 層出土の“ミガキの須恵器”

ている(→は工程順を示す)。両面には重ね焼き痕跡がみられ、重なっていた部分ではあずき色を呈し、他の部分は暗い紫褐色を呈する。従って、外面には径 18.1 cm、内面には径 14.5cm 程の器が重ねて焼かれたことが知られる。胎土は砂粒をほとんど含まないもので、焼成は堅徴である。

蓋 B(図 2・図版 7)はリング状のつまみがつき、天井部の肩が蓋 A と比較して若干張っている。天井部と口縁部の境はゆるやかな段をなし、端部は下方に短く屈曲する。口径 19.6cm、器高 5.0 cm、つまみの径 6.0cm、つまみの高さ 1.2cm を計る。ヘラミガキはつまみの部分を除き全面に行なわれている。ミガキ手順等は蓋 A とほぼ同様である。色調は明るい青灰色を基調とするが、口縁部付近では暗い青灰色を呈する。胎土・焼成は蓋 A と同様である。

蓋 C(図 3、図版 7)は口径 13.7 cm の小型品である。つまみは欠けているが、その他の器形・ヘラミガキ・胎土・焼成・色調などの点で蓋 A と極めて似ているものである。なお、外面には径 10.6cm の器が置かれたと考えられる重ね焼き痕跡が観察される。

稜椀は高台の高さから 2 種に分けられる。

稜椀 A は図 4 に代表され、口径 17.5cm・器高 6.0~6.6 cm・高台径 12.5 cm、高台高 2.5 cm を計る。底部周囲は回転ヘラケズリされているが、中心には静止糸切りと思われる痕跡が残っている。ヘラミガキは高台の内側を除き全面にみられる。内面のミガキは中央部で不定方向→周縁で同心円状に行なわれ、外面は高台部でタテ方向→高台の端部と椀部でロクロ目に沿って行なわれている。内面には径 12`3cm 程の器を重ねて焼いた痕跡がみられ、その円形部分はあずき色を、周辺は灰色を呈している。胎土・焼成は蓋 A と同様である。蓋 A はこのほかに 4 点出土しているが、器形・法量・調整技法・胎土・焼成などすべての点で図 4 とほとんど相違がない(5)。恐らく規格性をもって製作されたものであろう。なお、5 の底部中心にヘラ切り状の突起がみられるが、回転ヘラケズリの際に生じたものと思われる。

稜椀 B(図 6・図版 7)は口径 18`0 cm、器高 7.4 cm、高台径 13.1 cm、高台の高さ 3.6cm を計る。高台が高い点を除くと、稜椀 A と顕著な相違は見出し難い。ただ類例 2 点とも A より白っぽく、重ね焼き痕跡はみられない。

椀?(図 9・図版 7)は高台の径 11.4cm、高台の高さ 1.0 cm を計り、体部がゆるやかに開いて立ち上がる。回転ヘラケズリが底部中心まで及び、切り離しは不明となっている。ヘラミガキは高台の内側を除き全面に加えられている。内面のミガキは中央部で不定方向→その周縁で同心円状に行なわれ、外面ではロクロ目に沿って加えられている。色調は内面があずき色、外面が黒灰色を呈する。胎土・焼成は蓋 A と同様である。

高杯(図 7・8)のうち、7 は口径 19.4 cm を計り、脚部が欠けている。内面のヘラミガキは

中央部を一方向に→その周縁を同心円状に行なわれ、外面のミガキはすべて同心円に施こされている。色調は灰白色を呈するが、胎土・焼成は蓋 A と変らない。8 は脚部の破片であり、透しはみられない(図版 7)。ヘラミガキは脚部の内側を除いて施されている。脚部外面をタテ方向に磨いた後、杯部との境付近をロクロ目に沿って磨いている。わずかに残る杯部内面には一方向のミガキが観察される。色調は灰白色または灰褐色を呈する。胎土は他と比較してこまかい砂粒を多く含んでいるように見えるが、火熱を受けたためかと思われる。

**須恵器**では蓋・杯・高台杯・稜椀・甕・瓶が出土している(第 48 図)。

蓋は宝珠形つまみがつくもの(第 48 図 1・2)と中くぼみつまみのもの(3)がある。

1～5 の天井部には回転ヘラケズリ痕が残っている。

杯ではヘラ切りで調整を加えないものが多く 8 割を占める(6～10)。このほか、糸切りで調整のないもの(11)、手持ヘラケズリ(②あるいは回転ヘラケズリを加えたものなどが若干みられる。

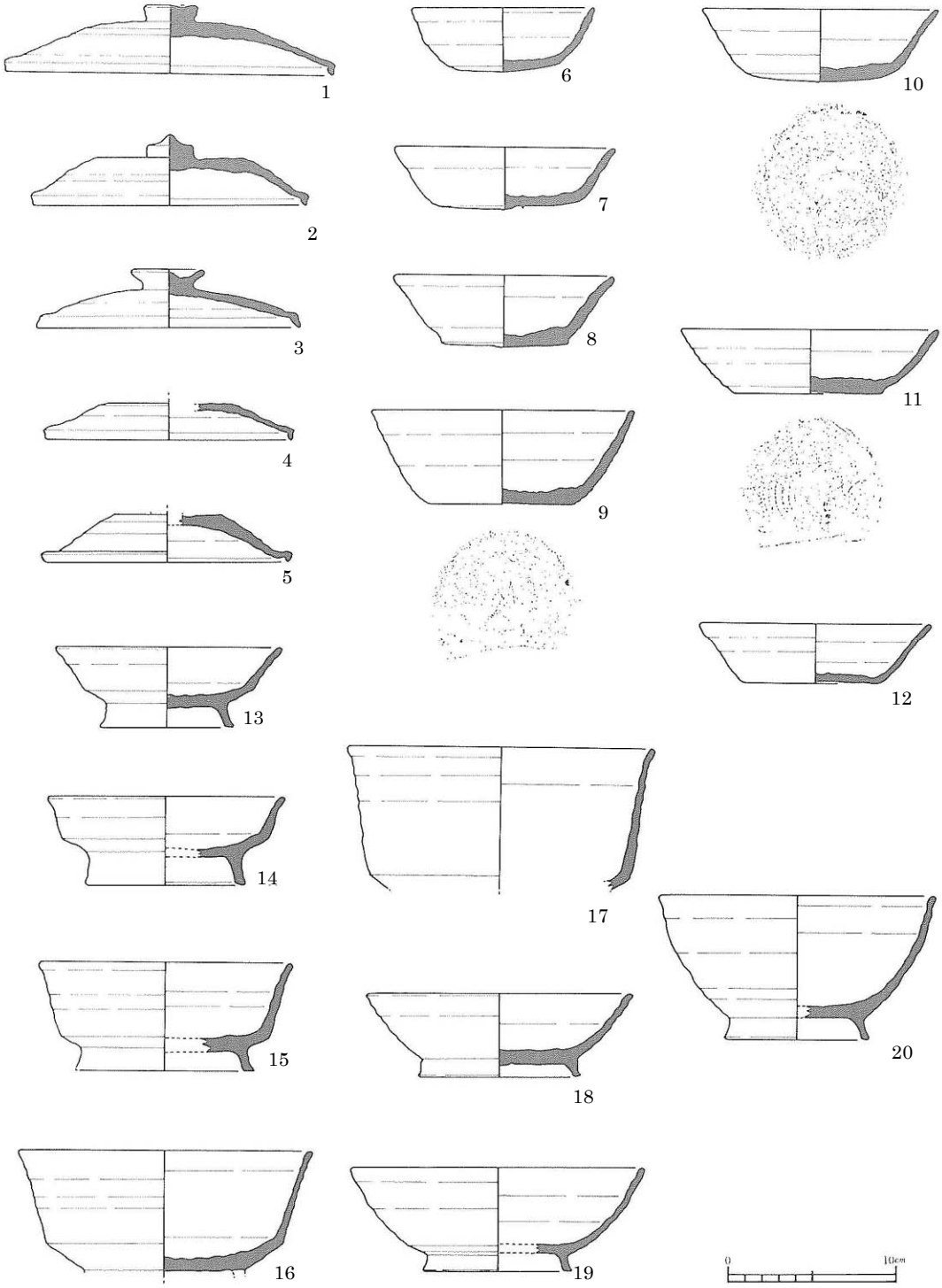
稜椀には口径 13.5～15.0 cm の小型のもの(13～15)と口径 17.5～18cm と大型で深い器形のもの(16・17)がある。いずれも稜が体部の下位につく点で共通性がある。底部の切り離しは回転ヘラケズリあるいは欠損により不明である。なお、17 は小片からの復元であり口径と傾きに若干の誤差が生じうる。

高台杯は図示した 3 種の器形が認められる(第 48 図 18～20)。18 は底部にヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめている。19 と 20 は器形が異なるが、体部が内湾気味に立ち上る点、口縁と高台の端部のおさまり方、胎土などの点で酷似する。

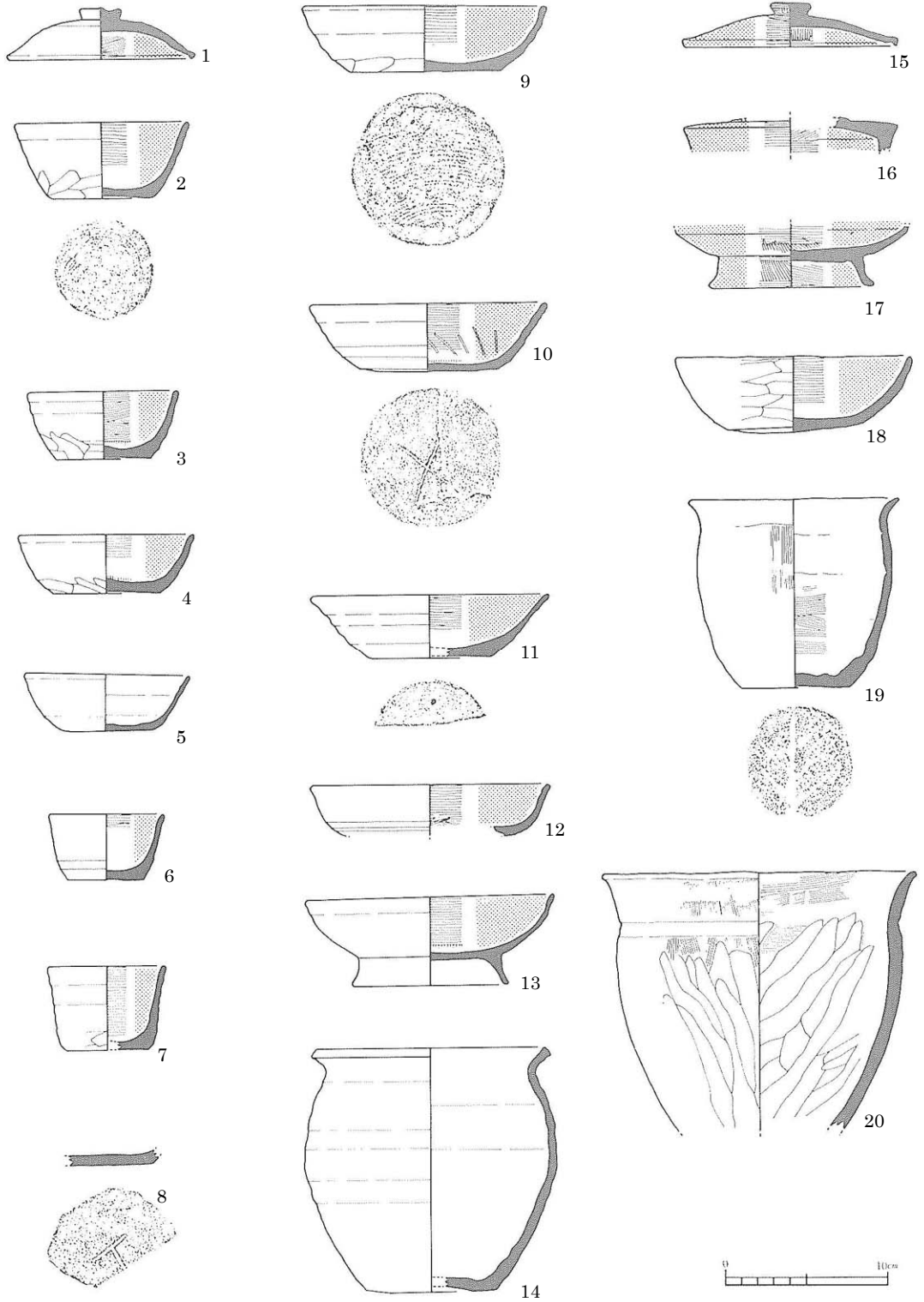
餐・瓶は小破片で図示できるものはない。

**土師器**はロクロ使用のもの(第 49 図 1～17)と、ロクロが用いられていないもの(18～20)に大別される。まず**ロクロ土師器**からみると、蓋・杯・高台杯・稜椀・甕が出土している。

蓋には内面黒色のもの(1)と両面黒色のもの(15・16)がみられる。1 は天井部を回転ヘラケズリした後宝珠形つまみを付けたものである。口縁の端部は下方に短く屈曲し丸味を帯びる。内面のヘラミガキは極めてこまかい巾で一方向に行なわれている。15 は扁平なつまみがつく蓋で、全面にヘラミガキ・黒色処理が及ぶ。外面のミガキはつまみの側面をタテ方向に行ない、他の部分ではロクロ目に沿う形で行なっている。内面の場合は、中央部を一方向にそして周縁を同心円状に磨いている。16 は短頸壺の蓋かと思われる。内外両面にていねいなヘラミガキ、黒色処理が施されている。



第 48 図 IS08-2 層出土の須恵器



第 49 図 IS08-2 層出土の土師器



杯はすべて内面にヘラミガキ・黒色処理を加えたものである(第 49 図 2~11)。切り離し方の判る底部についてみると、ほとんどが回転糸切りで、わずかながら静止糸切りとヘラ切りが含まれる。図 2~4 は口径 9.3~10.7cm 前後の小型の杯である。体部下端付近に手持ヘラケズリがみられ、内面のヘラミガキが底部で一方向に、口縁部でロクロ目に沿って行なわれている。ただし、2 はヘラケズリが底部まで及ばず回転糸切痕をとどめている。6.7 は口径 7.0cm 程の極く小さな杯である。6 の底部と下端部には回転ヘラケズリ調整がみられる。7 は回転糸切り底で、体部下端に手持ヘラケズリ調整が加えられている。8 は手持ヘラケズリされた底部に「人」または「イ」のヘラ書きが認められる。9 は静止糸切りによる杯で、底部周縁と体部下端に手持ヘラケズリ痕が残る。口径 15.0cm、器高 4.0 cmを計る。内面は器面が荒れておりヘラミガキの手順等は不明である。なお、口縁部には油脂状の付着物がみられる。10 は底部全面と体部下半に回転ヘラケズリが及ぶ杯である。内面のヘラミガキは底部を一方向に、口縁部をロクロ目に沿って行なわれ、最後に暗文状のミガキが加えられている。底部には「×」のヘラ記号が観察される。11 は回転糸切りで調整が全くない杯である。内面は磨滅しており、ミガキ方は判然としない。

高台杯(図 13)は内面にヘラミガキ、黒色処理を施したもので、ミガキは底部で一方向、口縁部でロクロ目に沿って行なわれている。高台接合の際、ロクロナデが底部中心まで及んでいるため、切り離しは不明である。12 は底部が欠損しているが、高台杯かと思われる。12・13 とも軟質で、黄白色を呈している点は似ている(図版 9)。

稜碗(図 17)は全面に丹念なヘラミガキと黒色処理が施されたものである。内面のミガキは、中央部を一方向→その周囲をレンズの絞り状に→口縁部をロクロ目に沿う形といった 3 工程で行なわれている。高台部のミガキは、まず外面をタテ方向に、次にその上、下端と内側をロクロ目に沿って仕上げられている。

甕には長胴甕・糸切底の小型獲・内面黒色のものなどがあるが、図示できるのは図 14 のみである。14 は内外両面にロクロ目残り、底部は手持ヘラケズリされたものである。体部下半には煤が付着する(図版 8)。

次に、ロクロを用いていない土師器についてみると、杯と甕が出土している。

杯(18)は丸底気味の底部から口縁部に至る外面全体に手持ヘラケズリが及んでいるものである。内面にヘラミガキ・黒色処理が加えられている。底部のミガキは磨滅のため判然としない。

甕では大小の器形がみられる。図 19 は口径 12.8 cm、器高 11.6cm の小型甕で、底部に木葉痕が残る。全体に器面の剥落が著しいが、外面ではタテ方向に刷毛目調整を加えた後口縁部をヨコナデし、内面ではヨコ方向の刷毛目調整を行なった後口縁から体部中ほどまで

ヨコナデを加えたように観察される。なお、内面に粘土紐の巻上げ痕跡がみられる(図版 8)。図 20 は口径 19.2cm の髷であるが、底部を欠いている。外面ではタテ方向に刷毛目調整を施した後、口縁部にヨコナデ、体部にタテ方向のヘラケズリを加えている。内面では口縁部付近にヨコ方向の刷毛目がみられ、これを切ってタテ方向のヘラケズリが体部に加えられている(図版 8)。

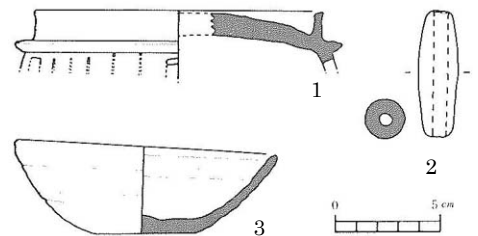
須恵系土器では第 50 図 3 に代表される杯のほか高台付の破片がみられる。

灰軸陶器は瓶体部の小破片 2 点と内面にまだらに灰軸がかけられた皿の口縁部の小片 2 点が出土している。

硯は須恵質の円面硯 3 点と風字硯 1 点が出土している。第 50 図 1 の円面硯は 4 分の 1 の破片からの復元である。回転ヘラケズリされている陸は、なだらかな曲線を描いて海に至り、その外側に高さ 1.2 cm の縁がつく。脚部には長方形の透しかみられ、5 ヶ所にあげられたものと推定される。さらに透しに挟まれた部分には、ほぼ 1.3 cm 間隔で沈線が刻まれている。胎土は砂粒をほとんど含まず、堅く焼きしまっており、青灰色を呈する。なお、陸の中心付近は相当に磨滅している。他の 2 点は脚部の小破片で、ヘラによる沈線が施されている。風字硯は隅の小片である。

瓦では 220-E 軒丸瓦のほか多量の平瓦・丸瓦がみられる。その中に第 II 期の刻印瓦(物・因・因)と第 IV 期のヘラ書き瓦が含まれている。

このほか、土錘 1 点(第 50 図 2)、と鉄釘 4 本が出土している。

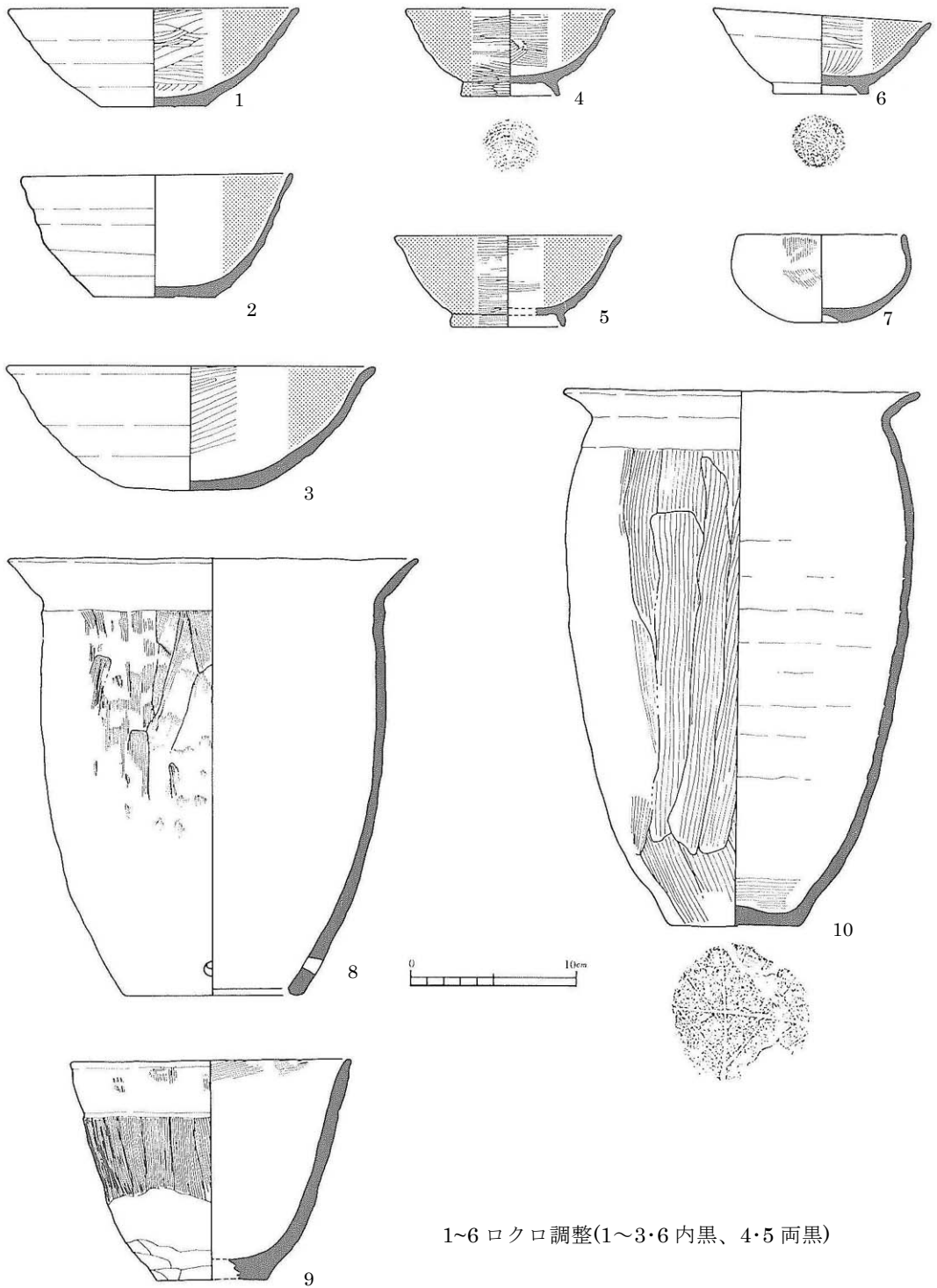


(10)その他の遺構出土の遺物(第 51・52 図)

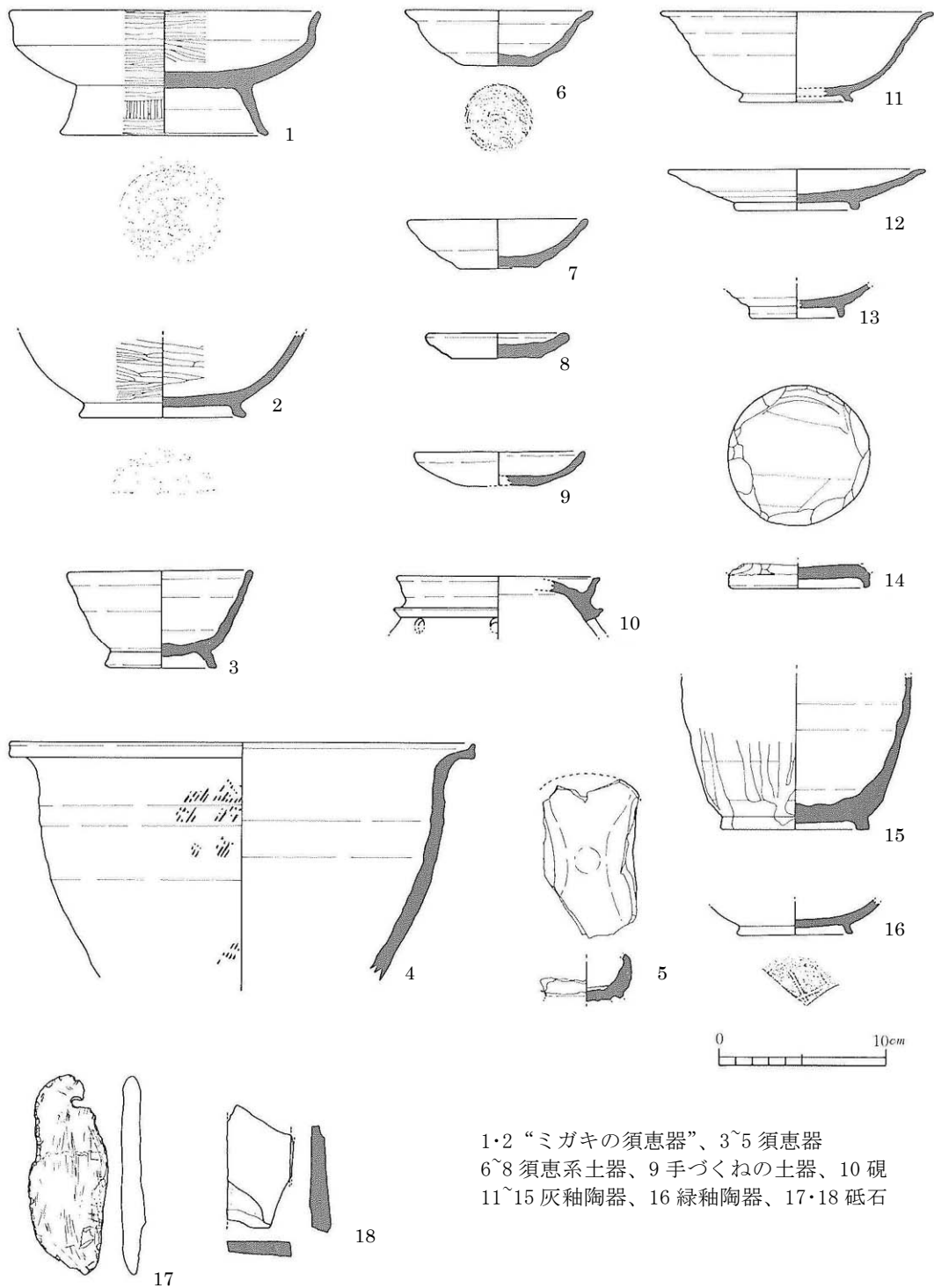
第 50 図 IS08-2 層出土の遺物

先に述べた遺構以外の土壌・溝・ピットなどからも多量の遺物が出土しているが、ほとんどが遺構の年代・性格を考える上でさして重要なものとは思われない。そこで、この項では主なものを図示し、その説明を加えるにとどめたい。

第 51 図はすべて土師器で、1~6 がロクロ使用のもの、7~10 がロクロを用いていないものである。1~3 は、内面にヘラミガキ、黒色処理を加えた大型の杯である。1 は糸切りで調整がなく、2 は体部下半から底部にかけ回転ヘラケズリ調整され、3 は底部を手持ヘラケズリされたものである。6 は内黒の高台杯で底部に糸切痕をとどめる。4・5 は両面黒色の高台杯である。高台部の内側を除き全体にいいねいなヘラミガキが施されている。4 は底部に糸切痕を残す(図版 9)。7 は底部中央に円形のくぼみをもつ小型杯である。外面にかすかな刷毛目を残すが、全体に器面が剥落しており、詳細は不明である。8 は口径 24.8 cm、器高 26.5 cm、底径 10.8 cm の甑である(図版 8)。下端部に径 1.0 cm の円孔があげられて



第 51 図 その他の遺構出土の土師器



1・2 “ミガキの須恵器”、3~5 須恵器  
 6~8 須恵系土器、9 手づくねの土器、10 硯  
 11~15 灰釉陶器、16 緑釉陶器、17・18 砥石

第 52 図 その他の遺構出土の遺物

いるが、対になる部分が欠けているため、2孔であるかについては断定できない。外面はタテ方向の刷毛目調整が加えられ、その後には口縁部はヨコナデされている。内面の調整は下半部でタテナデ上半部でヨコナデとなっている。図9は口径17.1cmの小型甕である(図版8)。外面全体を刷毛目調整した後、体部下半をナデ調整し、さらに下端から底部にかけてヘラケズリしたものである。口縁部では刷毛目調整後、ヨコナデされている。内面は全体にヨコナデされている。口縁部付近に部分的にヨコ方向の刷毛目が残っていることからナデの前に全体に刷毛目調整を加えていると考えられる。10は口径21.4cm、器高32.3cm、底径7.7cmを計る長胴甕である(図版8)。底部には重複する木葉痕がみられる。外面はタテ方向に単位の長い刷毛目調整を行ない、口縁部をヨコナデにより調整している。内面は体部がタテ方向に、口縁部がヨコ方向にナデ調整されており、底部周縁付近にはヨコ方向の刷毛目が残る。なお、内面には巾約2cmの粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残されている。

第52図には須恵器・須恵系土器・灰釉陶器・緑釉陶器・硯・砥石を掲げた。1～5が**須恵器**である。1と2はヘラミガキ調整された須恵器である。ともにIS082層出土遺物の項で稜椀B・椀?としたものと同類であるので説明は省略する。なお、この2点はIS082層を切るSK951土壌から出土したものである。3の高台杯はロクロナデが底部中心まで及び切り離しは不明である。4は小片からの復元ではあるが鉢と思われる。外面は平行線状の叩き目が、ロクロナデにより半ば消されている。5は高台付の耳皿である。高台部・口縁部とも欠損している。7～8は小型の須恵系土器杯である。9はロクロで調整したものではなく、体部上端と内面をナデで調整し、外面の底部を指でおさえている。11～15は灰釉陶器である。11は口径16.4cm、底径6.8cm、器高5.5cmを計る高台付の椀である。高台は短かく外にふんばる形となり、口縁部は外反する。器壁は全体に薄い。外面の体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの痕跡が残る。内面にはくすんだ緑色を呈する釉がまだらにかかっている。断面は明るい灰色を呈し、焼成は良好である。12は口径15.4cm、底径7.4cm、器高2.4cmを計る皿である。11と同様体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを加えた後低い高台を付けたもので、内面にはくすんだ灰緑色の釉がまだらにかけられている。13も釉のかかり方、調整は11・12と同様である。14は高台皿を硯に転用したものである。底部は全面回転ヘラケズリされ、内面はごく薄い灰釉が刷毛によってかけられている。断面は明るい灰色を呈し、堅く焼きしまっている。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。次に転用についてみると、体部が高台に沿って打ち欠かれており、外面の底部は磨滅し墨が残っている。15は瓶の破片で、外面にはごくうすい釉が全体にかかり、部分的に濃緑色の厚い釉がたれた状況を示す。16は**緑釉陶器**である。器面全体にていねいなヘラミガキを施し、淡緑色の釉をかけている。断面は灰白色を呈し、比較的硬質のものである。

なお、底部には焼成前のヘラ記号「×」がみられる。10は円面硯である。円形と思われる透しがあり、5または6箇所にあけられたものと推定される。

石製品としては砥石(第52図!7・18)と陽物(第53図)が出土している(図版10)。

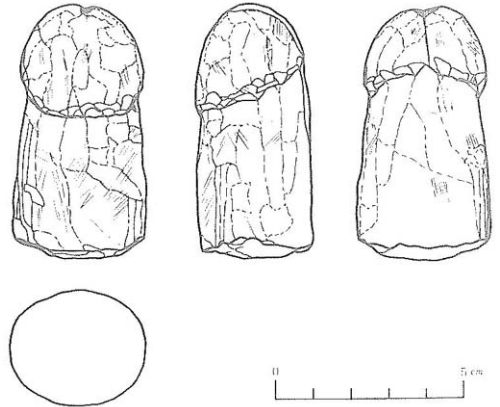
銅製品では鏡・金銅板の破片・北宋銭が1枚出土している。

鏡は界圏・外区・緑の一部を残す花鏡の破片で、復元すると八花鏡と思われる。縁は巾4mmの蒲鉾式で、外区巾は1cmである。表面が著しく風化しており、鏡背外区の文様をはっきりと知ることができないが、飛雲文状の文様を1花に1個配すようであらそこの文様は界線を境にして内区と連らない。鏡面は素文である。銅質は悪い。

北宋銭は1039年初鑄の「皇宋通宝」である(第54図)。

(11)第11層の出土遺物(第55・56図)

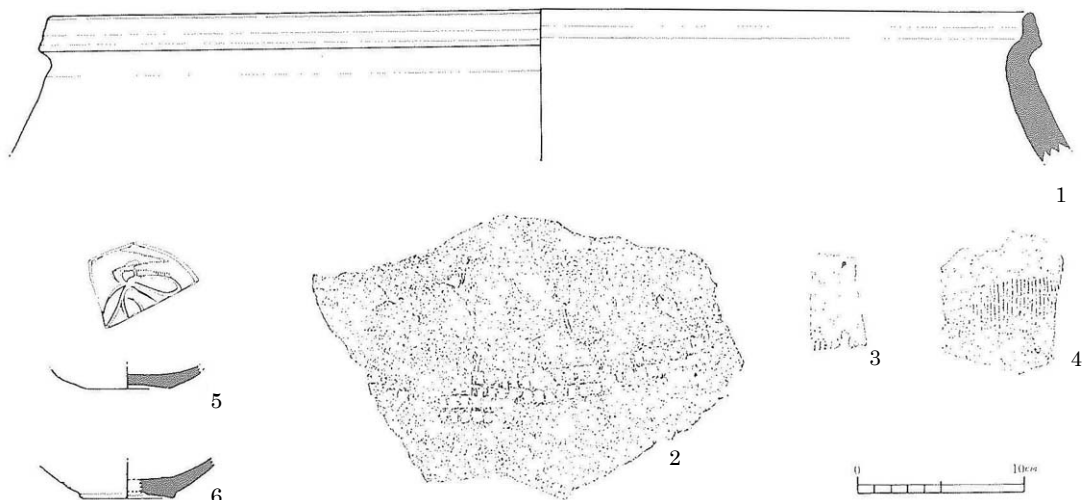
第II層からは中世陶器をはじめ、青磁・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵系土器・須恵器・土師器・硯・るつぼ・土錘・硯・銭・鉄釘などが出土している。この層は中世の堆積層と考えられるので、古代の遺物については主なものを図示して簡単な説明を加えるにとどめておきたい。



第53図 石製陽物



第54図 (原寸)



第55図 第II層出土の中世陶器・青磁

中世陶器では大菱の口縁部 1 点のほか多数の体部破片が出土している(第 55 図)。1 は口径 56cm と推定される大獲である。内面下方には指でおさえた痕跡があるが、他の部分ではロクロ調整されている。体部破片の中には格子状の押印があるもの(2)、簾状の押印があるもの(3・4)などがみられる。体部片の多くは光沢のある赤褐色を呈する。

青磁では椀と皿がある(第 55 図・色 2)。5 は皿の底部である。みこみにヘラと櫛歯で唐草文状の文様を描く。体部下端と底部を回転ヘラケズリし、釉薬をかけた後、底部周辺を手もちヘラケズリをしている。釉は淡緑色の透明釉で、底部にはかけていない。胎土は白っぽい灰色である。6 は椀の破片である。底径は 54 cm を計る。底部は削り出しの蛇ノ目高台で上げ底風になる。釉は灰緑色で、器の全体にかかっている。胎土は灰白色を呈する。

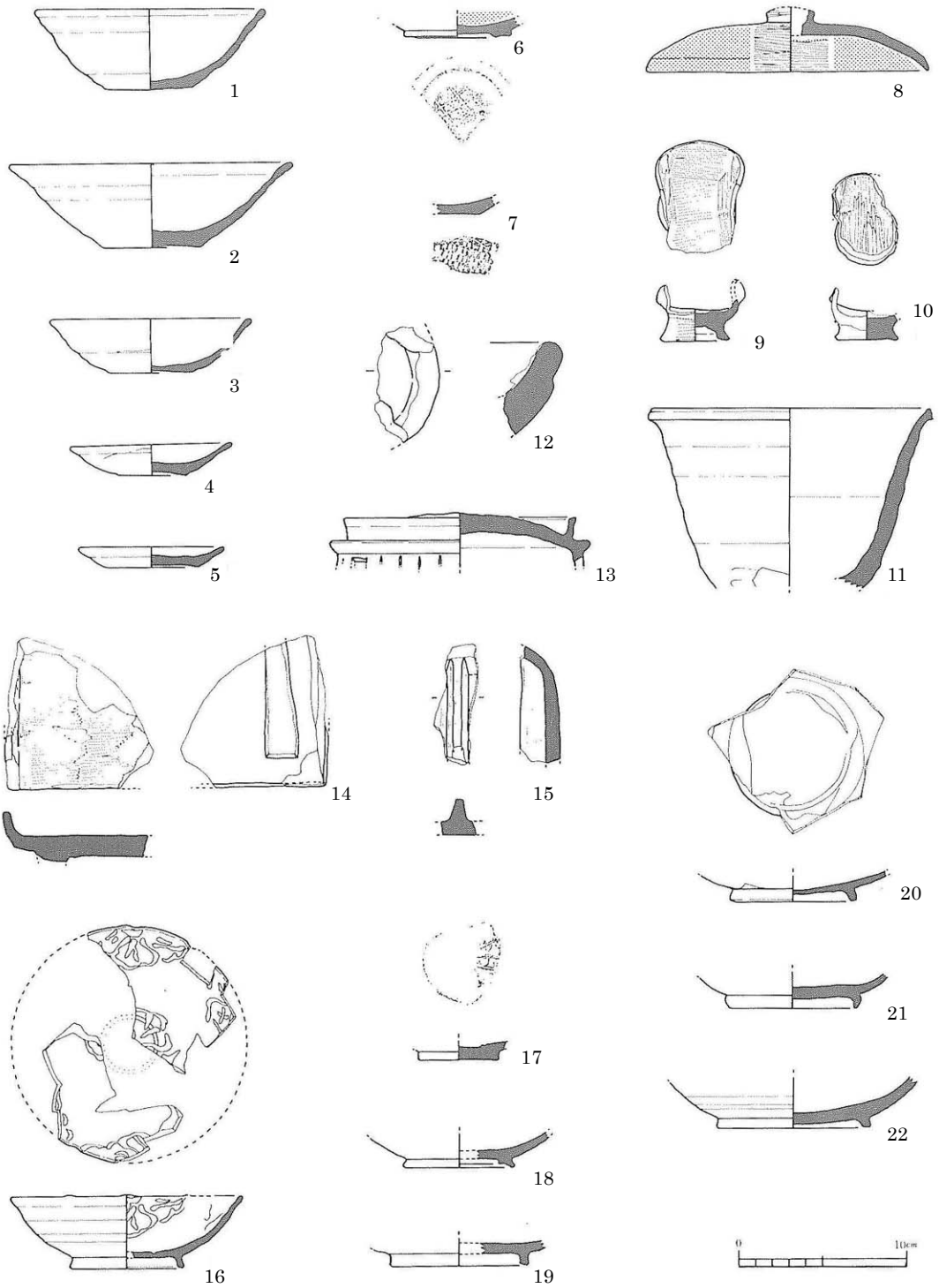
緑釉陶器は椀 48 点(うち底部 10)、段皿 1 点・耳皿 1 点・器形不明のもの 2 点が出土している(第 56 図、色 1、2)。16 は輪花の花文椀で、口縁部に外からわざわざかにおさえて輪花を表わす。口径 13.9cm、底径 6.8 cm、器高 4.3cm 程のものと推定される。底部から口縁部付近まで回転ヘラケズリした後、高台を付けている。内面中央に浅い沈線による円が刻まれている口ヘラミガキはみられない。全面に淡い黄緑色の釉をかけ、さらに内面に暗緑色の釉で宝相花文様を描いたものである。断面は灰白色を呈し、比較的硬く焼成されている。17 は削り出し高台の緑釉である。全面に黄緑色の釉がかけられており、断面は白色を呈し軟質である。内面に焼成後と思われる 3 本のヘラキズがみられる。18 は底部から体部下半を回転ヘラケズリした後、巾の広い高台を付けた椀である。全面に淡緑色の釉がかかる。

断面は灰色を呈し、焼成は堅緻である。19 は高台を付けた皿と思われる。全面にやや白味を帯びた黄緑色の粕がかかる。断面は明るい灰色を呈し、硬質のものである。

灰釉陶器には椀・皿・段皿・蓋があり、計 34 点出土している(第 56 図)。20 は付高台の皿である。内面の釉は底部で部分的に薄く、その周縁では厚く刷毛でかけられている。外面の粕は内行花文状にかかり、底部には及ばない。断面は灰白色を呈し、堅く焼きしまっている。なお、内面には同一規格の皿を重ねて焼いた痕跡がみられる。21 は底部を回転ヘラケズリして高台をつけた椀?である。内面にのみごく薄い灰釉がかかる。断面は灰白色を呈し、硬質のものである。22 は回転ヘラケズリ後、高台を付けたものである。外面には極めて薄し釉がかかり・内面には厚い釉がまだら状にかかって緑色を呈する。なお、底部には「とち」の痕跡がみられる。

須恵系土器では杯・高台杯・台付鉢がみられる。杯では、口径 12.5~15cm 程のものが多いが(第 56 図 1~3)、9cm 前後の小皿風のもの(4・5)もみられる。

土師器では蓋・杯・高台杯・甕・耳皿があり、ほとんどロクロ調整のものである。第 56



第 56 図 第Ⅱ層出土の遺物

1~5 須恵系土器、6~10 土師器、11 須恵器  
 12 りつば、13~15 硯(14・15 土師質)  
 16~19 緑釉陶器、20~22 灰釉陶器



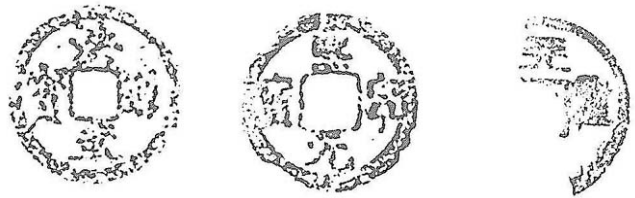
図 8 は全面をヘラミガキした蓋である。ミガキは内面中央で一方向、他は同心円状になされている。器面は全体として黄褐色で、部分的に黒色を呈する。おそらく火熱を受けて黒色がとんだものであろう。6 は内黒の高台杯底部に「井」状のヘラキズがみられる。7 は内黒杯の底部片で網代痕が残る。9・10 は黒色の耳皿である。9 は糸切底で内面のみをヘラミガキしたものである。10 は底部内側を除いて内外面をヘラミガキした高台付の耳皿である(図版 9)。

須恵器では、蓋・杯・高台杯・高杯・甕・瓶・鉢があるが、ほとんど小破片である。11 は内面が磨滅しており、すり鉢と思われる。

硯では須恵質の円面硯 4 点・風字硯 2 点と土師質のもの 2 点がある。13 の円面硯は、回転ヘラケズリされた陸がゆるやかに海に至り、その外側に高さ 1.2 cm の縁が付いたものである。脚部には長方形と思われる透しと、平行するタテのヘラキズがつけられている。14 は内面をヘラミガキ、黒色処理した土師質の風字硯である。裏面には巾 1.2~2.0 cm の長い台がつく。なお、側縁の内側には布目がかすかながら残っていることから、布をかぶせた型の上で成形されたものと考えられる。15 も内面にヘラミガキ、黒色処理を施した土師質の硯である。小片ではあるが二面硯と考えられる(図版 10)。

その他の土製品として、るつぼ(第 56 図 12・図版 10)と土鍾がある。るつぼは内面に厚く銅鐸が付着している。

銭では洪武通宝〔初鑄 1368 年〕  
熙寧元宝〔1068 年〕・天聖通宝



〔1023 年〕がある(第 57 図)。

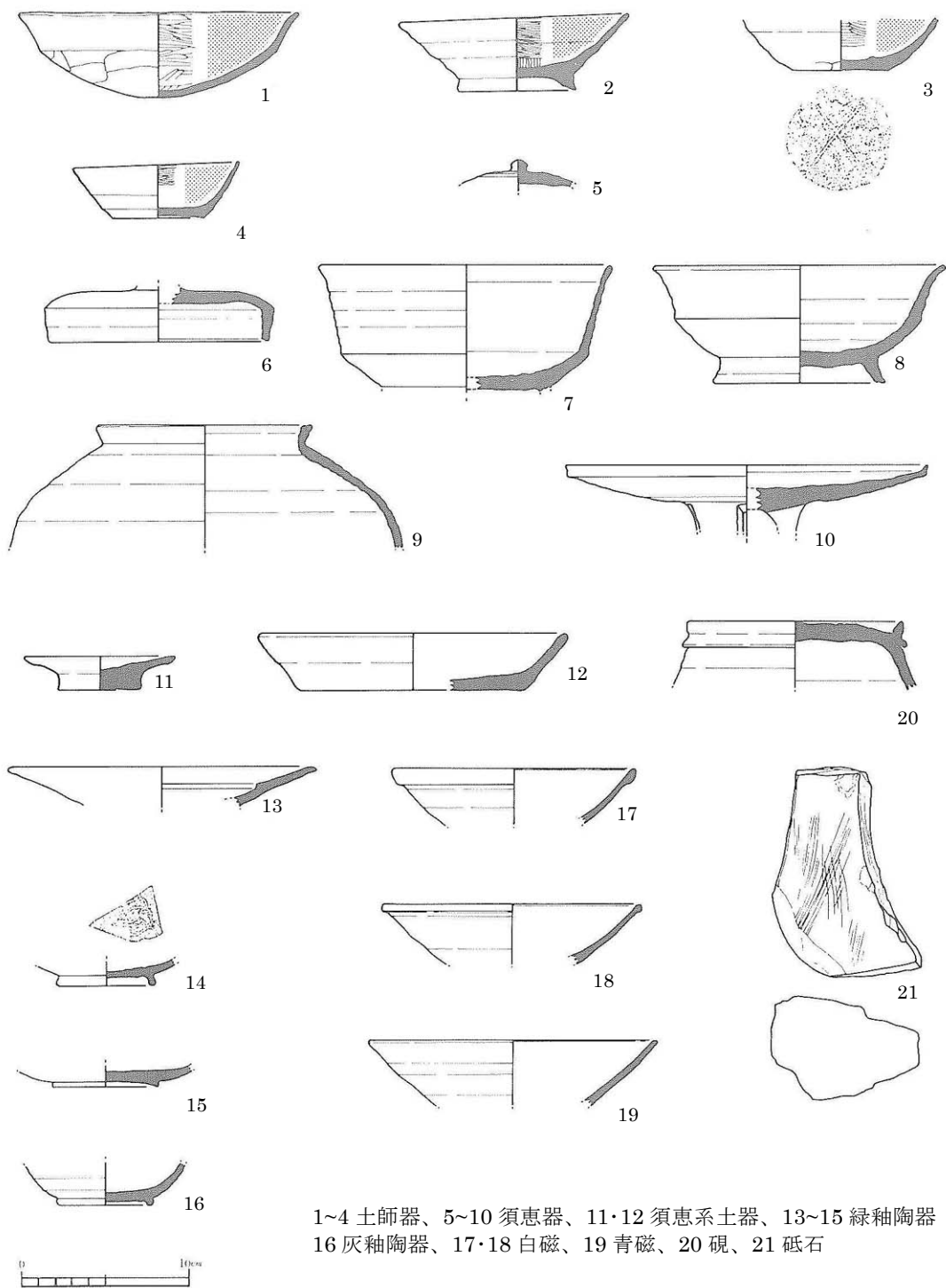
第 57 図 第 II 層出土(原寸)

(12)第 1 層の出土遺物(第 58~60 図)

第 1 層(表土)からは縄文、弥生時代と古代から現代にかけての遺物が出土している。主体は古代の土器と瓦である。ここでは主なものを図に従って説明しておきたい。

第 58 図 1~4 は内黒の土師器である。1 は丸底の杯で、体部下半から底部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデで仕上げている。2 は高台杯で、内面のミガキは底部を一方向に行い他はロクロ目に沿ってみがいている。3 は手持ヘラケズリされた底部にヘラ記号「×」が認められる。4 は体部下半から底部全体に回転ヘラケズリが及ぶものである。

同図 5~10 は須恵器である。5 は乳頭状のつまみがつく小型の蓋である。6 は短頸壺の蓋と思われる。7・8 は稜椀で、ともに底部に回転ヘラケズリ痕をとどめる。9 は短頸壺の破片で、口縁端部が比較的厚くなる。10 は高杯で、脚部には長方形と思われる透しが 4



第 58 図 第 I 層 (表土) 出土の遺物

個あけられている。

11・12 はロクロ調整で糸切り痕を残し、赤褐色を呈する皿と杯である。12 は図中で須恵系土器と、したが、より新しい時期のものかも知れない。

13～15 は緑和陶器である。13 は口径が 18.3 cm 程と推定され観段皿である。全面にていねいなヘラミガキを施した後に釉をかけている。釉は内面の段付近から内側で黄緑色を、他め部分では極めて淡い黄緑色を呈する。断面は明るい灰褐色を呈し、焼成は堅微である。14 は陰刻花文のある付高台の皿である。全面に暗緑色の緑釉がかかる。断面は暗い灰色を呈し・堅い焼きである(色 2)。15 は削り出し高台の皿である。全体に暗い黄緑色の釉がかかる。断面はやや黄味がかかった白色を呈し、13・14 の緑釉と比較すると軟質である(色 1)。

16 は灰釉の椀である。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを加え、高台を付けたものである。灰釉は内面にみられ、厚くまだらにかかっている。

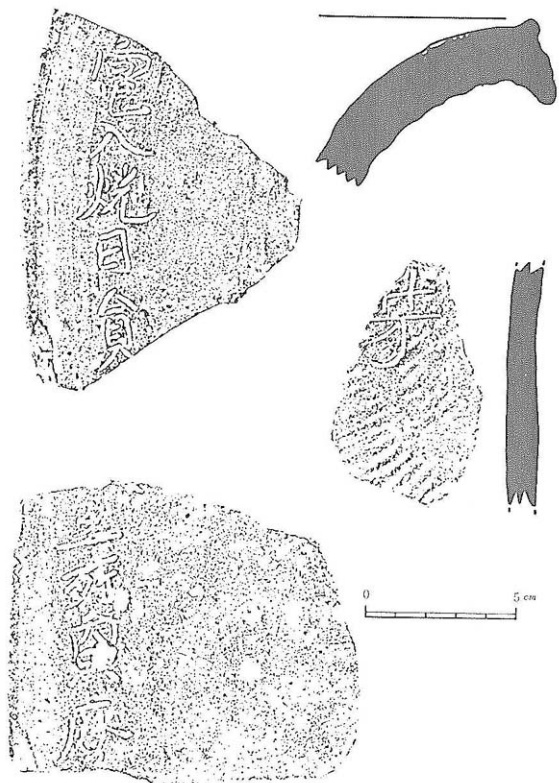
17・18 はともに玉縁状口縁を有する白磁椀である。17 は内面と外面の口縁部が白色を呈し、外面の他の部分ではやや灰白色味をおびる。断面も白色を呈する。18 は内外両面とも白色を呈するが、内面が平滑であるのに対し外面では若干凹凸がみられる。断面は器面の釉よりも白色が強い(色 2)。

19 は青磁の小片である。全体に灰白色を呈するが、内面では灰オリーブ色が平行にまじる。釉は薄く、貫入が著しい。断面は器面より白色に近い(色 2)。

20 は須恵質の円面硯である。破片からの推定であるが、透しならびにヘラによる文様はみられない。

21 は 4 面に使用痕が残る砥石である。頁岩製かと思われる。

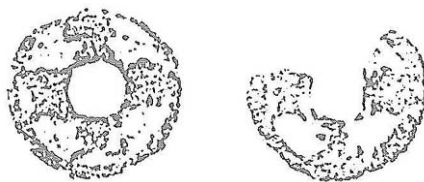
このほか、ヘラ書きの須恵器が 2 点出土している(第 59 図・図版 10)。1 は平行叩き目のある甕体部破片に「芳」がヘラ書きされたものである。2 は大甕の口縁部の内側に「竈入焼日員」とヘラ書きされている。かつて五万崎地区で「口所寅磨」とヘラ書きされた同様の須恵器甕が表採されているので、参考に図示しておく。拓本・断面図



第 59 図 ヘラ書き須恵器

を見る限りでは両者は極めて似ており、同一個体である可能性が高い。

錢貨では、宋通元宝〔初鑄 960 年〕と景德元宝〔初鑄 1004 年〕が各 1 枚出土している(第 60 図 1・2)。



第 60 図 第 I 層出土(原寸)

## B 土器・瓦のまとめ

前節では遺構・層ごとに出土遺物を述べてきたが、ここで土器と瓦の全体な様相をまとめておきたい。なお、瓦についてはほとんどふれていないので、若干詳しく記載する。

### (1)土器

今回出土の土器では、大木 2b、大木 8b 式の縄文式土器・弥生式土器・南小泉式の土師器と鎌倉から室町時代と思われる中世陶器が含まれているが、主体は古代のものである。

古代の土器では土師器・須恵器・須恵系土器・緑釉・灰釉・青磁・白磁がみられる。このうち土師・須恵器・須恵系土器の 3 者を杯・高台杯の底部数で比較し、切り離し、調整の観察点を加えると次表ようになる。

表 5 第 28・29 次調査の杯・高台杯

	須恵器	土師器		須恵系土器
		表杉入式	国分寺下層式	
杯				
糸切+無調整	189	1,512	6	1,668
糸切+手持ちへら削	11	9		
糸切+回転へら削	2			
へら切+無調整	305	4		
へら切+手持ちへら削	13			
へら切+回転へら削	2			
? +手持ちへら削	13	192		
? +回転へら削	13	96		
静止糸切+手持ちへら削		2		
摩滅のため不明		1,053		
小計	548(10.8%)	2,867(56.4%)	6(0.1%)	1,668(32.8%)
高台杯	72	10		29

注 ?は切り離し不明

上表から、まず土師器が 6 割弱、須恵系土器が 3 割と多く、須恵器が 1 割で少ないことがあげられる。次に、土師器には国分寺下層式が若干みられるが、大多数はロクロ調整の

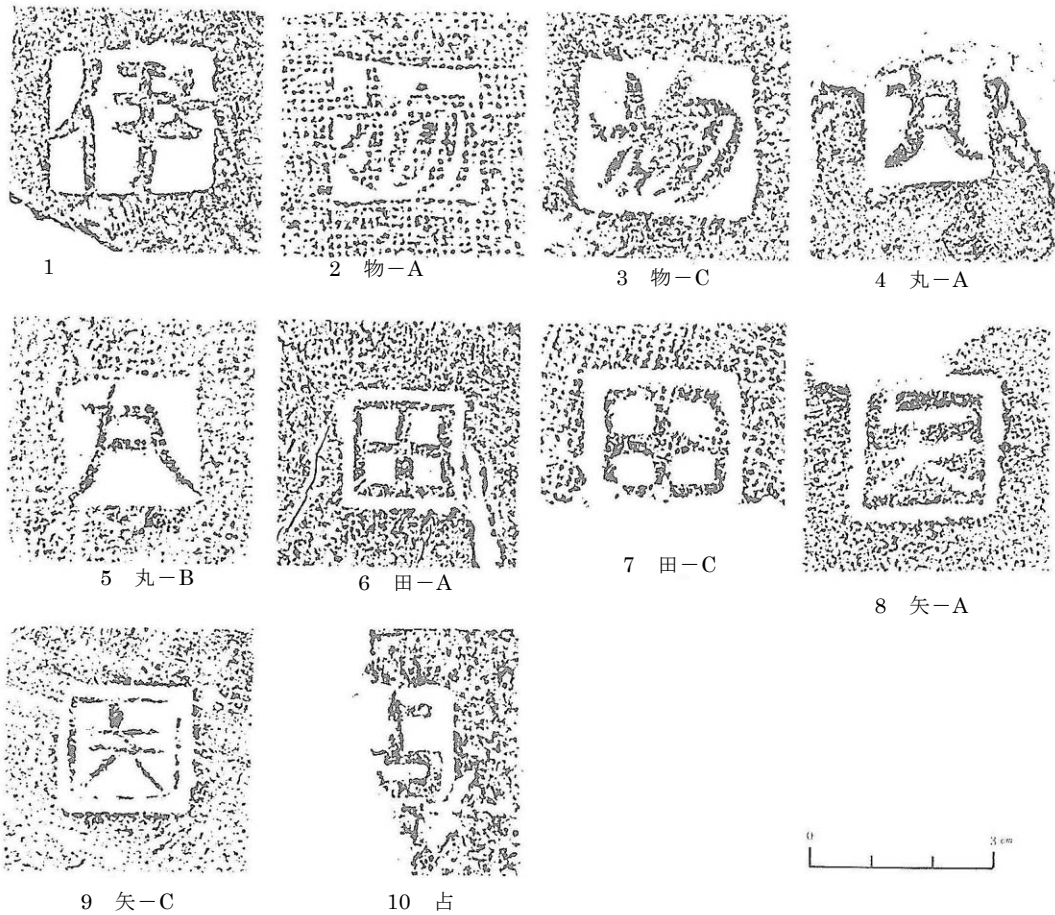
表杉ノ入式の杯である。ロクロ土師の中では回転糸切りで調整のないものが圧倒的に多くわずかにヘラ切りと静止糸切りの杯がみられる。須恵器杯ではヘラ切りで調整のないものが6割弱と糸切りで調整のないものが3割強と多く、わずかながらケズリ調整のものがみられる。

緑釉陶器は破片数で155点、灰釉陶器が126点が出土した。当遺跡でこれ程まとまって出土した例はなく、注目される。

なお、IS08-2層からはヘラミガキか施された特殊な須恵器が一括して出土している。この点についてはVI考察で詳述する。

(2)瓦

瓦では軒丸瓦・軒平瓦のほか多量の平瓦・丸瓦が出土している。今までに軒瓦と文字瓦の抽出作業が完了しているが、平瓦類について詳細な検討を加えるに至っていない。

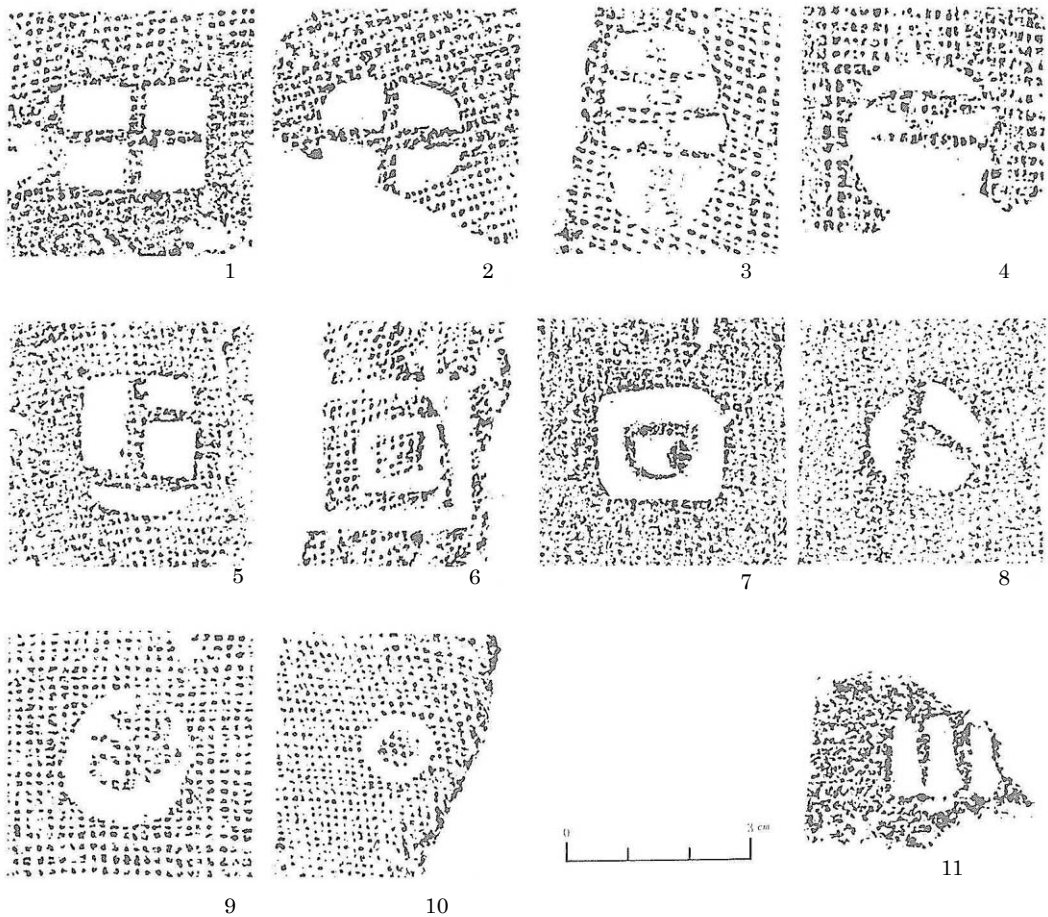


第 61 図 第Ⅱ期刻印文字瓦

軒丸瓦は 13 点出土している。その内訳は分類番号(註 1)210 と 220 が各 2 点、410 と 452 が各 1 点、427 が 3 点、不明が 6 点である。

軒平瓦は 34 点出土し、511 が 9 点、620 が 2 点、640 が 16 点、650 が 1 点、721-B が 2 点、911 が 1 点、不明が 3 点である。

刻印瓦では軒平瓦 640 に伴う第Ⅱ期刻印瓦 52 点、第Ⅲ期刻印瓦 1 点と第Ⅳ期刻印瓦工 3 点が出土した(第 61・62 図)。第Ⅱ期刻印文字瓦の内訳は、**伊**が丸瓦に 12 点(第 61 図 1)。**物**A が平瓦に 13 点(2)、**物**C が平瓦に 3 点と軒平瓦 640 に 1 点(3)、**丸**A が平瓦に 1 点(4)・**丸**B が平瓦に 3 点(5)、**田**A が丸瓦に 4 点(6)、**田**C が平瓦に 4 点(7)・**矢**A が平瓦に 4 点(8)、**矢**C が平瓦に 1 点(9)、**占**が丸瓦に 4 点(10)、**?**の平瓦 3 点である。第Ⅲ期瓦では、平瓦の木口面に平行する 3 本の短線を押ししたもののが 1 点みられる(第 62 図 11)。第Ⅳ期の刻印瓦は第 62 図に示したように記号を主体としたもので、いずれも平瓦凹面に押しされ

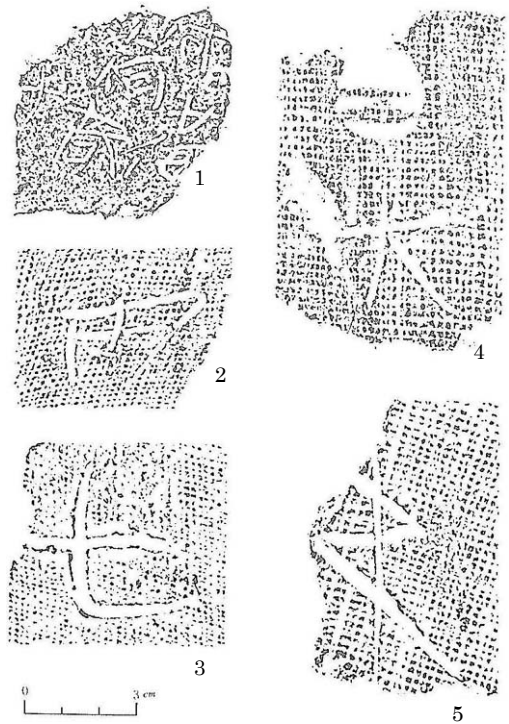


第 62 図 第Ⅲ・Ⅳ期刻印瓦

ている。出土点数は図1・2が各2点、3~9が各1点のほか記号部分が判然としないもの2点である。

へら書き瓦では第63図のようなものがみられる。1は丸瓦の玉縁はへら書きされたもので、「荷」が4ヶ所に認められる。2は丸瓦凹面に「田」が記されている。3の「七」、4の「大」、5は第IV期平瓦の凹面にみられる。4の「大」は前述した第IV期記号刻印と並べて記されている。なお、出土点数は「七」が2点のほかそれぞれ1点である。

以上のように、第I期から第IV期までの瓦がみられるが、第II・IV期の瓦が多くを占めていると思われる。



第63図 へら書き瓦

註1.『多賀城跡一昭和45年度発掘調査概報』1970年宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

## VI. 考 察

遺構・遺物の事実関係はすでに述べたとおりである。ここでは、調査の成果のまとめとして、事実関係の整理と、そこから派生する若干の問題について考察する。

まず、五万崎地区が郭を構成するか否かの問題である。現地形では南辺・西辺の多賀城外郭線の他に、東辺、北辺にも築地状の高まりがあるが、調査の結果、北辺のそれは現代のものであった。しかし、東辺の高まりは道路で切断されている箇所での断面観察では、粗い版築が認められ、少くとも東辺のそれは古代の築地とみてよさそうである。したがって四至が築地で囲まれているとすれば、北辺のそれはより北になり、郭はもつと広いものになる(註 1)。

次に建物跡について述べる。第 7 図に示したように、建物跡の分布は第 28 次調査地区内で数が多く、しかも複雑に重複して、密集する状況にあるのに対し、東辺築地寄りの第 29 次調査地区内では極めて希薄である。第 28 次調査地区はこの郭内の東西方向では、ほぼ中央部付近にあたる。すなわち、占地及び土地、空間の使い方として、中央部付近を集中的に使うあり方が指摘できる。

建物跡群の変遷については複雑な切り合い関係があるため明確には遺構期区分ができない。しかし、建物の柱穴埋土中に焼土を含むものと、含まないものの二群が存在することや、柱穴の切り合い関係などの諸要素を加味すれば、第 28 次調査地区内の建物跡群はほぼ下表のように時期的に 3 群に区別して理解できる。

表 6 建物跡の時期変遷

遺構期	1 期	2 期	3 期
柱穴埋土	埋土に焼土含まず	埋土に焼土含む	黒色土
建物跡の 切り合い	SB877 .....> SB876 SB878 SA879 → SA880 → SA881		
	SB894 .....> SB893 .....> SB887	SB892→SB891→SB890→SB889	SB888
	SB922	SB899 SB897→SB896→SB895	SB898
→直接的な切り合い。      .....>間接的な前後関係。			

1 期の建物跡群に共通する要素は柱穴埋土中に焼土が含まれない点である。SB877 建物



跡と SB878 建物跡は柱穴の規模、形状や柱間寸法が酷似し、両建物跡の柱筋が通ることから、同時存在している可能性が強い。あわせて、SA879 柵跡は両建物間には柱穴がなく、切れていることから、両建物と共存し、その南を遮閉した施設と考えられる。また 1 期の建物跡群の中で、SB887 建物跡の西側柱と SB894 建物跡の東側柱間の距離は 1m しかなく両建物が共存するとは考えられない。距離の点から見て、SB887 建物跡と共存する可能性があるのは SB893 建物跡である。SB922 建物跡はこれと切り合う諸建物跡の中では最も古く、柱穴埋土に焼土が含まれない点で 1 期に属するものといえよう。しかし、この 1 期の建物跡には前後関係を有するものがある。すなわち、SB877 建物跡と SB876 建物跡との間には盛土整地層を媒介にして、前後関係が成立するし、SB894 と SB893 両建物跡とは直接的に切り合っている。したがって、1 期はさらに前後の時期に二分できるが、個々の建物跡がそのどれに属するかの確証はない。2 期の建物跡の柱穴中に焼土を含むことから 1 期後半の建物跡群が火災に遇っている可能性が強い。

2 期の建物跡群の柱穴に共通する要素は中に焼土を含むことである。とくに、SB892・897 建物跡の柱穴中には焼土が多く含まれる。複雑な切り合い関係があるが、個々の組み合わせ、つまり共存関係についてはわからない。

3 期の建物跡群は柱穴の形状が小型であり、埋土が木炭を含む黒色土である点に特徴がある。SB888・898 建物跡がこの期のものに属し、切り合い関係から見ても最も新しい一群である。層位関係より古代に属することは間違いない。

第 28 次調査地区内の古代の建物跡は上記のように 3 期に大別できる。遺構の中で、特に注目できるものに SA879・880 柵跡がある。この構造は官衙ブロック内の小区または建物を遮閉する施設として、都宮や地方官衙等に一般に知られているが、多賀城内では、これまで発見されなかったものである。その点で城内の官衙内の小区を把握する上では新しい資料といえよう。

さらに重要なことは、建物跡群の所属年代にある。建物跡の多くが、須恵系土器を包含する第Ⅲ層の整地層上に建てられていることや、柱穴埋土中の遺物と切り合い関係等の要素を総合すると、第 28 次調査地区内の SA882・883 柵跡、SB884 建物跡、第 29 次調査地区内の SA957 柵跡、SB958～960 建物跡を除くすべての建物跡に須恵系土器以降の年代が与えられる。須恵系土器の所属年代については多賀城跡第 15 次調査で、第Ⅳ期の灰白色粘土層の直下より、須恵系土器と伴出する灰采由瓶をもって、11 世紀初頭の年代が与えられている(註 2)。多賀城外郭官衙地域のこれまでの調査では、須恵系土器の時期、すなわち、11 世紀以降の建物跡群で構成するような官衙は発見されていなかった。そのため、律令体制が衰退するこの時期には多賀城も衰退に向うのではないかと考えられていた。その

点ではこの時期に五万崎地区に官衙が造営され、しかも活発に活動していることには大きな意義がある。

建物跡の方向についても斉一性がある。二、三の例外を除くと、ほとんどの建物跡の方向が、周囲の外郭線築地のそれには規制されず、発掘基準線にほぼ一致する。発掘基準線は、この地区の東北約 400m にある政庁中軸線を基にしている。

出土遺物の中で特に注目すべきものに IS082 層より出土した一括の土器類がある。特異な出土状況なので、重複するが、詳しく述べてみよう。IS082 層は須恵系土器を包含する第Ⅲ層の盛土整地層を掘り込み地業し、その上に設けた SX912 鍛冶遺構を覆う層である。すなわち、古い順に述べると、第Ⅲ層→掘り込み地業→SX912 工房跡→IS08 2 層→第Ⅱb 層→第Ⅱa 層になる。第Ⅲ層中には須恵系土器が含まれるので、当然 IS08 2 層は須恵系土器以降の堆積層になる。この層はこの地点に限って、直径 4m 前後の範囲で確認される。堆積の状況も、第Ⅲ層が落ちる肩部から堆積して、掘り込みも認められず土拵状のものではない。この層中に限って極めて多量の土器が完形に近い状態で出土している。出土土器の器種、数量は表 4 のとおりである。土器の種類には土師器、須恵器、須恵系土器がある。杯についてみると、土師器では国分寺下層から表杉ノ入式までが、須恵器ではへら切りで調整を加えたもの、へら切り非調整のもの、糸切り非調整のもの、須恵系土器では杯・高台杯がある。須恵器、須恵系土器の杯を中心とした編年では、へら切りで調整するもの→へら切り非調整のもの(8C 後半～9C 中頃)→糸切り非調整のもの(9C 後半～10C)→須恵系土器杯(11C 以降)の順になっている(註 3)。IS082 層の土器のうち 8 世紀後半～9 世紀前半に編年される須恵器のへら切り非調整の杯が圧倒的に多い。これらの土器が 11 世紀初頭以降の地層より完形品に近い形で一括して出土する現象は極めて特異である。

すなわち、この場合の出土状況は、一般的な土器のもつ時期的な周期、つまり、土器の生産、使用、廃棄の年代がほぼ一型式内におさまるというサイクルから大きく逸脱しているものといえよう。須恵器の中では器の内外面を丁寧にへらミガキした一群が注目される。器種としては蓋・稜椀・高杯など供膳形態に限られる。その分布もこの IS082 層に集中し、他は調査地区全体を含めても数片を数えるにすぎない。このような土器の出土状況と IS08 2 層の限られた分布より、これらの土器は IS08 2 層の土と伴に一括投棄されたものと解される。その廃棄の年代は、須恵系土器以降の、この地区の官衙の機能が停止した頃と考えられる。とすると、これらの一群の土器は、かなり特殊な使われ方をされ、ある期間、保管されていたことを暗示する。

これに加えて、緑釉・灰釉陶器の出土量が特に多い。この現象はこれまで調査した多賀

城外郭官衙地域のあり方とは異なり、非常に特色がある。すなわちこの官衙を含めて、付近に儀式に深い係わりをもつ官衙の存在が予想される。なお、遺物の中には第Ⅱ期の平瓦や国分寺下層式土師器など奈良時代後半に属するものがかかなりある。それに伴う遺構は今調査地にはないが、調査地区の北にある平坦な地域に存在する可能性が大きい。

古代の官衙群が廃絶した後、中世陶器を含む、かなり厚い自然堆積層が形成されている。したがって、中世のある時期までは、この地域が余り使用されなかったようである。

註 1 大正 14 年 7 月発刊の史跡陸前多賀城跡平面図には東辺の築地状の高まりが、北辺の高まりとの交点より更に北に延びているよう図化されている。伊東信雄「古代の城塞、東日本」日本の考古学Ⅲ所収 P155 の多賀城跡平面図はこれと同一のものを縮小したものである。

註 2 灰白色粘土の盛土整地層直下より出土した灰釉瓶の年代については檜崎彰一氏の教示による。

註 3 多賀城跡出土の須恵器杯を中心にした編年関係については、岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」当研究所、研究紀要 1 所収に詳しい。

## VIII. 付 章

### A. 調査成果の普及と関連研究活動

#### (1) 現地説明会の開催

当研究所は、発掘調査を進めるとともに、その成果を一般の人々に理解してもらうため現地説明会を開催している。本年度は昭和 51 年 7 月 24 日に「第 28 次発掘調査について」という内容で進藤秋輝が行なった。

#### (2) 伊治城跡推定地の発掘調査

多賀城に関連する古代遺跡の発掘調査について、当研究所では、多賀城関連遺跡第 1 次 5 ヶ年計画を立てて、昭和 49 年度から調査に着手している。本年はその第 3 年次として、宮城県栗原郡築館町城生野に所在する推定伊治城跡の 1000 分の 1 地形図を作成した。

#### (3) 他機関の発掘調査への協力

##### 1. 亀岡遺跡

所在地 宮城県桃生郡鳴瀬町野蒜亀岡

期 間 昭和 51 年 4・5 月

協力所員 桑原滋郎、高野芳宏

##### 2. 郡山台遺跡

所在地 福島県二本松市杉田

期 間 昭和 51 年 5 月、7・8 月

協力所員 進藤秋輝

##### 3. 宮沢遺跡

所在地 宮城県古川市宮沢

期 間 昭和 51 年 6 月、8 月

協力所員 桑原滋郎

##### 4. 払田柵遺跡

所在地 秋田県仙北郡仙北町

期 間 昭和 51 年 7 月

協力所員 氏家和典

##### 5. 色麻一の関遺跡

所在地 宮城県加美郡色麻村一の関

期 間 昭和 51 年 7 月、9 月

協力所員 氏家和典、桑原滋郎

## 6.堂ノ前遺跡

所在地 山形県飽海郡八幡町

期 間 昭和 51 年 8 月

協力所員 桑原滋郎

## 7.関和久遺跡

所在地 福島県西白河郡泉崎村

期 間 昭和 51 年 10 月、11 月

協力所員 氏家和典、桑原滋郎、進藤秋輝、平川南、高野芳宏、鎌田俊昭、古川雅清

## 8.座散乱木遺跡

所在地 宮城県玉造郡岩出山町

期 間 昭和 51 年 10 月 29 日～11 月 4 日

協力所員 鎌田俊昭

### (4)第 3 回古代城柵、官衙遺跡検討会への参加

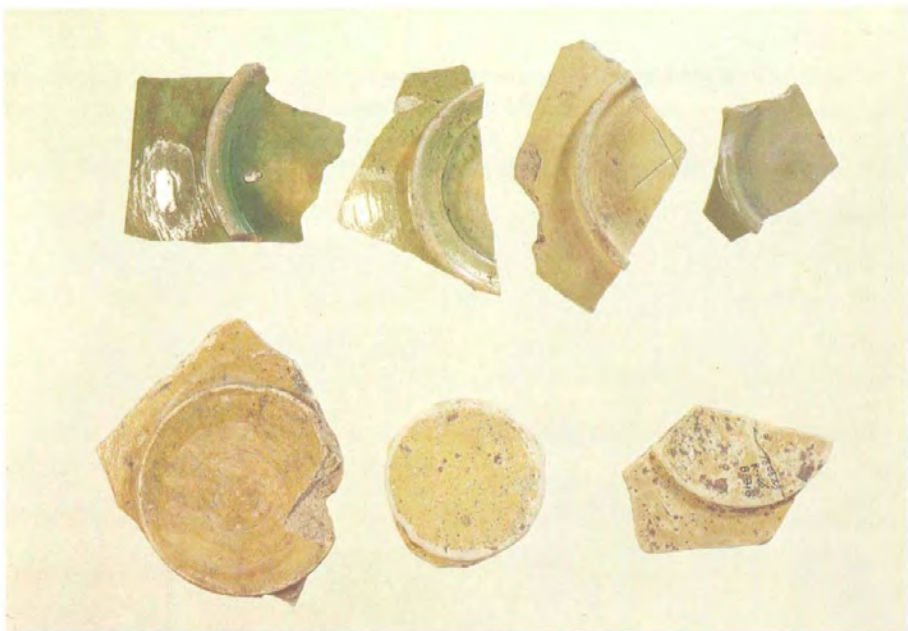
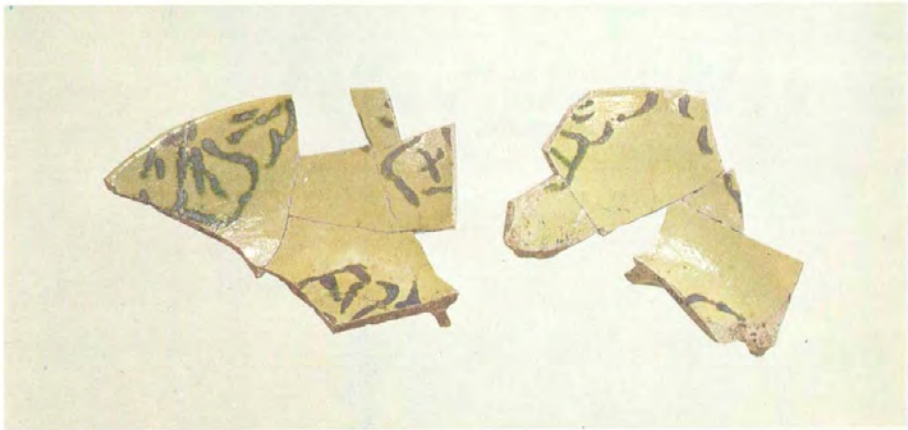
昭和 52 年 2 月 5・6 日(於東北歴史資料館)

東北地方の各地で古代の城柵または官衙の調査が活発に行われ、新たな資料が数多く発見された。今回は古代城柵、官衙遺跡検討会の第 3 回目として、各遺跡の内郭地区の調査成果の紹介とその性格や歴史的意義の検討が主要なテーマとなった。その結果、各遺跡の担当者以外にも 100 名以上の参加者があり、盛会であった。なお、九州歴史資料館調査課長石松好雄氏の『大宰府史跡の発掘調査』と題する講演があった。本会で報告のあった遺跡と報告者は、つぎのとおりである。

遺跡名	報告者
秋 田 城 跡	秋田城跡調査事務所 小松 正夫
払 田 柵 跡	払田柵跡調査事務所 畠山 憲司
城 輪 柵 跡	酒田市教育委員会 小野 忍
徳 丹 城 跡	岩手大学 佐々木弘泰
胆 沢 城 跡	水沢市教育委員会 伊藤 博幸
桃 生 城 跡	多賀城跡調査研究所 進藤 秋輝
多 賀 城 跡	多賀城跡調査研究所 桑原 滋郎
方 八 丁 遺 跡	岩手県文化財保護課 瀬川 司男
宮 沢 遺 跡	宮城県文化財保護課 平沢栄二郎

## B.研究成果刊行物

- 1.宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975
- 2.研究紀要Ⅲ「東北地方における城柵の外郭線の構造一特にいわゆる柵木について」  
桑原滋郎  
「多賀城内発見の竪穴住居跡」菊田徹  
「多賀城の文字瓦(その1)」高野芳宏、進藤秋輝、熊谷公男、渡辺伸行
- 3.「古代の白河郡について」福島県文化財調査報告書第54集、関和久遺跡Ⅳ 平川南
- 4.「陸奥、出羽官衙財政について一いわゆる『征夷』との関連を中心として」歴史第48  
輯所収 平川南
- 5.「関東、東北地方における先土器時代中期石器文化の地域性と共通性(2)一『型式論成  
立のために一』物質文化26所収 鎌田俊昭
- 6.「須恵系土器について」東北考古学の諸問題所収 桑原滋郎
- 7.「東北地方の平瓦桶型作り技法について」東北考古学の諸問題所収 進藤秋輝



### 緑釉椀

SB898 建物跡柱穴埋土出土

### 緑釉花文椀

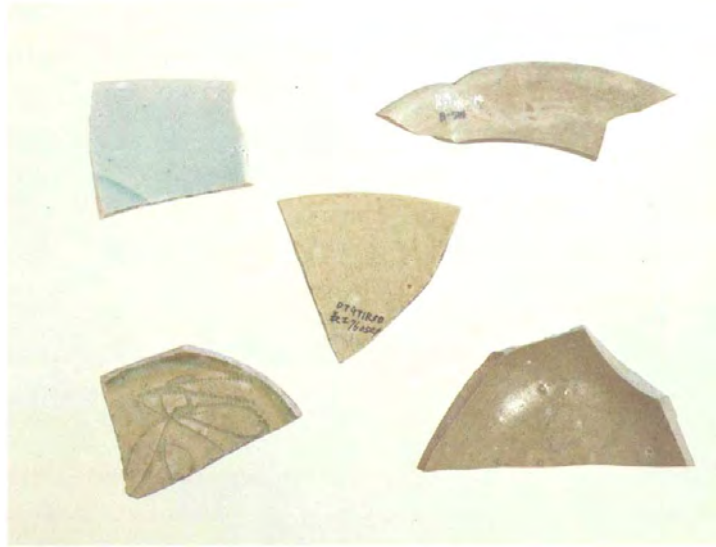
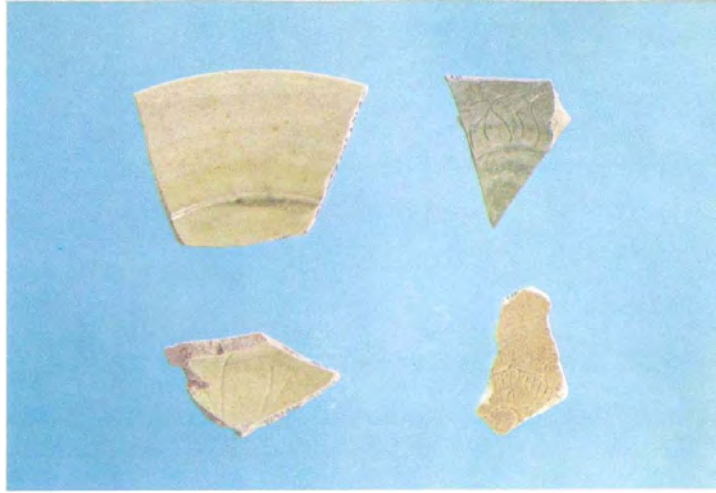
淡緑色の釉を塗布し、上に濃緑色の釉で宝相花文を描く。第 2 層出土。愛知県鳴海窯産。

### 緑釉高台部分

上列 つけ高台(濃緑色)

下列 削り出し高台(淡緑色)





上段左 緑釉段皿 表土  
" 右 緑釉花文皿 表土  
下段左 緑釉花文耳皿 第Ⅱ層  
" 右 緑釉花文片 表土

青磁片

白磁片

上段と下段左は同一個体の  
破片



図版 1 第 28 次調査地全景

上 28 次調査地区の北半部(南より)  
下 28 次調査地区の南半部(南より)



**図版 2 第 28 次調査**

上 SB876 建物跡(東より)

下 SI906 竪穴住居跡(東より)



**図版 3 第 28 次調査**

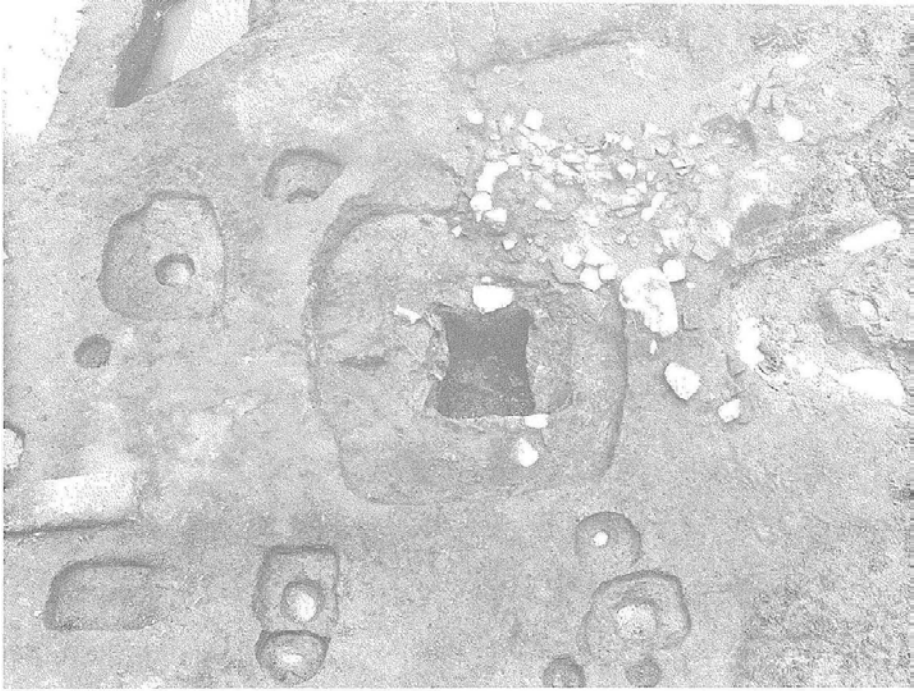
上 SB888～SB894 建物跡(北より)

下 SB922・895～899 建物跡(南より)



**図版 4 28 次調査**

上 SX912 工房跡、SA886 柵跡、SB887 建物跡(東より)  
下 SX912 工房跡(東より)

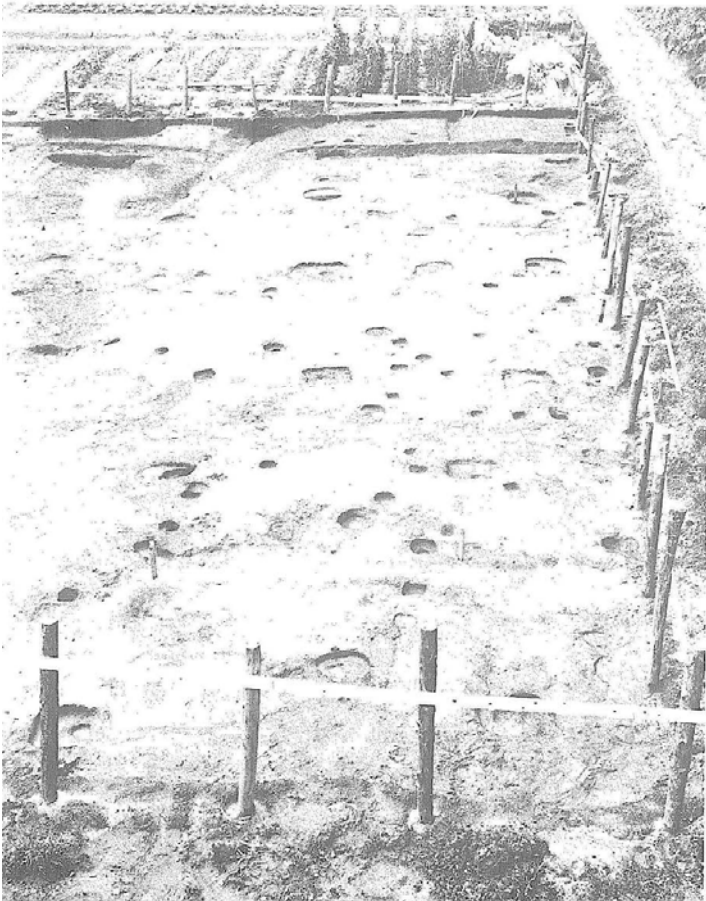


**図版 5 第 28 次調査**

上 SE921 井戸跡

下 同井戸跡の構造





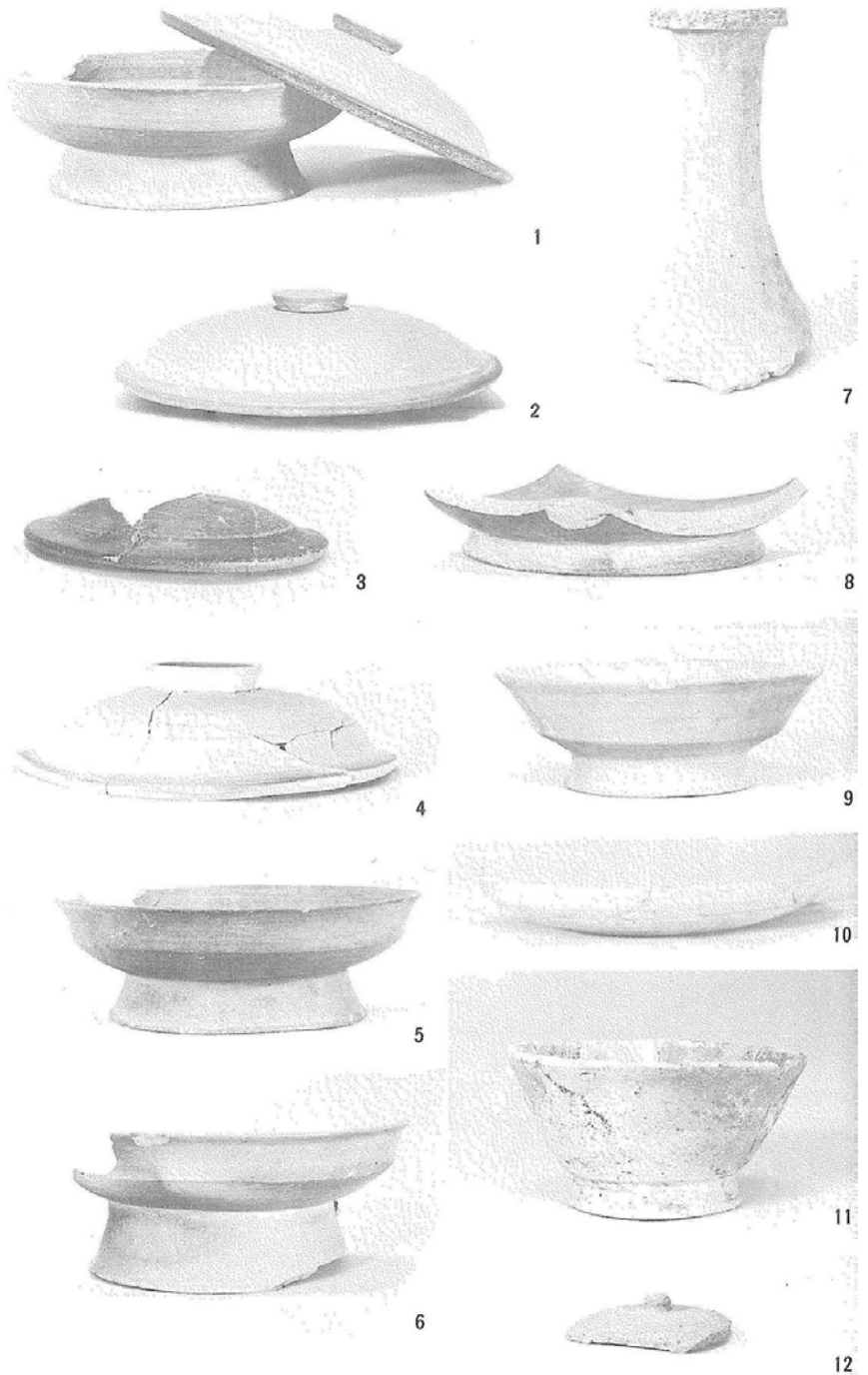
**図版 6 第 29 次調査**

上 SA957 柵跡

SB958 建物跡(西より)

下 SB959、960 建物跡(南より)



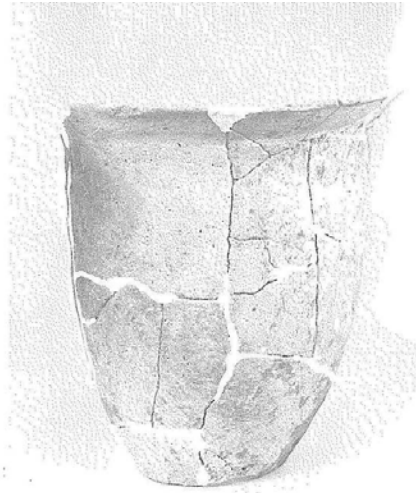


図版 7  
 第 28 次出土  
 須恵器  
 1~8 ミガキの  
 須恵器

- 1 第 47 図 1・5
- 2 第 47 図 1
- 3 第 47 図 3
- 4 第 47 図 2
- 5 第 47 図 4
- 6 第 47 図 5
- 7 第 47 図 8
- 8 第 47 図 9
- 9 第 48 図 13
- 10 第 41 図 5
- 11 第 52 図 3
- 12 第 58 図 5



1



2



3



4



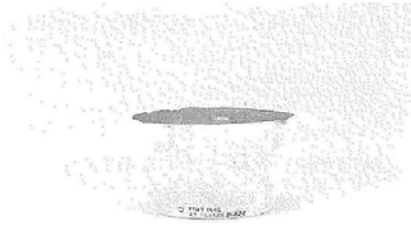
5



6

図版 8  
第 28 次出土  
土師器カメ

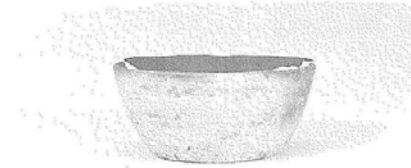
- 1 第 51 図 10
- 2 第 51 図 8
- 3 第 51 図 9
- 4 第 49 図 20
- 5 第 49 図 14
- 6 第 49 図 19



1



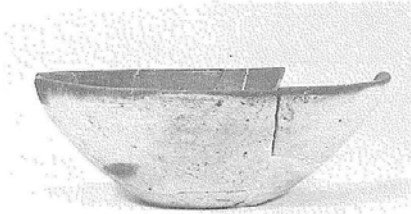
7



2



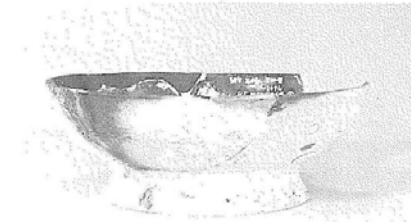
8



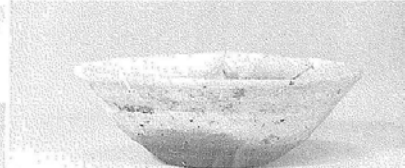
3



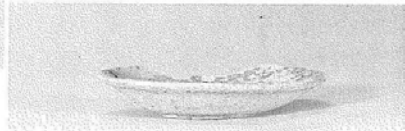
9



4



10



11



5



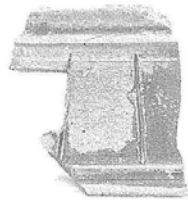
6

図版9 第28-29次出土  
土師器

- 1 第49 図 6
- 2 第49 図 3
- 3 第51 図 1
- 4 第49 図 13
- 5 第41 図 6
- 6 第49 図 15
- 7 第51 図 4
- 8 第44 図 6
- 9 第56 図 9
- 10 第56 図 1
- 11 第56 図 4



1



2



3



4



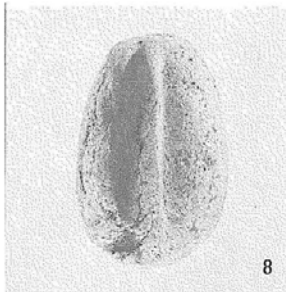
5



6



7



8

図版 10  
第 28・29 次出土  
遺物

- 1 第 59 図 1
- 2 円面硯
- 3 上第 56 図 15
- 下第 56 図 14
- 4 第 42 図 4
- 5 第 52 図 17
- 6 第 53 図
- 7 第 56 図 12
- 8 右第 41 図 10
- 中第 42 図 5
- 左土錘第 II 層

---

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976

多 賀 城 跡

—昭和 51 年度発掘調査概報—

昭和 52 年 3 月 25 日印刷

昭和 52 年 3 月 31 日発行

発行者 宮城県教育委員会  
宮城県多賀城跡調査研究所  
宮城県多賀城市浮島字宮前 133  
TEL (02236) 5-0101  
印刷所 小泉印刷株式会社

---

---